を與へ、それから入口の斜面にある櫻林が第二の美觀を現はし、更に山中に深く入るか又は谷間に下りて見ると彼方此方にある櫻が特殊の美觀を呈する。

霞間ヶ谷の櫻は少數の彼岸性のものを除く外は純然たる山櫻で、何れも此地方に野生して居る品種に屬する。赤芽・茶芽・黄芽などが色々入交り、又中には花の八重になりかゝつて居るものもある。若葉が極めて赤く、花が純白で大きく、甚だ美しいものが處々に見られる。

此處の櫻の來歴は能く分つて居ないが、古來此地方に於て山櫻が多く生えて居つたことは疑ひがない。古い記錄に依ると安永九年と天明二年の兩度に此山に於て鎌留があつた爲に、立木は勿論下草までも取ることを禁ぜられ、隨つて樹木が能く茂り、鬱蒼たる森林を形造つて居た。是が爲に山中の櫻も十分に成木し、大きな立派な木になり、花盛りの頃には彼方此方から花見に來た者も多かつた爲に、次第に此地が現れて來たのである。無論此處にある櫻は自生したものばかりではなく昔から植ゑられたものがあつたことは疑ひがない。殊に山の低い所などにあつたものは植ゑられたのである。

舊時の傳說に依れば昔の時代に水害があつて山拔けがした時に、土地の人が稗を多く蒔いた。それが爲に小鳥が多く來て稗を喰ひ、又同時に山の奥から櫻の實を持つて來て、落した爲め、櫻が多く生えたと言はれて居る。斯樣な事があつたか無かつたかは姑く措き、兎に角小鳥が實際櫻の實を彼方此方に蒔き散らして諸處に櫻の實生が出來ることは吉野の山中に於ても知られて居ることで、決して根據の無いことではない。併し霞間ヶ谷に今日の如き櫻が多いのは、多くは後世になつてから植ゑたものである。

昔の時代にあつた大木は明治の中頃までは殘つて居たといふことであるが、段々に朽ち枯れて現時に於ては甚だ少くなつた。明治維新以後留山の禁制が弛んでから、樹木が伐られた爲に、櫻も甚しく損じて來て其數が減り又枯れたものが多くなつた。明治二十二年には土地の有志者が山櫻を植ゑ、又三十三年になつて吉野の櫻を移して植ゑて、今日では其數が甚だ多くなつたが、併しまだ木が新しい爲に十分の美觀を呈するまでになつて居ない。

霞間ヶ谷の保存　霞間ヶ谷は吉野・嵐山・小金井などの如く櫻の名所として現はれて居なかつたから、一般に人の知る所とならなかつた。唯此地方の人が昔から花見に來たのに過ぎない。文政の頃には大垣の江馬細香が花見に來たことがあり、山本梅逸・野村藤陰・竹中金谷などの畫家・學者・文人などが來て花を賞したことが知れて居る。今日では交通機關の便がある爲に、土地の人は勿論遠方の人も此處へ觀櫻に來るやうになつた。

段々に土地が開けるに隨つて名勝地の保存が困難になることは何れも一樣である。それで今此霞間ヶ谷の風景と櫻の保存に就ても十分に注意しなければなるまい。大正五年には土地の有志者に依

て霞間ヶ谷保勝會が設けられ、此勝地を世に紹介することに努めるやうになつた。斯かる保勝會の出來たことは同地保存の爲には喜ぶべきことではあるが、併し從來名勝の保存に就ては往々誤解があつて、唯土地の發展を期することを眼目とする爲に、盛に道路を開き、それが爲に山を崩し、谷を埋め、木を伐り、又旅館を設け、其結果として極めて俗惡なる場所になることが少くない。岐阜縣下に於ても養老の公園などは已に此趣がある。該地は以前は閑靜の勝地で天然の風景が能く保たれて居たが、今日では土地發展の爲に風景が毀損され頗る俗化してしまつた。斯かることになつては名勝保存の趣意が貫徹しない。

それ故に霞間ヶ谷の如き現今では至つて閑靜なる勝地で、天然物も能く保存されて居るが、是が若し一朝にして盛に發展したならば、忽天然の趣は無くなつて世に有りふれた俗境に化してしまふであらう。それ故に霞間ヶ谷保勝會に於ては此地の名勝を世に紹介するに於ては十分の注意を拂つて、天然の風景を毀損せざる範圍に於て其策を講ずることが肝要である。今日同地へ至る所の道路の如きは無論良くする必要があるが、さりとて濫りに道幅を廣め、又木を伐つたりするやうなことなく、唯通行に便にするだけで十分である。山中には車道殊に自動車道などを設けることは絶對に禁じなければならぬ。徒步者の爲に狹い道を諸處に通じ、山の深い所まで登つて行つて風景を眺めるやうにするが宜しからう。さうして旅館其他の建物を濫に山麓や山中に造るのは宜しくない。斯かる注意を怠つたならば假令其土地は發展しても、古來櫻の勝地としての霞間ヶ谷の價値は皆無となるであらう。

霞間ヶ谷の天然物を保存する上に於ては、山中樹木の採伐を禁じ、殊に固有の植物・動物を保護することに努めなければならぬ。此山中にはコモチシダ・シャウジャウバカマ・イハカガミ・ヒサカキ・ヤマツツジ・イヌツゲなどが多く、殊に春先にはイハカガミが美しい桃色の花を開いて居る。又コケなどの種類も色々ある。

岐阜縣下の名勝地として霞間ヶ谷は西濃に於て養老と共に著しいものであるから、將來此地の風景と櫻とを大切にして、十分の監督の下に天然物の毀損されること殊に土地の俗化することを防がねばならぬ。

尙ほ序でに一言して置きたいのは、將來此地へ櫻を增植する場合には、純然たる山櫻の中で若葉の色の違つたもの、殊に赤芽の美しいものを擇み、一箇所へ固めずに、彼方此方の木の間に植ゑるやうにしたい。現今よりももつと山中へ道を開いて、遊覽人の行くことの出來るやうになつた場合には、尙更山中へ深く櫻を植ゑる必要がある。櫻は總べて背景が良くないと引立たないものであるが、此土地は十分の背景があるから、植ゑ方さへ良ければ必ず其美觀を增すであらう。東京附近にある染井吉野の如き櫻を植ゑることは絶對に止めなければならぬ。斯かる櫻は少しも山中の風景に

適して居ない。

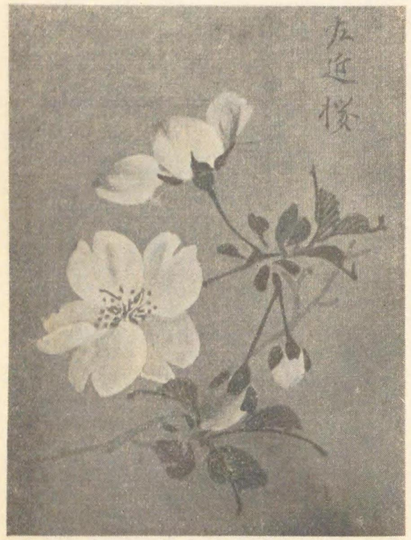
昨年の花期に霞間ヶ谷の櫻を調べに行つた時には、鹿子木岐阜縣知事は種々の便宜を與へられ、又坪井秀氏・淺野丑雄氏・波磨實太郎氏等は懇切に案内せられ、其後坪井氏からは霞間ヶ谷の舊記に就て種々報告せられたことは此草稿を作る時に少からざる參考となつた。依つて玆に諸氏に其好意を感謝する。（史蹟名勝天然紀念物第三卷第二號大正八年）

左近櫻

紫宸殿前の左近櫻は「禁秘抄」その他の古書にも記載され、寫生圖は昔時の「櫻譜」例へば「花譜」（市橋星峰）・「櫻花圖」（屋代弘賢）・「長者ヶ丸櫻譜」（坂本浩然）などに散見する。「禁秘抄」によるとこの櫻は平安朝の初からあつたので、その後屢〻火に燒けたから、順次代樹を植ゑさせられたといふ。

左近櫻が昔から一重の山櫻であつたことは考證によつて知られる。「徒然草」にも「吉野の花左近の櫻皆一重にこそあれ」と記され、又「古今要覽稿」、「櫻花圖」、（屋代弘賢撰三好汝圭畫）等にも、皆赤芽の一重山櫻として寫生された。

廣瀨花隱筆左近櫻の圖



「長者丸櫻譜」（坂本浩然筆）に載せたる左近櫻

廣瀨花隱の寫生した左近櫻も赤芽白花の山櫻で圖の上に「文化十五稔戊寅三月於　紫宸殿左近櫻叡覽之後謹拜寫之」と記してある。此時は光格天皇の御宇である。

今日（大正九年）拜觀する左近櫻は美しい赤樺芽の山櫻で、每花序概ね三花、花梗約二仙米、花徑約三仙米、花瓣長約一・四仙米、幅約一・二仙米、瓣端二裂、花色純白、花序密集極めて優美である。又此櫻の實生には花の八重になり花性の向上を示すものがある。

玆に示す左近櫻の圖の一は前記の

大正年間の左近櫻
Prunus mutabilis Miyos. *f. formosa* Miyos.
（西野猪久馬氏寫生）

「櫻花圖」（文政頃）に載せたもの、又他の一圖は現時の左近櫻である。（「櫻」一〇號昭和三年）

因に記す。前の記事の左近櫻は其後枯れ、代樹を植ゑさせられた。（昭和十二年）

梅護寺珠數掛櫻

梅護寺（新潟縣北蒲原郡京ヶ瀬村）は羽越線水原（すゐはら）驛の西南約一里にして阿賀野川堤防の北側にあり。珠數掛櫻の在る場處は寺門の外、堤防に接せる高地にして、南方阿賀野川に沿へる水ヶ曾根一帶の低地を望むべし。

本樹は周圍に石柵を繞らし、柵内の樹前には「親鸞聖人珠數掛櫻」の文字を刻せる碑あり。碑は天然石にして、高さ二尺六寸七分・幅一尺四寸・厚さ九寸・基石高さ七寸八分・幅一尺六寸五分・奥行一尺二寸なり。「安政五年戊午歳五月造立之」の文字あり。

本樹は數多の年代を經たるものゝ如く、主幹は枯死し、其一部は僅に朽株となりて殘れり。朽株の周圍より七株の支幹を出し、其中東方にあるものは主軸より稍〻隔たれり。是等の支幹は基部の太さ左の如し。

東側のもの	二・四五尺
南側のもの一	三・二
同　二	三・三
西側のもの	六・五
西側の支幹は地上幾何もなく二分し、其一は生存し、周圍二尺七寸。其他は枯死し、周圍四尺なり。	
北側のもの一	三・四尺
同　二	三・四

樹の根元の周圍	一六・五尺
樹高	約五間
根元より柵までの距離	
東側	七・二尺
西側	三・七
南側	一〇・六
北側	九・二

梅護寺の外、新潟縣下には珠數掛櫻と稱するもの尚他所にもあり。其一は三島（さんとう）郡にあるものにして、嘗て予の記載せるものにかゝり、菊咲性白花、花瓣の邊緣微紅、花徑約一寸二分、花瓣約五十枚、花序長さ一寸六分ばかりなり〔三好學「日本の櫻に關する研究」第二の四二（獨逸文）、「植物學雜誌」第三六卷第四二一號大正十一年參照〕

屋代弘賢撰「櫻花圖」下には「念珠掛櫻」の彩色圖を載せ、「佐渡ヨリ飯塚伊平接取持來其後右櫻枯云々」と記せり。同書に畫ける櫻は綠葉多く出で、一花序三花を着け花序の全長約二寸、花徑一寸二分許、花瓣狹小其數甚だ多し。全體淡紅色、花心より濃紅の小花瓣群を出し、又小綠葉片をも現せり。全形より見れば菊咲性なること明なり。

梅護寺珠數掛櫻（*Prunus serrulata* MIYOS. *f. juzukakezakura* MIYOS.）は三島郡の珠數掛櫻と反し、一樣紅色、咲初は紅色强きも、滿開に及べば淡紅となる。花梗長く、花序の全長四寸に達し、花頭は下向し、又は斜に下方に垂る。花徑約一寸三分、花瓣數十枚、花心に濃紅色の小花瓣群を現せり。雄蕋六七十本あるものあり。五枚の萼片の外部に更に五枚の小さき副萼片あり。花托は眞の菊咲櫻に於ける如く半球狀をなさず。

上記の如く梅護寺珠數掛櫻は三島郡のものとは花色の淡紅なるによりて異なり。又「櫻花圖」に載せたるものよりも花序甚だ長きも、花序の長短は同樹中に於ても異同あれば、單に之のみにては互に區別しがたし。

梅護寺珠數掛櫻と同一品種と思はるゝものは同縣同郡保田村孝順寺境内にあり、蓋し同一樹より出でたる蘖なるべし。

梅護寺珠數掛櫻の記事は三好學「或る珍奇又は顯著なる植物に就て」（英文）〔「帝國學士院紀事」第三卷第四號第二三六頁昭和二年〕にあり。〔天然紀念物調査報告植物之部第七輯（昭和二年）による〕

三　春　瀧　櫻

本樹（福島縣田村郡中郷村）は去る大正十一年四月二十四日調査し（「史蹟名勝天然紀念物調査報告」第三十四號參照）次で同年十月天然紀念物として指定せられたるが、それより四年を經て本年四月二十八日再び調査せり。樹勢は先年調査せる時と同じく旺盛にして、長き垂枝高梢より下り、殆ど地に達し之に淡紅花を密着し優美壯麗なること他に比儔あるを見ず。凡て櫻樹の巨大なるものは數多の年齡を重ぬるにより幹及枝の傷害を蒙むり、爲めに樹形を損し、衰弱の兆を呈するもの常なるも、瀧櫻は一大老樹たるに拘はらず、依然生長壯にして年々新枝を生じ、能く樹容を保ち、盛觀舊時に異ならざるによりて著し。是れ此櫻の樹勢の强さと、又其山間に生ぜるとによるなり。

「瀧ざくらの記」（前記調査報告參照）によれば、本樹は正保二年三春城主の封ぜられし頃已に大樹なりしと言へば、樹齡は少くとも五六百年に達すべし。枝垂櫻は彼岸櫻と同じく長壽を保つ櫻にして、本邦諸地方に其老樹を目擊するも、未だ三春瀧櫻の如く一大老樹となりて健在するものあるを見ず。

瀧櫻が斯く健全なるは其位置が山間の盆地の斜面に樹ち、周圍に陰影を投ずるものなく、加ふるに樹下の地面が麥畑となりて自ら肥料の樹根に達するによるならん。

三春瀧櫻

Prunus aequinoctialis Miyos. var. *pendula* (Max.) Miyos. f. *rosea* Miyos.

（鹽見競氏寫生）

聞く所によれば舊藩時代には、藩主本樹を愛護し、樹下若干の地面は免税地とし、且樹根の附近には常に石灰の俵包を貯へ置き、樹の不時損傷の際に塗布せしめたりと言ふ。

大正十一年の指定後中郷村にては一層本樹の保護に努め、樹圍に石柵を設け、樹幹に觸るゝを防げり。石柵は八角形にして、高さ四尺六寸、根元より柵までの距離北側（低地）に於ては九尺二寸、南側（高地）に於ては八尺五寸なり。

本年の春、樹の西方に瀧櫻の碑を建て、碑面に立山道人の瀧櫻詩を刻せり。立山道人は三春の州傳寺（曹洞宗、舊三春藩主秋田氏より前の城主松下氏の菩提寺）の今より三四代前の住職なりと云ふ。立山道人の詩は次の如し。

瀧村花下吟

立山道人撰

山野之花逢時不賞。陋巷之人處世安貧。余兼斯兩者而俗交已索然矣。春日偶有遊瀧村看垂絲櫻花。因興感以爲吟。

獨立十圍絶世英。埋根山谷託孤生。八面枝垂無向背。殆擬芙蓉勢峥嶸。傾國細腰不可當。纖麗妙奇豈尋常。低柔醞籍咲楊柳。靜婉風流欺海棠。春風三月探芳時。久雨新晴錦繡披。綺錯絲條花爛熳。龍鮮鳳翼影參差。天姿一品出風塵。艶艶花中孤絶倫。縱横何處不通徑。遠近何人復識春。幽意向誰論不易。淡交見花稱莫逆。憐君長髯帶雪鮮。羞我短髮得霜白。始至若有隱遁契。洞雲遮護知幾歲。秀發芳譽應施身。光輝閑達寧求世。陋巷佳人不彈冠。九夷君子行藏難。幽谷無人却有節。芳吐深林不獨蘭。若轉根株移都下。貴賤如雲繫車馬。可惜此葩違中原。可惜彼美棄中野。野外沈沉麗日斜。遲暮謂情入暮霞。吟賞不是遺逸侶。辜負瀧村獨立花。

瀧櫻の樹てる北側の高地は展望開豁、南方に鞍懸山（芦澤村）を望み、北方に安達太郎山を見る、而して眼下瀧櫻を伏瞰すべき絶好の位置にあり。

因に記す。瀧澤の碑は仙臺石にて作り、高さ五尺二寸・幅二尺八寸・厚さ五寸なり。

中郷村には曩に瀧櫻保勝會組織せられ、同櫻樹の愛護に努むることゝなれるは喜ぶべし。將來瀧櫻の周圍に家屋を設くることなく、且附近に他の櫻樹並に他の樹木を植栽せざるを要す。其他瀧櫻の附近にては一切火氣を禁ずべし。〔天然紀念物調査報告植物之部第七輯（昭和二年）による〕

根尾谷淡墨櫻

淡墨櫻所在地たる岐阜縣本巢郡根尾村は岐阜より西北方約九里自動車を通ずべし。根尾村市街地の入口に於て左折し、根尾川に架せる吊橋を渡り西岸の臺地に上れば、西方の山麓に一大櫻樹の立つを見る。是れ卽ち淡墨櫻なり。花期は概ね四月中旬なるが、調査當時（昭和六年四月十六日）は恰も花の滿開に際し壯觀を極めたり。

花は滿開に至れば純白なるも、半開の時は淡紅色を呈し、蕾は更に赤し。現に北方の高き枝に斯かる半開花群の着けるものありて、他の滿開の花に對し著しく花色の濃度の差異を呈せり。蕚は淡褐色なり。

本樹は白彼岸櫻として、稀有の大樹にして、其幹圍に於ては山梨縣山高の神代櫻に次ぐものとして知らる。神代櫻は今日にては主幹の折損によりて頗る樹容を變ぜるが、獨淡墨櫻は幸に健存し、本邦の代表的巨櫻として能く其特徴を保つを見る。

淡墨櫻は曩に岐阜縣天然紀念物調査委員波磨實太郎氏調査せるが（「岐阜縣史蹟名勝天然紀念物調査報告」第一回大正十二年、並に内務省發行「天然紀念物調査報告」植物之部第三輯、大正十二年參照）、今回同行の波磨氏と共に更に樹容及幹圍を調査せるもの左の如し。

根廻			約一〇・五米
幹圍			約二・七〇米
該枝の基部の周圍			
それより地上約一・五米にして東方及西方へ各〻一大枝を出し、兩枝共に先方に至りて二分せり。			
東方の枝の基部の周圍	約 三・六五米	北方	約 九・七一米
西方の枝の基部の周圍	同 三・〇三	東北方	同 一七・一七
右兩枝の發出せる直下の主幹の周圍	同 七・八九	東方	同 一二・四三
同 上 直上（地上約三・六米）の主幹の周圍	同 五・〇〇	西方	同 一六・四四
枝張（幹の土際の外圍より）		西南方	同 一四・四〇

本樹の周圍には方形の木柵を繞せり。其一邊の長さ七・五八米、高さ一・五四米、石壁の高さ〇・五四米なり。柵の外圍には更らに保護地を設けたり。保護地は約五角形にして、東南方の道路に接せる側は長さ一三・六四米、西北側は二六・三七米、北側は七・二八米、東北側は一七・五八米なり。

本樹には幹の基部に瘤起あり。樹上にはカシ・アヲキ・イヌツゲ其他の小樹着生せり。東方の枝の

先端は枯れたるものあれども、全體の樹勢は旺盛なり。

淡墨櫻の東側に接して一の家屋あり。本樹の保存上危險なきに非ざれば他所へ移轉せしむるを安全なりとす。〔天然紀念物調査報告植物之部第一三輯（昭和七年）による〕

照源寺の金龍櫻

關西線桑名驛より西北約三町にして照源寺（桑名郡西桑名町）に到る。本堂の北方高地に金龍櫻あり。東側は崖となりて一帶の平野に臨む。櫻の根元には方形の石柵を繞し、東西五・五米、南北六・七米なり。

本樹は舊時にありては一根八幹に分れたりと云ふ。現時生存するものは根元より北方へ出でたる一支幹にして、其發出部の周圍約一・八五米なり。之に對し南方へ出でたる一の支幹あるも已に枯れ、兩者の中央に一の支幹の朽ちたるもの殘れり。根元の總周圍約五・一五米、樹高約七米なり。

若葉は赤褐色、花は淡紅色、一重と八重と混在し、八重のものは花瓣約十枚、旗瓣もあり。花徑約四乃至四・五仙米、總長約五・五仙米なり。

本樹は里櫻の一新品種（*Prunus serrulata* LINDL. f. *kinryu* MIYOS.）にして名櫻に屬す。

金龍櫻の來歷に關し照源寺所藏の「政餘彫玉」（稿本一冊、末尾に「延寶庚申臘月念五　由井四郎兵衞次房奉納」とあり、此人の筆寫したるものなり）其他の文書により左の記事を抄出す。

（一）　政餘彫玉（桑名國主及儒臣の金龍櫻觀賞の詩を多く載せたるもの）。

照源寺見花

東海山照源寺者葬前羽林源定勝公之地也世子定行公新造廟堂大建蘭若號東海山崇源寺爾來當大鏡君治改崇爲照蓋可有所據焉境內有櫻一株接來攝州金龍寺之名品也故君臨于玆賞花賦詩陪儒同上詩群臣共獻遊觀竟日君臣相和欣々然各所吟詠之唐詩聊記尊章之後和歌紛失焉

寸陰可惜勢陽春　　山寺櫻開招雅賓
今日遨遊爲賞詠　　金龍名品遠移新

照源寺の金龍櫻

照源寺の金龍櫻
Prunus serrulata Miyos. f. *kinryu* Miyos
（西野猪久馬氏寫生）

和韻　謹依高韻　　嶺室拜

山寺見櫻正賞春　　瓊宴對酌主與賓

請君終日莫回駕　　花到夕陽色轉新

（以下略す）

前文中定勝は從四位隱岐守、寛永元年薨ず。大鏡君は定綱にして、定勝の三男なり、從四位越中守、文祿元年生れ、慶安四年薨ず。

（二）　御手植金龍櫻來由拔書　　一枚

豫て大鏡尊君攝州古曾の郡より移し植ゑさせ給ひつる櫻なり始の木は株七尺餘りあまたの年を經てその木朽て株より新芽出で漸くに大きくなる此の木又くちて又芽出で斯くして今の木は四代の若芽なりと古老のいひ傳へたり

大鏡君の世にませし日は春毎にきまし給ひて此櫻いと時めきつる有樣古き物にも見えたりしが多くの年月諸木の中に埋もれ隱れて有し事こそ淺間しけれさるにいかなる時や來りけんこの月の廿五日の朝當尊君の御使ありて金龍櫻は今いかに其木ありやと尋ねさせ玉ふに驚き速に小枝一本を手折て御殿へ持もうで事の由つぶさに申上たりければ君大に感じさせ給ひいさとて同廿七日當寺に成らせ給ひて金龍櫻上覽ましまし鳴呼誠に此花再び世に出でたりし事の有がたさよと奉仰ぞかし

文政八酉龍集如月廿八日　　東海山十五世　文　譽

埋もれし此山寺の古曾櫻

八千代の色をけうそあらはす

咲く花の盛を見れはいにしへの

君かめくみそたうとかりける

前文「當尊君」とあるは文政八年當時の桑名藩大守松平定永（從四位下左近衞權小將越中守）にして樂翁公の嫡男なり（照源寺住職井上隆愼師の報知による）。

（三）　金龍櫻をほむる歌の端書　　一枚　通阿（通阿は照源寺の先代住職なるか）

神風の伊勢の國桑名の照源寺練若は松越州君の代々廼み魂しれる寺にそありける此寺の上なる山の木立生繁りていともくらき處に櫻の木あり此櫻はむかしこの桑名の城しりましし今の越州君の大みおやの世にいましたる時津の國古曾の郡より移し植させ給ひつる櫻にして花の名を金龍櫻と名付ていたく愛てさせ給へりし櫻なりとそさるに始の木は七さかまりめくれりその木くちて株よりあらたに芽生出たるやうにして今ある櫻は蘖なりといひつたへりしとなむ（下略）

（四）　金龍櫻の全樹の圖に定綱の和歌を記せる扇面（印刷）

花さかりくまある色のゆふはへに

この下かけをもりてあかさむ　　定綱

（五）春のかゝみ　一枚　昭治十二年舊桑名藩士　田内千町書

以上の資料により金龍櫻は松平定綱の時已に照源寺に存在し花の美なるにより觀賞せられたるものにして、元攝州古曾部の金龍寺の原樹より分蘖又は接穗したるを知るべし。然れども前記の通阿の文中にある如く、昔の金龍櫻は夙に枯朽し、其蘖より生長せるものが後世の同樹となりたるにより現存の金龍櫻は當初の樹に非ざるは明なり。

前文の古曾部は「大日本地名辭書」第一卷には今日の磐手村大字古曾部とあり。又金龍寺は同書に「磐手村大字成合の東嶺にあり大字安滿の北廿町（坂八丁）天臺律院あり草創は延曆年中參議安倍是雄にして初め安滿寺と號したり百餘才を經て千觀内供中興して金龍寺と云ふ」とあり。

照源寺は寺院明細帳によれば、「將軍家康公御舍弟定勝侯爲菩提寛永元年將軍秀忠公依臺命桑名城主松平隱岐守定行創立累代御香華院同十二年豫州松山移城爾來松平越中守香花院也境内千二十坪」となり。同寺は現に松平子爵家（樂翁公後裔）の菩提寺にして、金龍櫻の樹下にも當代子爵松平定晴氏の同櫻名を記せる碑を建てたり。

金龍櫻は櫻品として古來圖說されたるものを見ざれども、「金龍寺」と稱する櫻は「古今要覽稿」に載せられ、又三熊花顛の「花譜」にも寫生されたり。是等の圖書に表れたる「金龍寺」は金龍櫻とは同じからず。

前述の如く金龍櫻は里櫻の優れたる一品種にして德川幕府の初期以來存在せる名櫻の蘖生として今日に其特徵を傳ふるものなれば、天然紀念物として指定せらるべきものと思考す。

〔天然紀念物調査報告植物之部第一四輯（昭和八年）による〕

三波川の櫻

信越線本庄驛又は新町驛より鬼石町まで定期自動車の便あり。それより三波川村（群馬縣多野郡）の櫻山公園登山道の入口まで十數町間も尙車行すべし。

登山道は頗る急峻なり。約一里にして山頂に達すれば多數の櫻樹が頂上附近の急斜面に植ゑられたるを見る。櫻樹中正に開花せるものあり、樹は何れも小なり。葉は已に落ち、花のみ着けり。花は滿開のもの、半開のもの、未開のものありて花期一樣ならず。一重小輪、直徑約二・五仙米、白色なるも淡紅暈あり。花梗は約三密米、毛なし。（昭和六年十二月十七日調査）

葉は翌年五月三波川村役場より送られたる標本によりて檢せるが、卵形、長約六・五仙米、先端約一・五仙米、葉緣は單鋸齒と重鋸齒とを混ぜり。

此櫻は從來染井吉野の返咲の如く見做れたるが、上記の花葉の特徴によりて冬櫻（*Prunus parvifolia* KOEHNE）なるを知れり。聞く所によれば去る明治三十七八年日露戰役紀念として、三波川村に於て前記の山上に植ゑたるものにして、種苗は埼玉縣安行（あんぎやう）より購入せりと云ふ。種苗中には染井吉野多く、生長して後春季に開花せるが、此外に晩秋より初冬に亙りて開花する櫻も亦混在するもの少からざるを知り、前記の如く返咲とも考へらるゝに至れり。其後櫻樹は益〻生長し開花も亦著しく、殊に初冬の盛花は珍奇なりとして、近年人の來觀するもの多くなれりと云ふ。

冬櫻は寒櫻とは異なり、普通庭園には殆ど見ることなく、稀に神社の境内等に存在するに過ぎず（「天然紀念物調査報告」植物之部第九輯醒井の不斷櫻及冬櫻の條參照）。然るに三波川の櫻山公園に前記の如く多數の冬櫻の植ゑられたるは著し。今日にては栽植の年代尙新しきも、將來年を經るに從ひ珍しき櫻の名所として異彩を放つに至るべし。

此調査の後安行に到り冬櫻の苗木に就て質せるに、此櫻を栽培するものあるを見ず。又三波川村へ送れる冬櫻の苗木が同地の何れの種樹園より出でたるやも分明ならず。

〔天然紀念物調査報告植物之部第一四輯（昭和六年）による〕

櫻　冬　の　川　波　三

Prunus parvifolia (Koehne) Matsum.

素櫻神社の神代櫻

長野市より西北方戸隱へ通ずる山路を車行すること約一里にして上水内郡芋井村大字荒安に達す。此處より左折して西方の俚道を下れば、約四町にして素櫻神社（大字泉平）に達す。神社は一大溪谷の上部の西南方に向へる斜面の小臺地にあり。

神代櫻は祠前の石壇の西側に接して立ち、其表面（西南側）の土際は裏面（東北側）よりも約七〇仙米低し。同樹の高地面に於ける土際は略〻根元に當れり。

高地の土際の幹圍	約 八・八〇米	東南方のもの	約 三・三二米
高地面より約七七仙米上にて三大支幹に分る。		枝張（根元より）	
該部の幹圍	〃 九・八〇	東方	〃 五・三五
三大支幹の基部の周圍		西方	〃 五・三〇
中央のもの	〃 五・九〇	南方	〃 六・六〇
西南方のもの	〃 三・九〇	北方	〃 五・三〇

舊時は枝張大にして壯觀を呈せるが、今日にては太枝の折れたる爲甚しく樹勢を損せり。

種樹は白彼岸櫻にして、蕚筒膨大となり密毛あり。花序は繖形、概ね五出、花梗は有毛、長約一・五―一・八仙米、花徑約二仙米、花瓣楕圓形、長約一仙米、幅約〇・七仙米、雌蕋の下部は毛を以て

素櫻神社の神代櫻　*Prunus aequinoctialis* Miyos.

被はる。

本樹には素戔嗚尊の御手植なりとの傳說あり。依て素櫻と云ひ、又神代櫻とも云ふ。樹齡は分明ならざれども甚古きを想ふべし。

本樹は曩に天然紀念物として指定せられたる山高神代櫻（「天然紀念物調査報告」植物之部第三輯）・根尾谷淡墨櫻（同報告第三輯及第十三輯）・伊佐澤久保櫻（同報告第六輯）と同一種に屬し、且是等の櫻に匹敵すべき巨樹として天然紀念物たるは言を俟たず。

本樹の幹及枝には大なるキヅタ卷着けるが先年取除きたり。然るに其後暴風により大なる枝折れたりと云ふ。

樹の根元を繞りて木柵を繞らせり。柵の幅東西側は各〻四・三米、南側は四・一五米、

北側は三・八八米なり。

樹側には「神代素櫻」と刻せる碑及「神代櫻記」の碑あり。後者の撰文は高橋白山（名は貞、高遠の人）、篆額は觀世清廉、明治三十一年に建てたり。

因に記す、此櫻の着色圖並に來歷を記せる一枚摺（明治二十一年）、又櫻の全景及右神代櫻の碑文を記せる銅版摺一枚あり。又謠曲「素櫻」（著作者觀世清廉、明治三十一年發行）あり。

〔天然紀念物調査報告植物之部第一六輯（昭和十年）による〕

榴ヶ岡の櫻に就て

（昭和九年四月二十一日史蹟名勝天然紀念物保存協會宮城支部並に仙臺郷土研究會主催にて宮城縣立圖書館樓上に於て開催の「櫻の講演會」講演筆記）

今日は櫻に就て學術的に述べるのではない。只榴ヶ岡の櫻に就てお話して聊か御參考に供したいと思ふ。

榴ヶ岡の櫻は元祿八年（今より約二百四十年前）に伊達綱村公の植ゑられたのであるが、今日に至るもよく成育して居る。此櫻は大正十三年史蹟名勝天然紀念物保存法に依つて名勝として指定せ

られ、永く保存されることになつた。

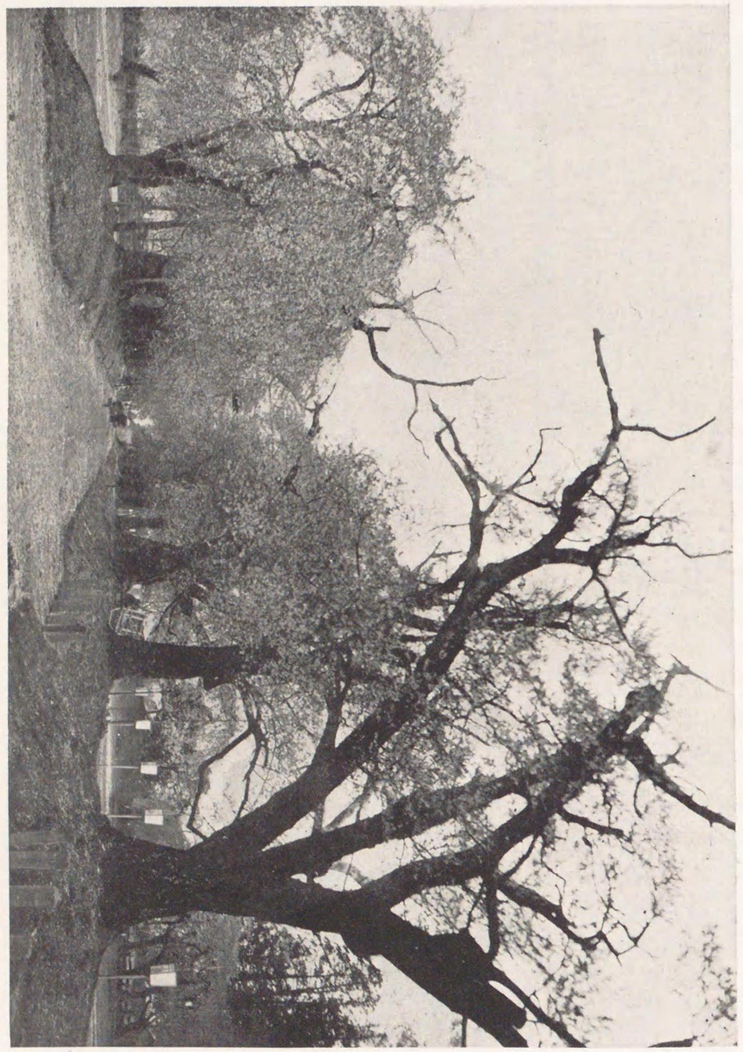
此外に現在法律に依つて名勝として指定されて居る大和の吉野山・常陸の櫻川・東京郊外の小金井・京都の御室仁和寺と嵐山・美濃の霞間ヶ谷などの櫻は何れも古くから有名であるが、明治時代になつての櫻の名勝には福島縣郡山の開成山・埼玉縣の熊谷堤・愛知縣の木曾川堤・東京荒川堤の俗に云ふ五色櫻がある。

天然紀念物として指定された櫻の巨樹には山梨縣山高の神代櫻（彼岸櫻、目通周圍一〇・六米）・岐阜縣根尾谷淡墨櫻（彼岸櫻、根元周圍九米）・山形縣伊佐澤の久保櫻（彼岸櫻、根元周圍七・七米）・福島縣三春瀧櫻（枝垂櫻、目通周圍九・四米）・埼玉縣石戸蒲櫻（彼岸櫻に似た櫻、根元周圍一一米）・靜岡縣狩宿下馬櫻（山櫻、目通幹周圍八・五米）等がある。

次に天然紀念物として指定された櫻の名木には奈良市知足院奈良八重櫻・大阪府下の磯良（いそら）神社のいぼざくら・盛岡の石割櫻・三重縣の白子（しろこ）不斷櫻・同照源寺の金龍櫻・岐阜縣揖斐二度（いびにど）櫻・同中將姫誓願櫻・滋賀縣醒井の不斷櫻・新潟縣梅護寺の珠數掛櫻・同極樂寺の野中櫻・同小木（佐渡）の御所櫻・金澤市兼六公園の菊櫻などがある。

又天然紀念物として指定された櫻の樹林には新潟縣小山田彼岸櫻樹林・同橡平櫻樹林等がある。

以上種々の名目の下に著名な櫻が指定されたが、今櫻の種類から見て代表的の名勝として指定さ



櫻垂枝と櫻岸彼の岡ヶ榴（眞鶴好三）

れたものを擧げると、山櫻では先づ大和の吉野山、彼岸櫻と枝垂櫻では仙臺の榴ヶ岡、里櫻では東京の荒川堤である。

明治維新の頃からの新しい櫻としては染井吉野櫻がある。此櫻は近世全國に擴がつて、今では櫻と云へば染井吉野であるやうに考へられて居るから、從つて彼岸櫻と枝垂櫻の代表的名勝たる榴ヶ岡もあまり世間に知られて居ないのも惟しむに足らない。

現時では我國固有の山櫻でさへ殆んど都會の人々には見られなくなつた程であるが、其實日本の櫻として最も大切なものは山櫻である。彼の古來無數の和歌に詠まれ、文章に綴られ、又は狂歌に、俳句に、到るところ天眞の美性を賞讃せられ、大和心の象徴とされたものは皆此山櫻に外ならない。山櫻の斯樣に我が國華の代表となつたのは、其觀賞の歴史が甚だ古いこと、又國内に廣く分布して野にも山にも自生して居ることが主な原因と思はれるが、其外に又此櫻の花性と花品とが我國民性に能く合つたからである。

山櫻に次で著しいものは彼岸櫻と、これから變つた枝垂櫻で、此外に里櫻の一群がある。

これから主に榴ヶ岡にある彼岸櫻と枝垂櫻に就て述べよう。

彼岸櫻とは春の彼岸に咲くから名が附いたので、昔から江戸その外の寺の境内に多く植ゑられたものである。花が多く着き、大木になり、樹齡が長く、堂々たる樹勢になる。

枝垂櫻は彼岸櫻が培養されて變化したもので、最も完全に枝垂れたものを絲櫻といふ。前に述べた福島縣の三春瀧櫻も此一種である。花の色の薄紅のものや白いものが普通であるが、また紅色が濃く美しいものもある。三春瀧櫻は紅枝垂で、京都の祇園の櫻は白枝垂、榴ヶ岡の枝垂櫻は薄紅枝垂櫻である。

櫻には先天的變異の性質がある。卽ち一重の櫻の實生が八重になり、薄紅の花が濃紅の花になる。かやうに櫻に向上性のあることは國華として貴むべきことである。此向上性は彼岸櫻や枝垂櫻のみならず、里櫻その他の櫻に於ても證明されてゐる。

彼岸櫻や枝垂櫻は花や葉の形態のみならず、幹の外觀によつても直ちに識別される。卽ち是等の櫻の老木を見ると幹に著しい縱の筋がある。（山櫻は横に筋がある）。それで冬花や葉のない時でもよく判る。

彼岸櫻や枝垂櫻は前に述べた通り壽命の長いことで著しい。榴ヶ岡の櫻は始めて植ゑられてから既に二百四十年も經てゐるが、まだ長く生きる。尤も環境によつて樹齡の長短のあることは免れない。

榴ヶ岡の櫻は大正十一年六月私の調べた時、馬場にある目通周圍五尺以上のものには薄紅枝垂一四本、白彼岸九本、白枝垂六本、薄紅彼岸六本、八重薄紅枝垂一本、合せて三十六本、又馬場の外に五十六本あつた。此中の最大なるものは目通周圍一丈八尺もあつた。

榴ヶ岡の櫻は薄紅枝垂が最も多い。そうして薄紅彼岸・白彼岸・八重薄紅枝垂の順になる。此外に馬場の外部に八重紅枝垂があつたが、是れは元仙臺市長遠藤庸治氏が植ゑたもので、普通遠藤櫻の名がある。花徑が約一寸もあり、花瓣は十五枚位で、極めて美しい。遠方から眺めると恰度造花のやうに見える。此の遠藤櫻は昔からの榴ヶ岡の櫻でないから、指定された眞の榴ヶ岡の櫻と混じてはならぬ。又此櫻は將來指定地に植ゑないやうにしなければならぬ。

昔の名所と今日の名勝とは同一でない。昔は證歌があれば直ぐ名所になつたが、今日の名勝は風景を第一として居る。併し榴ヶ岡の櫻には古い歷史があるから名勝として一段の光彩を放つてゐる。殊に綱村公が樹勢の最も立派で且長壽を保つべき彼岸櫻と枝垂櫻とを植ゑられたことは樹種選定の當を得たことで、二百四十年後の今日尙櫻の名勝としての價値を保つは一に之によるのである。

終りに榴ヶ岡の櫻の保存に就て聊か意見を述べて置きたい。

櫻の保護は仲々困難である。多數の人が花見に來れば來るほど木の根を踏み、幹や枝を傷け、損害を與へる。殊に花見の頃、樹下に茶店を開き、煮焚をしたりして木を傷めることが多い。先年榴ヶ岡でかやうな有樣を目擊した時は櫻樹保存上憂ふべきことゝ思つたが、現今では木の周圍に柵が廻され、茶店も遙に外圍へ退いたから、從前よりは保存狀態が良くなつた。

併しながら榴ヶ岡の櫻は現に老木が多く相當に木が傷んで居るから、外科手術を行つて保護しなければならぬ。この手術は京都の祇園の櫻では成功して居るが、最も著しい例は東京近郊の小金井の櫻である。此處の櫻は延長約一里半の玉川上水の兩岸に於て元文年間に植ゑられたもので、老木が多い爲、近世になつて樹勢が衰へて居たが、先年から東京市に於て十分の保護を加へたから現今では樹勢が盛んになり、年々立派に開花するやうになつた。

去る明治四十五年、東京市から米國ワシントンに送つた櫻は、同市のポトマック河畔に植ゑられ、六哩の長さに亙つてゐるが、常に監視人が巡廻して害蟲の驅除は勿論一切の保護に當つてゐる。一般公衆も亦樹木愛護の精神をよく理解して居るから、此櫻樹は十分の發育が遂げられた。

畢竟、榴ヶ岡の櫻は彼岸櫻及び枝垂櫻の名勝として全國隨一である點で指定された主意に鑑み、宮城縣殊に仙臺市として充分に此櫻を愛護し、保存の效果を擧げられんことを切望する。

（仙臺鄉土研究第四卷第七號昭和九年）

白山旗櫻

東京市小石川區白山前町鄉社白山神社境内に一株の旗櫻がある。是れが白山旗櫻で、今日に遺存する殆ど唯一の江戸時代の名櫻である。此櫻は里櫻に屬する名木であるから、昭和十一年天然紀念物として指定された。（天然紀念物調査報告植物之部第十五輯昭和十年文部省發行參照）

此櫻は地上一・五米の幹圍が一・五米、若葉は淡茶色、花は二—四箇づゝ着き、中輪、直徑約三・七仙米、純白、五瓣であるが、花心から一枚又は二三枚の小さい旗狀の花瓣が出る。それで昔から白山旗櫻の名が付いた。花期は普通四月十七、八日頃である。

白山旗櫻は江戸時代の名櫻の一で、寛政頃からの「花暦」「花信風」の類に年々の開花期を報ぜられ、觀花行樂の人が多く尋ねて來た。「ひとり歩行」（寛政七年清々舍五明撰）には「はた櫻（小石川白山神主中井圖書）白山權現の境内にあり珍花なり花の中に小旗を立たるごとく白さしへあり、依て名付るにや又帆立てさくらといふとぞ三月中旬さかりなり（下略）」とある。

「江戸名所花暦」（天保八年）には旗櫻の花の圖と此櫻の所在並傳說とを載せ、「白山神社小石川指谷にあり

白山旗櫻（昭和九年寫生）

Prunus serrulata Miyos. f. *vexillifera* Miyos.

別當中井氏此社地に旗さくらといふ有永承六年阿倍一統を征伐として義家公奥州へ發向の街道なり其時此櫻に旗を立たまひ八幡宮を勸請せよとの祈禱により此名あり花に旗のかたちありといへり」と述べてある。尙「江戸名所圖會」天保七年には白山旗櫻所在地の全景圖を掲げ、又「東都歳時記」天保九年には唯この櫻の所在地名のみを擧げてゐる。

白山旗櫻とその碑　（守田寶丹建）

浮世繪の類には餘り白山旗櫻を見なかつたが、此度橋本誘一氏の厚意によつて同氏所藏の國芳の書いた此櫻の摺繪を贈られた。大錦一枚摺（竪一尺二寸幅八寸二分）で、見事に櫻が畫かれ、一々花中から小さな一枚の旗が出てゐる。花は桃色にしてあるが、是れは摺る時に色を加へたのであらう。圖中には櫻の由來も記してある。又岳亭筆「新版狂歌江戸花見雙六」（七戸吉三氏所藏）には江戸名櫻の一として此櫻の繪が出てゐる。

國芳筆白山旗櫻

義家に因んだ旗櫻の傳説は「甲子夜話」（文化、文政頃編活版本二の四二八）の旗櫻寺の項に見え、義家が奥州の軍中に用ひた旗を掛けた櫻樹が此寺の庭にあつて、水府から木の周圍に籬を造らしめたことが書いてあるが、是れより前寶暦八年出版の「櫻品」の帆掛櫻の條に「鈍永曰古老云このはなを旗櫻といふは往昔八幡太郎義家奥州征伐の時常州久慈郡に旗を立置給ひし跡より一株の櫻生出たり故に旗櫻とよびきたれり今にそこにありとぞ」の記事は「甲子夜話」所載の旗櫻寺に關係があるかないか明かでない。

櫻の品種としての旗櫻の記載又は寫生圖は「櫻品」を始め舊時の文獻に散見するが、「花譜」（市橋鄰公撰、櫻井雪鮮畫、享和三年）第四帖の八幡太郎旗櫻の名で畫がかれた白花、中輪、五瓣の外一枚の旗瓣の出てゐるものは白山旗櫻のことで、前に述べた國芳の繪にも「白山地主八幡宮開張旗櫻」と記してある。尚八幡太郎旗櫻の圖は「叉譜」（堀良山序、文久元年）や玉蘭齋貞秀畫「萬象寫眞圖譜」などにも出てゐるが。皆「花譜」の原圖の寫である。

「新版狂歌江戸花見雙六」に載せた白山旗櫻

天保年間江戸青山に居た久保櫻顚の「白櫻亭中百三十六品」の中には白山旗櫻の名が載つてゐる

が、當時坂本浩然の寫生した「長者丸櫻譜」天保十一年 增田繁亭舊藏を始め、同人畫「群櫻花譜」第二卷、「櫻花寫生」等にも白山旗櫻の圖があり、又幕末の本草書の一たる「本草要正」泉本儀左衞門 文久二年稿本にも此櫻の記載がある。

上記考證資料によると、今日の白山旗櫻は舊時代のものと同一であることが疑ない。併し現存の幹は昔からのものではなく、舊幹の分木、又は蘖生と考へられる。現に今の樹の傍に舊時の枯幹の一部が殘つてゐる。白山旗櫻の來歷はわからないが、寛政の頃已に世に知られてゐたから其生立は遙に前であらう。かやうに古來の名櫻が後世の生長更新によつて現存する場合は他にもあるが、殊に彼の白子不斷櫻・奈良八重櫻などは此點で著しい。

「長者丸櫻譜」（坂本浩然筆）に載せた白山旗櫻

東京市荒川堤の里櫻の一品種としての旗櫻は花が淡紅、大輪、八重で白山旗櫻とは全く違ふ。此外に尙昔から旗櫻と云はれたものもあるが、古來有名なのは獨白山の旗櫻卽ち白山旗櫻で、一に花の形が人の注意を惹いたからである。

因に記す。白山旗櫻の傍に明治二十九年に建てた守田寶丹の此櫻の碑がある。現今では櫻の幹が此碑に寄りかゝり、幹は損じ頗る衰弱してゐるから十分の保護を要する。

（浮世繪界第一卷第八號昭和十一年）

祇園の枝垂櫻と金剛櫻

櫻の名所・櫻の巨樹・名木・櫻樹林が名勝又は天然紀念物として今迄に指定されたものは、全國を通じて可なり多い。茲には最近指定されたもの又は近く指定せらるべきものとして次の櫻に就て述べよう。

祇園の枝垂櫻

此櫻は京都の花の魁で、嵐山醍醐の山櫻や御室平野の里櫻がまだ咲かぬ中に見られるのと、其位

置が祇園の圓山公園の中心とも言ふべき要點にあるから名高くなり、單に祇園の櫻又は祇園の夜櫻と呼ばれてゐる。

此櫻は白枝垂で、咲立ては微紅に帶び、後には眞白になる。昨年四月二十一日調査したときは稍〻盛が過ぎたが、普通四月の初に滿開し、年によつては已に三月の末に咲くことがある。

枝垂櫻は圓丘の上に立ち、根元の周圍約四・三メートル、地上一・五メートルの幹圍約三・八メートル、枝張は北方に最も長く、根元から八メートル餘に達する。幹の高さは十メートルである。

本樹は香山益彦氏の考證によると、昔は祇園社の執行寶壽院の庭にあつたもので、維新の頃辛うじて殘つたといふ。著名になつたのは明治の中期からで、花期には暮夜樹邊に燎火を燃して花も照らしたから一層美しく見えた。併しこれがため害を受け、又他の原因によつて樹勢が次第に衰へた。其上南方へ長く出てゐた太い枝が先年折れてから舊時のやうな立派な樹姿が見られなくなつた。

昭和二年以來京都市では本樹の保護を講じ、先づ腐朽部に外科手術を行ひ、完全な支柱や枝棚を設け、且十分に施肥したゝめ著しく樹勢が恢復して、新枝が出、年々盛に開花するやうになつた。彼の小金井の山櫻の場合でも亦此祇園の枝垂櫻に於ても、適當なる保護が一旦衰弱した樹勢を恢復する上に如何に有效であるかゞわかる。

祇園の枝垂櫻は此類の櫻の地方的巨樹として有數のもので、近く天然紀念物として指定されるで

櫻剛金の寺王輪光日

Prunus mutabilis Miyos. f. *kongo* Miyos.

あらう。

金剛櫻

栃木縣日光町輪王寺境内三佛堂前にある一大老樹で、根元から數本に分れ、其中直立したものが主幹の位置を占めてゐる。

全樹の基部の周圍は約五・七メートル、其中主幹に當るものゝ根元の周圍約三・五メートルである。枝張は東方に最も長く、約九メートルに達し、本坊の方へ伸び、此櫻に著しい樹形を呈せしめる。

金剛櫻は白山櫻の一の新品種で、黄芽、白花、花徑約一・八センチメートル、花が密着すること、又花香の強いことも特徴になる。花時は樹頭に花虻が多く來る。花性は「荒川匂」に似てゐるが、花徑の大なることでこれと區別される。

本樹は明治十年頃輪王寺門跡湛厚大僧正が植ゑさせたもので、もと同寺内の他處にあつたといふ。大僧正の謚號金剛心院に因んで金剛櫻の名がついた。

金剛櫻は移植後六十餘年の今日枝は茂り、花は多く着き見事に成木した。清白芳香の白山櫻の名木として最近天然紀念物に指定された。（文部時報第五七七號昭和十二年）

櫻の保存

櫻の名所と其保存

櫻の種類は歐洲にも米國にもあるが、美しい櫻の多くの種類や品種の有る處は日本より外にない。尤も支那の四川・雲南邊にも野生の櫻があり、又印度ヒマラヤ山中にも美麗な櫻（ひまらやざくら）があるが、是等は何れも彼國々の一局部に限られ、隨つて國民一般に知られて居ない。又歐米の櫻は果實（チェリー）の美味を以て賞せられるので、花を賞するのではない。

此の如く花の美を以て一般に觀賞せらるゝのは獨日本の櫻である。日本の櫻にも種類が多いが、其中花の優美なること又艶麗なることを以て古來愛觀せられたものは、山櫻・里櫻・彼岸櫻・枝垂櫻の類で、此外に明治維新の頃から次第に植ゑられ、今日盛に繁殖した染井吉野がある。

日本には到る處山中に山櫻がある。殊に中部から北部にかけて花の美しいものが多く、又多數發生して居る處がある。斯かる場合は山櫻の天然の名所として昔から人が花見に行つたから次第に名高くなり、隨つて櫻の絶えぬやうに順次植ゑ繼いだ爲、後世になつても依然名所としての價値を存して來た。斯樣な櫻の名所が國内處々にあるが、就中歴史の古いこと、區域の廣いこと、櫻の多いことで第一たるは大和の吉野山である。其外常陸の櫻川・京都の嵐山・武州小金井など何れも櫻の名所として名高い。

單に櫻の名所と云ふも櫻の種類、地域の大小、高低等によつて、名所としての特色はそれぞれ違ふ。今本邦の櫻の名所として最も著しいものを擧げると略〻左の如くである。

大和の吉野山　吉野川の南岸なる六田から山に登り一目千本まで約一里、それより中の千本、上の千本を經て、奥の手本まで一里餘の間に櫻がある。昔は六田の渡を越すと直ちに櫻があつたが、今日では山下にはない。櫻の最も多いのは一目千本で、花山と云ふ茶亭のある附近から見下した光景は極めて壯觀で、山に谷に花を以て埋めた觀がある。

昔吉野へ花見に來た人が初めて此一目千本の滿花を見て、感極まつて褒める言葉さへ出なかつたと言つたのは左もあるべきことで、此處の花の多くて立派なるは言ふまでもないが、一つは此處の地形が花の景色を眺めるのに最も適してゐるからである。實際山の脊の如き處から眼下に花の谷を見下し、前面には遙に藏王堂附近の花を望むことが出來て、位置が甚良い。

一目千本は一大壯觀であるが、中の千本の花の景色も亦一入の眺めである。此處は谷へ下りかけの山腹一面に櫻があつて、其下蔭を行きながら飽くまで花見をすることが出來る。

上の千本を經て奥の千本へ行くと、山が深く、閑靜で、櫻の數は少いが、觀花の情趣は十分に現はれて居る。

すべて吉野山の櫻は山中一體に自生して居る山櫻で、所謂白山櫻の純系統に屬するものである。若葉は茶色のものが多いが、中には美しい赤芽もあり、又萌黄色もあり、花は白花で、大輪・中輪・小輪樣々に咲いて居る。又花に香氣のあるもの、花梗に毛のあるものも往々ある。

吉野山の櫻の中には、彼の關屋の櫻・雲井の櫻・瀧櫻・布引櫻など古來の名木が知れて居るが、此中の或るものは枯れ又木が傷んだものがある。

吉野山の櫻に就ての文獻は甚多い。是れは昔から多數の人が花見に來たからで、此中には往時に於ける同山の櫻の有樣が詳に記され、參考となるものがある。

吉野山は關西關東地方の櫻の名所の淵源で、今日見る嵐山の櫻・小金井の櫻の如き何れも主して此處から移植したものである。

嵐山の櫻　京都隨一の名勝として人の知る嵐山は春の花、秋の紅葉は更なり、夏の青葉も、雪の景色も面白いが、取り分け櫻花の景觀が優れてゐる。大堰川の清い流れに沿うた愛らし山には松や櫻樹(モミヂ)が雜生し、其間に櫻が交つ居る。殊に大悲閣の邊では大きな木になつて居る爲、高嶺の花として下から見上げた景色は最も良い。すべて嵐山は櫻の背景に陽氣な松や種々の濶葉樹がある爲彼の吉野の櫻が陰氣な杉の背景を有するものと違つて配合がよく見える。

嵐山の櫻も白山櫻であるが、天然品種が多く、若葉の色が樣々であるから美しい。すべて山櫻の風景上の價値は彼の染井吉野の千遍一律で色觀の變化のないのに反し、若葉の色が茶・樺・赤・黄等種々になつて居る點にある。此芽色の變化は山櫻の美性上の主眼である。

櫻川の櫻　茨城縣東那珂郡磯部村に櫻川といふ古るい櫻の名所がある。東京方面から行く人は東北本線小山で水戸線に乘りかへ、岩瀨又は羽黑で下車すると、櫻川まで僅に十數町である。

岩瀨から行くと道の傍に青柳(あをやぎ)の絲櫻と稱する枝垂櫻がある。此櫻も櫻川の櫻と共に謠曲(「櫻川」)に現はれて居る。櫻川は足利時代には著名であつたが、それよりも遙に昔から知られて居た櫻の名所である。

櫻川には磯部神社があり、木花開耶姫を祭つてある。其前に數町の馬場と廣場とがあり、馬場の兩傍には櫻が植ゑられ、廣場には殊に大木がある。又神社から少し後の方に櫻川の小流があつて、此處の河岸にも古るい櫻樹が殘つて居る。

櫻川の櫻は白山櫻の中の東北種が多く集まつて居るので特色がある。卽ち若葉の鮮なる赤色を呈するもの、花の淡紅を帶びるもの、花に強い香氣のあるもの、花梗に毛のあるものなどが多い。是等は同所の櫻をして、吉野山の櫻に對して特徵を帶ばしめるゆゑんである。櫻樹の數は餘り多くは

ないが、本邦有數の名所として賞揚すべきものと思ふ。

小金井の櫻　武藏野に於ける山櫻の一大集植で、舊幕府時代に出來た櫻の名所である。此櫻は武藏野新田世話役川崎平右衞門が幕府の許可を得て玉川上水の兩岸に植ゑたので、多年の栽植により元文年間に長い櫻並木が出來た。（此川崎氏に就ては高橋源太郎氏の詳說が「櫻」第六號大正十二年に載つて居る）。櫻の苗木は主として吉野から採り又櫻川からも移したとしてある。現に小金井に見る櫻樹が白山櫻の多數の天然品種から成つて居り、若葉の色の樣々なるのみならず、花の色も純白から淡紅に至るまで變化があり、其他、花の着方の粗密、花梗の長短、並に毛の有無、花の大小、香氣の多少、花期の早晩、木振など變異の著しいのは本邦中部・北部等から廣く集めた爲であらう。

小金井の櫻は並木となつて、境橋の境水衞所から水上の小川水衞所まで約一里半の間に亘つて居る。此間にある橋は境橋・新橋・梶野橋・關の橋・新小金井橋・小金井橋・貫井橋・茜屋橋・喜平橋・山家橋である。其中小金井橋の附近は略〻中央で、大木が多く立派であるが、川下の方にも日の出の櫻・入日の櫻・三吉野櫻などの著しいものがある。富士見櫻も此附近にあつて、大輪淡紅の美しい山櫻であつたが、太い幹は折れ、現今は其根本から出た一枝が主幹に代つて居る。

小金井橋の傍の　明治天皇行幸の碑のある附近にも立派な櫻がある。花時は花見の人が多いが、並木が長いから割合に混雜しない。殊に小川水衞所附近になると益〻閑靜になる。境橋から此處まで水道の南北兩岸に植ゑてある櫻の數は約千五百本である。

小金井の櫻は東京市に屬し、市で其保護を講じて居る。此處の櫻は昔時植ゑた後順次植ゑ繼いで來たが、近世になつて樹の損傷が殊に甚しいから、明治四十五年自分は戸川安宅氏と共に當時の東京市長尾崎行雄氏へ保護を請うた。其爲め東京市では爾來年々樹の手入を施し、損傷部の治療を加へ、又補植を行うた。其結果今日見るが如く樹勢を回復し、毎年盛に花を着けるやうになつた。此櫻樹の保護に就ては東京市技師井下清氏が大に盡力された。

すべて武藏野の土壤は櫻樹の發育に適して居るため、關西に於けるものと違ひ立派に成木する。此實例は小金井の櫻に於て最も明である。要するに同所の櫻は白山櫻の多數の天然品種を含むこと、盛に成木して居ること、大木の多いこと等によりて本邦屈指の櫻の名所である。

荒川の櫻　東京府下南足立郡江北村の荒川堤防に明治十九年に植ゑた櫻並木がある。是れは當時の村長清水謙吾氏の發意で、東京巢鴨傳中（でんちゅう）の植木屋高木孫右衞門方から多數の里櫻其他の品種を購入して植ゑたもので、其時の記錄には七十八種として一々名が附いて居る。（此時の櫻植付の顚末は「照代樂事」（明治二十四年出版）に載せてある）。）

此櫻が明治三十年頃には已に成木して花が立派に咲いて來た。彼の向島や上野などの櫻卽ち染井吉野と違つて、花が大輪で八重のものが多く、又毬のやうに群がり、尾のやうに長く着き、色も濃

紅・淡紅・紫紅・白・黄・萌黄・緑・染分などになり、其上に匂櫻さへある爲同處の櫻は非常に珍らしいものとして世に名高くなつた。それも其筈是れ等の櫻は一種毎に日本の名櫻として古來觀賞され、愛護されたもので、昔は大名の別墅などに秘せられ、容易に觀ることさへ出來なかつたものである。それが今荒川の堤上に集植せられて、一般公衆が自由に觀覽することになつたから、始めて日本の櫻に斯くまで美しい種類が多いことが分り、殊に花の紫がゝつたもの、萌黄色や緑色のものなどが入り交つて咲いて居る爲め、世に荒川の五色櫻として稱せられた。

荒川の櫻が其後の生長に伴ひ花の美觀は益〻增したが、先年から同所に河川改修工事の施されたため、此著しい櫻の並木の或る部分は取拂はれてしまつた。併し今日でも尙舊堤防の殘つて居る所には多數の櫻があるから、毎年花見に行く人は夥しい。

船津靜作氏は江北村の人で、前に述べた清水氏が初めて櫻を植ゑ付けた當時から今日まで、三十餘年一日の如く、堤上櫻樹の保護に努め、又櫻花の特性を觀察し、一方多數の希望者に苗木を分ち、殆ど櫻の爲に寢食を忘れて盡力されつゝある。荒川の櫻が今日其名聲を保つは一に同氏に由ると言はねばならぬ。

船津氏の最近の調査によると、今日堤上に生存して居る櫻（主として里櫻の品種）は江戸・鬱金・松月・麒麟・江北匂・日暮・有明・福祿壽・鷲の尾・長川緋櫻・上匂・白雪・白妙・便殿・天の川・金剛山・薄墨・祇女・駿ヶ臺匂・苦清水・車返・雨宿・名月・小塩山・細川匂・九重・法輪寺・瀧匂・千里香・嵐山・八重曙・類嵐・南殿・滿月・御座の間匂・關山・一葉・普賢象・御衣黄・薄寒櫻、外に染井吉野を合せ約四十餘種であるといふ。此中關山・一葉・普賢象・御衣黄は比較的多いが、其他の品種は甚少い。又猩々・泰山府君・紅虎尾・紫櫻などの珍種で堤上に絶えたものがある。

荒川の櫻は栽植當時とは品種の數は多少減じたとはいへ、今日尙多數の珍稀なるものを有し、花の濃艶なる美觀は言ふに及ばず學術研究の資料として貴重なものである。畢竟同所の櫻は里櫻として最も優美なる古來の品種を多く有する點に於て、他所の櫻に對して一大特色を呈して居る。

（因に記す。去る明治四十五年東京市から米國へ贈つた櫻は此荒川の苗木である。）

榴ヶ岡の櫻　仙臺市の榴ヶ岡は東北地方著名の櫻の勝地である。同所の櫻の異彩を放つのは全く彼岸櫻と枝垂櫻の大木の多いことで、同處の舊馬場の兩傍に立派なる並木を成して居る。其他釋迦堂附近・聯隊構内などにも右の櫻の大木がある。是等の櫻に就ては大正十一年の春一々調査したが、（「史蹟名勝天然紀念物調査報告」第三十四號參照）彼岸櫻・枝垂櫻とも花の白いもの、淡紅のものがあり、又稀に八重のものもある。

榴ヶ岡の櫻は元祿の頃、伊達綱村の命によつて植ゑたもので、其樹種は何れも此地方固有の產である。世に彼岸櫻や枝垂櫻の巨樹は少くないが、何れも孤生して居て、此榴ヶ岡に見る如く多數集

植されたものはない。樹の太さは目通り周圍一丈五尺以上のものがあり、大木と稱すべきものが數十本もある。

右の點に於て榴ヶ岡の櫻は名所として著しい

御室の櫻　京都の御室の櫻は仁和寺の境内にあつて、昔から名所として知られて居る。境内の一段高い處に多數の櫻が植ゑてあるが、普通見る櫻と違つて、何れも灌木狀に仕立て、根本から數多の枝を發生させ、恰も躑躅の如き樹姿を呈して居る。悉く里櫻の品種で、殊に車返・有明・麟金・匂櫻などが多い。

是等の櫻は列を成して植ゑられ、總計數百株もある。丈が低く、枝が密集して、特異の觀を呈することで此處の櫻は著るしい。場所が閑雅な境域であることも此櫻に一段の價値を添へて居る。

以上擧げたものは櫻の名所として屈指の場所で、今其特徴を約言すると略〻左の如くである。

吉野山　山地に於ける白山櫻の名所として、區域の廣いこと、櫻の多いことで日本第一である。

嵐山　峽谷の風景によれる白山櫻の名所として著しい。

櫻川　吉野に次での古るい櫻の名所で、白山櫻の中東北産の美しいものが多い。

小金井　武藏の平野に於ける白山櫻の一大集植で、吉野・櫻川其他の產を交へ、天然品種に富んで居る。

荒川　里櫻の優れた品種を多數集めた點に於て全國無比である。

榴ヶ岡　彼岸櫻・枝垂櫻の大木を集植した名所として特色がある。

御室　里櫻の品種を灌木狀に仕立て、特異の樹狀を帶ばしめた點で古來著名の勝區である。

此他に尙染井吉野の名所として熊谷の櫻、紅山櫻の名所としての札幌神社境内の櫻などがあるが茲には述べない。

櫻の名所の保存　前に述べた吉野を始め櫻の名所を保存するに就て第一に肝要なのは、是等の名所の特色を維持することで、是が爲には古來植ゑられた櫻と同一の種類を植繼いで行かねばならぬ。卽ち吉野には同山中の白山櫻を、櫻川・嵐山・小金井等には同所在來の山櫻の天然品種を、榴ヶ岡には東北產の彼岸櫻と枝垂櫻を、荒川には里櫻の優れた品種を、御室にも昔から傳はつて來た里櫻をそれ〳〵植繼くことで、斯樣にしなければ是等の名所の特色を存することが出來ない。櫻でさへあれば何でもよいやうに考へるのは大なる間違で、上に述べた名所は各〻櫻の特殊の種類で名を成したのである。吉野といへば直に山櫻を聯想し、荒川といへば里櫻を想出す如く、名所にはそれぞれ固有の櫻がある。是が名所保存上最も注意を要する點で、各自の種類や品種の絕えないやうに順次苗木を作つて、枯損樹を補充して行かねばならぬ。吉野其他の古い櫻の名所が今日も其特色を保つて居るのは古人が絕えず植繼いで來たからで、將來に於ても同樣に植繼を行ひ、固有の櫻の存續

に努めなければならぬ。（史蹟名勝天然紀念物第六卷第四號大正十二年）

名櫻の保存に就て

名櫻とは古來著名の櫻で、或は其品種の稀な點にも依り、又其美しいことに依り、若しくは木振の優等なるか、又は壯大なるかに依つて持て囃されたものである。場合に依つては歴史的に由緒あるもの又は傳說などに依つて著名になつたものもある。

是等の櫻は名木として又は大木として古來名高かつたものであるが、それが今日では只昔の書物に記され又は圖畫の上に現はれて居るのみで、其實物は全くなくなつたものが尠くない。或は今日に後繼樹として殘つて居るものもあるが、然し其品種は初めのものとは全く違つて居るものがある。

昔の時代に出來た櫻の名種は、櫻花圖譜の類に多く畫がかれて居る。其一を擧げると、文政の頃廣瀨花隱の描いた「三十六櫻譜」には京都並に其附近の櫻、或は關東地方などの名櫻の寫生圖が載せられ、其名稱と所在とが擧げてある。

名櫻を學問上から觀ると、品種として貴重なものがあるが、中には前に述べたやうに單に歴史的由緒のあるもの又は傳說の上から名高くなつただけで、種類としては平凡なものもある。尤も是は

前述の如く、初の櫻は優れたものであつたが、それが枯れた後に、後繼ぎとして植ゑられたものが平凡の種類であつたかも知れぬ。是迄所々の名櫻なるものに就て實地に調べた所、又は古來の櫻譜の類に就て檢した所に依ると、苟も名櫻と呼ばれたものは單に傳說等で名高かつたばかりでなく、實際櫻として優れた性質を有つて居るものが尠くない。若しさうでなかつたならば、古來人々が之を名木として觀賞する筈がない。優れたればこそ人が大切にして保護して來たので、若しありふれた櫻であつたならば、誰も見に行く者がない。又之を保護する人もなかつたであらう。

昔の名櫻として今日に傳はつたものゝ中で、特に優れたる性質を有つて居るものは、卽ち花の珍しいもの、或は極めて美しいものであるが、其中でも奈良八重櫻の如きは著しい。此櫻の名は昔の書物に往々出て居るが、それは只名所の櫻として擧げられたまでゞ詳しい記載もなく、繪もなかつたから、今日之を想像することが出來ない。彼の「源平盛衰記」に載せてある興福寺東圓堂の前の八重櫻は如何なるものであつたか、勿論調べることが出來ない。然し古い時代に、奈良に美しい八重櫻のあつたことは考へられる。

今日の奈良八重櫻が品種的に記載されたのは德川幕府時代からで、延寶九年に出版した水野元勝の著「花段綱目」に簡單なる記載がある。次で寶曆八年に出版した松岡玄達の「櫻品」には奈良櫻として圖を揭げ、「八重櫻也、花小輪にして甚やさしく、色赤し、莖長く細し、伊勢大輔が歌に依り

て好事のもの名とす」と記してある。此記載は今日の奈良八重櫻に全く合つて居り、又同書の奈良櫻の圖とも一致して居る。

享和二年に撰ばれた市橋星峰公の「花譜」第一冊には寧良八重櫻として寫生圖が載つて居る。又文政五年間に出來た白河樂翁公の「浴恩園櫻譜」並に同時代に作られた屋代弘賢撰三好汝圭畫の「櫻花圖」又天保十二年に描かれた坂本浩然の「長者ヶ丸櫻譜」の類に現はれて居る奈良櫻も今日の奈良八重櫻に悉く符合して居る。

畔田伴存の「古名錄」には奈良八重櫻の古花の圖を載せ、「古花八重櫻は花小し云々」と記載し、又「新花の奈良八重櫻は大輪なり」としてある。之に依ると、此時代に新花として存在して居た奈良八重櫻は大輪であるかの如く思はれるが、併し花の大きさに就ては正確なる寸方が載つて居ないから、はつきり解らない。今日の奈良八重櫻はさまで大輪ではなく、言はゞ小輪の部に屬するものである。

現在の奈良八重櫻の花瓣の數は約三十枚、一樣に紅色で甚だ美麗である。蕾の先端は扁らたく、眞紅である。花梗には細まかい毛がある。

此櫻は奈良の知足院にあるが、其蘖を同市の師範學校構内其他に植ゑたものがあり、又春日神社の境内に見る所のものも、多分根分けであらう。

名櫻の一としては又伊勢の白子不斷櫻がある。是は白子の子安觀音の境内にあつて、昔の書物にも出て居る。「伊勢參宮名所圖會」などを見ても、此櫻が描かれて居り、其他、櫻譜などに出て居る所を以て見ると、古來著名のものであつたことが解る。

實曆五年發行「繪本櫻狩」に載せたる白子不斷櫻の圖

不斷櫻と稱するものは世に往々ある。是は年中花の絶えないものであるが、場所に依つては冬は葉が落ち、又花が甚だ少い。然るに白子の不斷櫻は冬の眞中も綠の葉が着き、又一方には美しい紅葉もあり、淡赤色の若葉も出て居る。其上に絶えず白い花が咲き、實がなつて居る。一月頃に行つて見ると、雪の下で花が咲き葉が着いて居て、極めて珍しい。すべて冬の花は柄が短かく、一所に密集して咲くが、春先きの花は柄が伸びて長くなり、又花の着方も違ふ。秋も花が咲いて恰も春の花のやうに柄が長い。畢竟此櫻は一年を

通じて絶えず花を開き實を結ぶ。葉は新陳交代するが、普通落葉木であるべき櫻が常磐木となつて居るのみならず、花の絶えないことが特徴である。此處の櫻は不斷櫻の中の最も著しいものであらう。此櫻は觀音寺の靈木となつて居つて、周圍に石垣を繞らし、大切にしてある。根本から蘖が發生して幾本の幹にもなつて居る。前に述べた文政の頃の廣瀨花隱の「三十六櫻譜」には此櫻の紅葉して且花の咲いたところが能く描かれて居る。

美濃の揖斐に二度櫻と云ふ珍しい櫻がある。葉は淺い單鋸齒を有し、赤芽で、恰も山櫻のやうに見えるが、花は一重咲と八重咲と二段咲との三種になつて居る。一重咲の花は概ね四月十日頃後開き、初めは淡紅で後には白くなる。花の直徑は約一寸、恰も山櫻の花のやうに見える。然るに此時期に於て別の枝には八重の淡紅の花が咲く。花瓣は三十枚から四十五枚くらゐもあつて恰も里櫻のやうである。

四月の下旬頃から五月初めにかけて二段咲の花が別の枝に現はれる。是は八重になつて居る花の瓣が散ると、花の心から更に一箇又は數箇の花が咲くのである。外側の花には約五十枚の花瓣があり、内部の花には十枚以上の花瓣がある。内部の花は花の中心に一箇存在し、又は幾つも列んで生じて居る。是等の花は各〻蕚を有し、判然二重咲である。二度櫻とは二段又は二重に咲くからで、一年に二度咲く意味ではない。

此櫻に就ては天保年間既に土地の人に依つて記載されたものがある。現存の櫻は昔の櫻の蘖から出たものとして傳はつて居る。

以上奈良八重櫻・白子不斷櫻・揖斐二度櫻は共に大正十一年三月七日の内務省告示で天然紀念物の中の名木として指定された。

前に述べたものは何れも名櫻に屬するものであるが、其他國内所々を通じて古來の名櫻が辛じて今日に殘つて居るものがある。是等の名櫻を其儘に放棄したならば遂に全く跡方もなくなるであらう。後繼樹としては是非親木から分けた蘖を植ゑなければならぬ。

昔の名花として今日に只其名のみ傳へられて、種類の全く變つたものが少くない。今茲に實例を擧げると、東京上野の秋色櫻の如きはそれである。此櫻は秋色女に因んで名付けられたもので、前に述べた屋代弘賢の「櫻花圖」などにも描かれた極めて美しい櫻であるが、今日其場所にあるものは全く別の種類で、平凡なものである。又東京澁谷の金王櫻の如きも今から約百年前寛政年間に度々出版された「花信風」に載せられて、彼の法輪寺と云ふ櫻に似て居るが、今日同處に金王櫻として植ゑてあるものを見ると、之とは多少違つて、若葉の色、花の特徴などが一致して居ない。

京都の千本閻魔堂に昔から普賢象と云ふ有名なる櫻のあつたことは古書に出て居る。此櫻は今日東京初め所々に見られるが、現に閻魔堂にあるものは、眞の普賢象ではない。

京都東漸寺の庭に泰山府君と云ふ珍しい櫻のあつたことは寛政年間に出版した秋里籬島の「都名所風月」といふ書に出て居る。此櫻は名花として已に德川幕府の初期に知れて居たが、今日では唯稀に見るのみで、東漸寺も廢寺となつたから此櫻もない。舊同寺の境内には數本の櫻はあるが泰山府君は現存しない。

嵐山の側の虛空藏法輪寺には　後水尾天皇勅銘の法輪寺と云ふ櫻があつて、古るい櫻譜の類にも出て居る。然るに今日では同寺に此名木がなくなつたから、先年東京附近の荒川堤防にあつた此櫻の穗を江北村の船津靜作氏に乞うて同寺へ送つた。

斯樣に古來著名の櫻が其元の場所に絕えて、却つて他の地方に殘つて居るものがあるが、是等は成るべく元の場所に殘して置きたいものである。斯樣に珍らしい櫻の無くなつたのは、畢竟保存の往屆かないからで、凡べて名櫻は蘖を分けたり、又は接木をして數を殖やして行かねばならぬ。今日見る所の普賢象を始め優れたる櫻は何れも此方法に依つて繁殖させたのである。

名櫻を保存することは園藝上よりも學問上よりも亦天然紀念物の上からも大切である。是等の櫻の保存は昔の時代に於ては却て今日よりも良く行はれた。其譯は當時の大名其他有志者が其蒐集に努力したのみならず、之を後世に傳へる爲に培養して圖を作らせ、形狀を記載させ、其湮滅を防いだからである。前に述べた寛政時代から文化文政頃の大名の中で市橋星峰公・白河樂翁公の如きは櫻の名木の保存に努められたことは知れて居るが、天保時代に於ては江戸靑山の長者ヶ丸の久保櫻顚の如きは其園中に多數の名櫻を集めた。此處の櫻は當時の番附によると百三十六種として記され、坂本浩然によつて一々寫生された。此寫生圖は「長ヶ者丸櫻譜」又は「浩雪櫻譜」として遺つて居る。

近世になつては櫻の保存が疎かになつたが、明治年間では宮崎玉緒が櫻の保護と寫生とに努めて、京都平野神社の境内に多數の名櫻を植ゑた。それが今日でも同所に殘つて、一々名が記されて居る。

東京では荒川の堤防の中の江北村に屬する所に明治十九年に植ゑた里櫻の多數の品種があつたが、曩に河川工事の爲に其中の大部分が取除かれ、僅に其一部が今日に殘つて居る。然し幸にして同村の船津靜作氏の盡力によつて、是等の貴い品種が保存された。

要するに櫻の名木の保存は成る可く安全な場所に於て行ふべきことで、河川工事其他土木工事等の爲に取拂はれる危險のある場所又は土地の發展の爲に無くなる虞のある所、其他煙害などの多い處には到底望むことが出來ない。東京帝國大學理學部附屬の小石川植物園にも是等の荒川の品種其他名櫻の品種が多數保存されて居るが、是等の品種は何れも絕えず接木等の方法に依つて無くならないやうに保護して往かなければならぬ。今日でも日本全國を通じて古來の名櫻を需めて見れば可なり多數に上るであらう。是等のものを篤と調査して其品種の保存を圖りたいものである。

（櫻第六號大正十一年）

櫻の名木の保存に就て

京都をはじめ近畿地方又は江戸その他に舊幕時代に於て櫻の名木として知られたものが少くなかつた。是等の名木は一々その所在地が當時の地誌・名所圖繪・名所案内記などに載せられ、その圖や花の形などまで出てゐるものがあつた。又名櫻を詠んだ和歌・狂歌・俳句などもあつて、是等の櫻が愈〻名高くなつた。

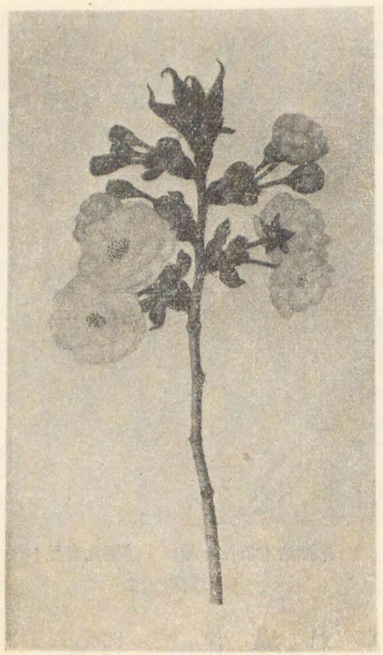
寛政以後櫻の名木の圖が世に知られた來たが、これは多くは三熊花顛の筆になつたもので、それが後に多少變つて來たものと見られる。花顛は多く旅行に日を送つて各地の名櫻を調べ、その特徴を畫筆に收めたが、その寫生圖にはこれらの櫻の所在地が悉くは擧げてない。

文政の頃には廣瀨花隱が名櫻三十六種を寫生した。同人の畫には一々その所在地を記したものがあるから、今日から見て大に參考になる。

名櫻の中で殊に著しいものは　後水尾天皇勅銘の櫻といはれるもので、これが京都附近には多くあつた。例へば嵐山の法輪寺に**法輪寺櫻**があり鞍馬口閑臥庵に**曙櫻**があつた。この法輪寺櫻は去る大正九年四月十日自分が同寺へ往つて調べた時には昔からの同櫻樹は已に無くなつてゐた。この櫻

が法輪寺にあつたことは昔の書物にも出てゐる。花は淡紅色、八重で、花徑が約一寸五分もあり、花梗が長く、見事な櫻である。

閑臥庵の曙櫻は大正十年四月二十一日始めて同寺へ往つて花を調べ、その寫生圖を作つたが、その後再び十二年四月十七日見に行つた時は樹勢が甚だ衰へてゐた。此頃聞く處によると、此名木は遂に枯れたといふ。



京都鞍馬口閑臥庵の曙櫻
Prunus serrulata Lindl. f. *lucifera* Miyos.
（西野豬久馬氏寫生）

大阪の住吉の慈恩寺に昔車返櫻と云ふ名木があつて、その圖は「住吉名所圖繪」にも出てゐる。この櫻が現存するや否やに就き先年大阪府へ照會したところ、慈恩寺は廢寺になり、隨つて櫻のあつた所さへ分らなくなつたと。

かやうに古來の名櫻の無くなつた例は外には甚だ多い。前記の法輪寺のやうに昔から櫻の愛護者の手によつて原樹の接木から繁殖させたものが今日に遺つて、荒川堤防の如く名櫻の集植された中

に含まれ、再びこれを原樹のあつた處へ復木することの出來るのは幸である。如何なる名櫻でも原樹は歳月と共に衰弱して遂に枯れる運命になるから、平素接木によつて苗木を作り繁殖させて置く必要がある。もしこれを怠たつたならば後繼樹が得られずして、名櫻の系統が全く絶えることになる。

筆然浩本坂たせ載に「譜櫻丸者長」
泰山府君の圖

茲に尙述べるのは古來名櫻のあつた場所に今日では違つた櫻が植ゑられてゐることである。例へば**泰山府君**は古來の名櫻で、昔から愛護された爲、この品種は荒川の櫻堤にも植ゑられ、それから他所へも分植されたが、大正十一年四月二十日京都の舊東漸寺跡へ往つて調べたところ、そこで泰山府君と云はれてゐるものは全く別種の櫻であつた。泰山府君は箒櫻や猩々に似た珍らしい櫻で、細い枝が多く上の方へ立ち、こんもりした樹形により、花は淡紅色で花梗が細く、毛がある。

京都千本の閻魔堂に昔からあつた**普賢象**も後世になつて、外の櫻に變つた。先年調べた所では同寺には眞の普賢象はなかつた。

前述のやうに名櫻の系統の無くなつたものや、又後繼樹が同系統の櫻でないものもあるが、亦他には幸に古來の名櫻がその儘能く保存されたものもある。例へば伊勢の**白子不斷櫻**の如きは寶曆五年出版された「繪本櫻狩」にもその圖が出てゐて、當時も著名であつたことが分る。無論「櫻品」にも載せてある。この櫻は今日も白子の子安觀音の寺内にあつて、四季花と葉を着けてゐる。かやうに現今まで遺つて來たのは一に寺の保護が行屆いたからである。

奈良知足院の奈良八重櫻
Prunus antiqua Miyos.
（西野猪久馬氏寫生）

大阪府三島郡疣水の**伊保櫻**も樹は傷んだが今日に生存してゐる。これは珍らしい八重山櫻の大木である。

奈良八重櫻　も著名な櫻で、紅花・中輪で、重ねが厚い。現に奈良の知足院に保存されてゐる。

新潟縣越後梅護寺の**珠數掛櫻**は親鸞上人の靈木として古來名高かつたもので、老樹ではあるが、

根元から蘖が出て、それが生長したものが現存してゐる。

岐阜縣揖斐の**二度櫻**も珍奇な櫻で、他の名櫻の如く汎く知られてはゐないが、學問的に稀なるものである。この樹は甚だ傷んで居り、而かも唯一株のみであるから十分の保護を要する。

上記の白子不斷櫻以下の名櫻は何れも史蹟名勝天然紀念物保存法によつて天然紀念物として指定されてゐる。

櫻は無數あるが名櫻は稀である。古來名櫻として觀賞され、愛護されたものは何れも稀な品種で、花性の優れたことゝ又珍奇なことで群を抜いてゐる。かゝる名櫻が如何にして生じたか、その來歴は不明であるが、何れにしても日本の櫻の先天的向上性が著しく現出したものと考へられる。

（櫻第一〇號昭和三年）

指定された櫻

日本には多數の櫻の名所や又櫻の巨樹・名木があるが、その中にも全國的に著しいものは特に法律に依つて指定された。此中、櫻の名所は名勝又は名勝及天然紀念物として指定され、又櫻の巨樹や名木も天然紀念物として指定されてゐる。

今日櫻の名所として知られてゐるものは多くは、新らしく出來た處である。また櫻の種類も大抵染井吉野で何等珍らしい品種がない。たゞ人が多く花見に行くので有名になつた處が多い。斯樣な場所は法律で指定される價値は殆んどない。今迄指定された櫻の名勝又は名勝及天然紀念物は古來歴史的に有名であるか、又縱令年代が古くないにもせよ櫻の種類や品種の上から見て珍稀であるによつて保存されたのである。

以下是等の指定された櫻の所在地並に其の特徴を一々略記する。

名勝

（一）吉野山　奈良縣吉野郡

吉野山は櫻のみでなく史蹟として同時に指定されて居る。櫻の名勝としての吉野山は、櫻の歴史の古いこと、又櫻の多いこと、地域の廣いこと、山谷の風景の大きいことで日本一である。此處の櫻は何れも白山櫻で、關西地方の天然品種を多數網羅してゐる。昔から吉野の山奥の櫻を集めて植ゑたもので、今日でも同じ系統のものが殆ど皆代表されてゐる觀がある。

吉野には瀧櫻・布引櫻・關屋の櫻などの名木が昔から知れて居る。吉野の中で櫻の最も多い處は一目千本（下の千本）・中の千本・上の千本・奥の千本であるが、櫻の一帶にある區域は約二里の間

に亘つてゐる。花期は一目千本では大約四月中旬で、中の千本から上の千本、奥の千本まで花期の進むのは約十日もかゝる。山下六田まで電車の便がある。それから一目千本の上まで自動車が通じる。（大正十三年十二月指定）

（二）**櫻　川**　茨城縣西茨城郡東那珂村

吉野に亞での古い櫻の名所で、藤原氏時代から知れてゐる。謠曲の櫻川が卽ち此處である。木花開耶姫命を祀る磯部神社の社前の廣場の兩側にも美しい山櫻が植はつてゐる。又馬場の奥の廣場にも山櫻の大木が數本あるが、その中枯れたのもある。又社殿の前にも美しい櫻がある。

此處から數町離れた處に櫻川の小さな流れがあつて、其岸にも櫻がある。

櫻川の山櫻は吉野などゝ異なり花の赤色を帶びたものゝ多いこと、匂ひのあるものゝ混じつて居ること、又花梗に毛のあるものが割合に多いこと等で著しい。當所の櫻は關東から東北地方の美しい山櫻の天然品種を代表してゐるやうに見える。

花期は約四月十五日頃である。汽車驛は岩瀬又は羽黑で、其處から十町許りで櫻の馬場に達する。（大正十三年十二月指定）

（三）**小金井**　東京府北多摩郡武藏野村・小金井村・小平村

關東平野に植ゑられた山櫻の代表的名所で、元文年間に植ゑられたものである。吉野山と櫻川から苗木を移植したと言はれてゐる。實際此處には關西地方の山櫻と關東から東北地方の山櫻が混じつてゐて、それが地味に適してゐる爲め盛に成木してゐる。場所は玉川水道の兩岸で、約一里半に亙つて居る。

小金井の櫻の中にも富士見櫻・日の出櫻・其他著しい大木がある。富士見櫻は幹は折れたが、現にその蘖が生えて居る。

小金井の櫻は東京市の所管で、年々櫻樹の保存を講じるため樹が何れも健全である。花期は四月十日過ぎから二十日過までゞ、東京から電車の便がある。（大正十三年十二月指定）

（四）**御　室**　京都府葛野郡花園村

徳川幕府の中期頃から知られた櫻の名所で、仁和寺の境内にある、此處の櫻は他の名所の櫻と異なり根元から多くの枝に分れて、恰も躑躅の如き灌木狀になつてゐる。何れも里櫻の園藝品種で、その樹形の特異な點に於て類がない。花期は四月二十日頃である。（大正十三年十二月指定）

（五）**嵐　山**　京都府

嵐山は史蹟及名勝として指定されてゐる。名勝としては櫻ばかりではないが、櫻の嵐山は又昔から名高い。

此處の櫻は何れも白山櫻で、元來山中に自生してゐるものがあるが、昔吉野から多く移植された

こともあつた。現に櫻の最も多いのは大悲閣の邊で、木立の間に見え隠れしてゐる。花期は四月中旬である。（昭和二年四月指定）

（六）**荒川堤**　東京府南足立郡江北村

明治十九年荒川堤防が出來た時に紀念として植ゑられたものであるが、其後河川改修工事に依り或部分が取拂はれたが、その殘された部分が名勝として指定された。

此處の櫻は古來の里櫻の名種を集めたもので、植ゑられた當時は七十八種としてあるが、其後次第に枯損したから現今では品種の數は遙に少くなつて居る。是等の櫻は一々正しい名がついてゐて昔の文獻や圖畫にも表はれてゐる。舊時は大抵大名の庭園などにあつたもので、それが今日では一處に集植せられて、誰にも自由に見られることになつた。花期は四月中旬から下旬で、重ねの厚い品種ほど後に咲く。（大正十三年十二月指定）

（七）**榴ケ岡**　仙臺市

仙臺市の宮城野の上部の高臺の一部である。此處の櫻は彼岸櫻と枝垂櫻で大木が多い。舊馬場の兩側に立派な並木を形づくり、又釋迦堂附近にもある。目通周圍一丈五尺くらゐを首め大木は數十本ある。

是等の櫻は花の色の白いもの、淡紅のもの又八重のものなどがある。元祿年間伊達綱村の植ゑたものである。花期は四月下旬。（大正十三年十二月指定）

名勝及天然紀念物

（八）**霞間ケ谷**　岐阜縣揖斐郡本郷村

大垣の西方池田山の一角にある。白山櫻と彼岸櫻を多く植ゑた處で、舊幕府時代から知られてゐる。明治十四年頃に更に多數植繼だ爲め現に櫻の名所として著しい。花期は四月十日過で、附近まで電車の便がある。（昭和三年二月指定）

（九）**木曾川堤**　愛知縣葉栗郡草井村・宮田町・淺井町・葉栗村・北方村

木曾川驛から櫻のある堤上まで半里許りである。西端の北方村から東端の草井村まで約二里の間に亘つて堤防道路に櫻の並木がある。明治十八年に植ゑたもので、彼岸櫻と枝垂櫻が最も多く、それに山櫻が混じつてゐる。花期は四月中旬である。（昭和二年二月指定）

（一〇）**熊谷堤**　埼玉縣大里郡熊谷町

熊谷驛に接してゐる。堤上數町に亙つて明治十六年頃に植ゑた染井吉野の並木で、此種の櫻の名所としては古いものに屬する。花期は四月上旬から中旬までである。（昭和二年八月指定）

天然紀念物

一、巨樹

（一一）山高神代櫻　山梨縣北巨摩郡新富村

彼岸櫻の巨樹で、花の咲立ては少し赤味があるが、後に純白になる。地上五尺の周圍三丈五尺で單に彼岸櫻としてのみならず、櫻の種類の中で日本第一の巨樹である。樹齡が古いため樹が傷んでゐる。花期は四月中旬である。中央線日の春驛から約一里、實相寺の境内にある。（大正十一年十月指定）

（一二）根尾谷淡墨櫻　岐阜縣本巢郡根尾村

これも白彼岸櫻で、其大さは山高神代櫻に亞ぐものである。花期は四月中旬で、岐阜から十四里の北方で交通が便利でない。（大正十一年十月指定）

（一三）伊佐澤の久保櫻　山形縣東置賜郡伊佐澤村

一にお玉櫻とも云ふ。白彼岸の巨樹で、咲きたては淡紅色である。地上四尺の幹圍二丈七尺、枝が四方に張つてゐる。花期は四月中旬、長井線の長井驛から東方二里許りである。（大正十三年十二月指定）

（一四）三春瀧櫻　福島縣田村郡中郷村

紅枝垂の巨樹として他に比類がない。地上五尺の幹圍三丈一尺ある。枝が幹の高い處から長く垂れ、それに紅色の花が密生して極めて立派である。約六百年を經た老樹と見られるが、現に樹勢が盛んである。舊幕時代に三春藩主が特に此樹を保護した。花期は四月下旬、三春驛から一里餘である。（大正十一年十月指定）

（一五）狩宿下馬櫻　靜岡縣富士郡白糸村

富士の裾野の上部にある。山櫻の最も大きい樹で、赤芽白花、花も大きく美事である。地上約三尺三寸の高さから太い枝が擴がつて出てゐる。此部分の幹圍は二丈八尺ある。花期は四月十日頃、大宮驛から自動車の便がある。（大正十一年十一月指定）

（一六）石戸蒲櫻　埼玉縣北足立郡石戸村

櫻の珍らしい種類で、根本の周圍が三丈六尺、四本の太い幹が根本から岐れて出てゐる。關東平野にある最も大きい櫻である。根本に十數基の板碑があつて、その最も古いものは貞永二年の年號がある。

此櫻は馬琴の「玄同放言」に圖說されて居る。花期は四月中旬、桶川驛から一里許、東光院の境内にある。（大正十一年十月指定）

二、名　木

（一七）**知足院奈良八重櫻**　奈良市雜司町

紅色中輪の八重櫻で、花の柄に毛がある。珍らしい櫻で、昔から名高い。花期は五月上旬である。（大正十二年三月指定）

（一八）**白子不斷櫻**　三重縣阿藝郡白子町

白子觀音の境内にある著名の櫻で、寶暦頃の櫻の圖書にも此櫻が出てゐる。年中花が咲く。花は一重白花色で、春咲く花と秋咲く花とは、その大きさ、柄の長さ等が同じでない。冬でも落葉しない。白子町へは輕便鐵道の便がある。（大正十二年三月指定）

（一九）**揖斐二度櫻**　岐阜縣揖斐郡川合村

一重の花と、八重の花と、二段咲の花とがそれぞれ異なつた枝に咲く珍らしい櫻である。山櫻性であるが、斯る特性を供へてゐるものは外にはない。舊幕府時代唯一株のみ存在して居て、原樹は傷み、その蘖が成長してゐる。花期は四月中旬から下旬に亘る。岐阜市の西方數里で、その一部分は電車の便がある。（大正十二年三月指定）

（二〇）**盛岡石割櫻**　盛岡市

盛岡地方裁判所構内にある。花崗岩の大きな丸石の狹い割目から幹が現はれてゐる。割目の幅四寸許り、幹の太さ約九尺、木の高さは石の表面から一丈七尺、石の高さは地上一丈四尺五寸。白花の彼岸櫻で、樹種としては珍らしくはないが、狹い石の割目に生えて特異な成長を呈してゐる點で著しい。（大正十二年三月指定）

（二一）**磯良神社いぼざくら**　大阪府三島郡三島村

八重山櫻の老樹で、大木になり、疣水の磯良神社の境内にある。昔から名高い。根本から數十本の幹に別れて、其内の數本は枯れてゐる。花瓣が二十五枚ばかり、花徑約一寸、白色である。花期は四月中旬、茨木驛から北方約一里の距離にある。（大正十二年四月指定）

（二二）**梅護寺の珠數掛櫻**　新潟縣北蒲郡京ヶ瀬村

親鸞上人の靈木として昔から名高い。里櫻の珍らしい品種である。老木で原株が朽ち、七本の蘖が出て生木して居る。八重の紅色の花が長い柄に着いて垂れ、柄の長さが四寸にもなる。珠數掛櫻と稱する櫻は此外にもあるが、品種が違ふ。花期は四月下旬。羽越線水原驛西南一里に在る。（昭和二年四月指定）

（二三）**極樂寺の野中櫻**　新潟縣東蒲原郡上條村

紅山櫻は極めて大輪になつたもので、花瓣が圓るく、花徑二寸に達する。苞が粘る。花は濃紅色

である。

花期は四月下旬、岩城西線津山驛から約一里半餘である。（昭和二年四月指定）（櫻第一〇號昭和三年）

指定された富士櫻の群落

日本の櫻には山櫻をはじめ、彼岸櫻・里櫻・染井吉野櫻などの美しい櫻があるが、比較的珍らしい櫻としては富士櫻も其一である。

Prunus incisa Thunb. 櫻士富
（西野猪久馬氏寫生）

富士櫻は花の小さいところから一に豆櫻ともいふが、吉田口・須走口など富士登山道の馬返附近の林中に多く自生してゐるから富士櫻の名が付いた。灌木で、葉も花も小さい、花梗には毛がある。花は白色又は瓣端が淡紅色を帶びて愛らしい。

此櫻は富士山の外、箱根その他の地方にもある。庭園に植ゑては引立ないが、盆栽には雅致があるから、往々鉢植として愛觀される。

富士の裾野で吉田口の中茶屋から大石茶屋に至る登山道の両側の地域には蓮華躑躅と富士櫻が甚だ多い。四月下旬から五月上旬には富士櫻は開花して此地帶は美しい景觀を呈する。同地域は此櫻並に蓮華躑躅の群落として代表的であるから、最近史蹟名勝天然紀念物保存法によつて指定せられた。（櫻第一〇號昭和三年）

國立公園選定地内の櫻

昨年國立公園特別委員會で選定された十二箇所の國立公園の内で著しい櫻のある所を擧げると左の如くである。

十和田　**紅山櫻**が湖邊の樹林中に生えてゐて、可なりの大木になつたものもあり、又花の大きさも種々である。花期は五月中旬から下旬頃。

日光　中禪寺湖邊の樹林中に**紅山櫻**の大樹が散在してゐる。五月中旬が花期で、遠くから花の咲いたのが見える。此處の櫻は舊幕府時代から珍らしい紅色の櫻として江戸へ移された。或る大名や愛櫻家の庭園に植ゑられて、夕榮（ゆふばへ）の名が附いた。

富士　裾野一帶の樹林並に箱根に亘つて**富士櫻**が群落を成してゐる。此櫻には花性の天然變異が現はれ、花の大きさ、色其他種々に變つたものがある。山梨縣南都留郡福地村（吉田から馬返に達する登山道の附近）の躑躅原に此櫻と蓮華躑躅の天然紀念物指定地（昭和三年三月指定）がある。

此外に尙同國立公園選定地內に天然紀念物として**狩宿下馬櫻**（大正十一年十月指定）がある。此櫻は富士山大宮口の上部富士郡白糸村にあつて、白山櫻として日本第一の大樹である。地上約一米の高さに於て幹圍が八・五米、赤芽の美しい山櫻で、賴朝駒止櫻とも稱せられ、古來著名の老樹である。花期は四月中旬、交通の便がある。

吉野　白山櫻の古來の栽植地として全國第一の名所である。吉野山は史蹟並に名勝として大正十三年十二月指定され、山櫻は一目千本から中の千本・上の千本を經て奥の千本まで、約二里に亙つて見られる。

何れも白山櫻の吉野系統に屬するもので、彼の東北地方に見る所の花梗に毛のあるものや、花の赤色を帶びたものなどは少い。吉野の多數の櫻樹の中には花性の變異が現はれ、特に花香の著しいものが認められる。

吉野の櫻の中には關屋の櫻・瀧櫻・布引櫻・雲井櫻などの名木があり、古歌に表はれたが、近世になつて殆ど枯損した。

霧島　肥薩線吉松驛から遠くない蛤良（あひち）郡吉松村の栗野岳に天然紀念物として彼岸櫻自生南限地（大正十三年三月指定）がある。此處は**彼岸櫻**が一帶に生えてゐることで著しい。此櫻は鹿兒島縣下には他にも點々自生してゐるが、栗野岳に於ける如く樹林をなしてゐる處はない。

（櫻第一五號昭和八年）

櫻の特性

花の壽命と其生態

朝顔の花の朝開いて晝萎み、待宵草の花の薄暮に開いて翌日に萎むは花の壽命の短きによるが、他には數日數週の長きに亙りて生存する花あり。

花には一定の生存期を終れる後も散落することなくして萎凋するものと、又萎凋せずして散落するものとあり。櫻の花瓣の風に散り、山茶花の花冠の自ら離れ落つるが如きは後者の實例なり。

花には又蒲公英・チューリップ等に於ける如く幾回も開閉するものと、梅・桃其他多數の草木に見る如く一たび開ける後は閉づることなくして終るものとあり。

花の開閉の動機が、花瓣の基脚部の内外兩側に於ける生長運動の差異によるを始めて證明したるはフェッファー(Pfeffer)氏(1)にして、同氏の研究によりて、吾人は花冠の開發は花瓣の基脚部の内側の生長が外側の生長よりも盛なるに基くを知れり。

花の散落は花瓣の基脚部に於ける一定の部位に離層の生ずるによる(2)。花瓣の離層は葉の離層と異なりて、生活組織より成り、其細胞の膨壓增加の爲、隣接せる膜壁は次第に凸形を呈し、遂に離るゝに至る。花によりて離層を生ぜざるものは、萎凋するも散落することなし。

斯く花の開發は生長運動により、又花の散落は離層の生ずるによるものにして、開ける花は早晩散るを免かれざるも、而かも外圍の影響により開發の運動徐々なるときと、離層の形成の遲きときとは、共に花の壽命を長からしむ。外圍の影響中主なるものは溫度の低下なり。

花の開發を促す溫度は植物の種類によりて異なるも、凡べて溫度適良なるとき、又稍〻高きときは、花の生長運動は盛に行はれて、花は十分に開き、離層の形成も亦隨つて速なり。之に反し溫度低きときは生長運動遲緩にして、花は半開の狀態に止まり、又縱令滿開するも離層を生ずることなし。此の如き場合に於ても花の壽命は延長せられ、通常數日にして散る花も、十數日に亙りて依然生存すべし。

新年の床飾に用ふる盆栽の梅・福壽草の花は何れも室咲(むろさき)にして、比較的高溫度によりて花芽の生長を促進せしめ、半開に至れる後室外に取出し、普通の氣溫に置けるものなり。冬期の氣溫低きが故に、一旦開ける花も離層を生せず、又半開の花は其後の生長運動微弱なる爲、永く此狀態を保つを得。若し斯かる室咲の花卉をして依然暖處に在らしむるときは、速に開發運動を終り直ちに離層を生じて散るに至らん。

本邦衆多の花の中、花期の短きによりて著しきは櫻にして、殊に山櫻の花の如きは急に開き、急に散るを以て其特徴と見做されたり。彼の交通不便なりし昔時に於て遠方より來れる吉野觀花の旅客が、花の盛に逢はずして空しく歸れるもの多かりしは此故なり(3)。

櫻の美性が一は其落花の時にありとするは古來の定觀にして、和歌の上に表はれたるもの多きを見ても明らかなり。然れども落花を惜しむ人情より、一日も花期の長からんことを希ふ。況んや愛櫻家に於てをや。傳へ言ふ櫻町中納言（藤原成範）は最も櫻を愛し、神に祈りて三七日間花の壽命を延ばすを得たりと(4)。

櫻の年々の開花期・花期の長さ・落花期を觀察するに、開花期は氣候の狀態によりて頗る差異あり。概して開花期の頃まで氣溫低く、其後急に溫暖となるときは、花蕾は速に生長して開發し、而して開花後の氣溫依然高きときは、日ならずして散落するも、之に反し一旦開發したる後、俄に氣溫低下し、爾後低溫度持續するときは花期は頗る延長し、例年よりも一週又は十日間も長く花を着くることあり。

予の從來の觀察中、此の如き實例には明治四十一年四月九日東京に於て遭遇せり。前日まで氣溫普通にして、染井吉野は半開せるが、前夜溫度低下し降雪あり。九日朝に至り東京市内市外の染井吉野の花叢は白雪に包まれ奇觀を呈せり。其後、花期は寒冷の影響により頗る永く持續し、同月十六日頃に至りて始めて滿開するを見たり。四月中旬以降染井吉野の花の盛を東京に於て見たるは異例と云ふべし(5)。

低溫度が櫻の花期の延長に大なる影響あるは右の實例において明かなるが、予は尙之に關し大正九年の春實驗を行へり。材料は緋寒櫻・薄寒櫻・紅彼岸・白彼岸・染井吉野等にして、花の咲きかかれる枝を切り水を盛れる瓶に挿し、之を低溫匣に入れたり。低溫匣は普通の冷藏匣と略〻構造を同じくし、唯表面に二重の玻璃戸を設け、匣内を明るくせるの差異あり。内部は上下に區劃して二段となし、氷塊は匣の上棚に入れ、氷の溶解したる水は管によりて匣の下底に導き、其處に溜らしめ、以て下方より匣内を冷却せしめたり。

試驗材料は匣内に入れ、日々花の開發せる數並に開發の度を檢し、且花瓣の生長を測れり。別に同樣の比較材料を室内に置き、以て試驗材料と對照せり。

今茲には右の試驗の詳細の記事に亘ることなく、單に其摘要に止むべし。

四月一日午前九時半低溫匣に氷を入る。（材料）緋寒櫻　滿開　試驗着手
同　二日午前十時　低溫匣上段攝氏五度　花異狀なし
同六日午前九時四十分　花の壽命と其生態

（比較材料）
室内攝氏十三度
花稍〻萎凋せり

低溫匣(上段)　六度　　室內十三度
花異狀なし　　花萎凋し、又散落す
同　同日
(材料)染井吉野　每枝僅に二三花を開く　試驗着手
同　七日午前九時半　　室內十三度
低溫匣(上段)五度　　何れの枝も花八分通り開く
花の開ける數並に花の開度に變化なし
同十五日午前十時半　　室內十六度
低溫匣(上段)六度　　何れの枝の花も皆滿開し散り始む
第一號枝　花三分通り開く
第二號枝　花七分通り開く
すべて花冠は十分に開かず
同　二十三日午前九時　　室內十四度
低溫匣(上段)七度　　花過半散落つ、殘れる花の心赤變す
殆ど全部開花せるも花冠十分に開かず且花心赤變せず
五月一日　午前十時　　室內十七度
低溫匣內(上段)六度　　殆ど皆散落つ
花依然生存し異狀なし
同　四日午前十時　　室內十五度
低溫匣(上段)六度　　全く散落つ
花依然生存し異狀なし
(備考)　紅彼岸・白彼岸・薄寒櫻及里櫻の或種類は何れも低溫匣內に於て五月上旬まで花を保てり。

前の記事の如く、氷室內(攝氏約六度前後)に置きたる染井吉野及び其他の櫻は、五月上旬に至るも散落せずして、花期の延長一箇月以上に亙れり。而して比較材料として室內に置ける花が自然にある同種の櫻花に比して頗る長く生存せるは、是れ室內の溫度其他の狀態の異なるに由れり。

右の試驗に於て試驗材料及び比較材料の花瓣の伸長の速度を測れるに、凡べて前者に於ては後者に於けるよりも小なるを知れり。斯く低溫度に於ける花瓣の伸長の微弱なるは、卽ち花の壽命を長からしむる原因にして、是等の花の十分に開かずして半開の狀態を保つもの多きは、正に花瓣の生長の終了せざるを示すものと云ふべし。

上記の實例及び試驗によりて證明せられたる如く、低溫度は櫻の花期を延長せしむるが故に、年によりて花の盛の例外に長く持續することあるも恠むに足らず。然らば則ち前述の櫻町中納言の花の壽命の延長の如きは、又偶然氣候の寒冷となれる結果と解釋するを得べし。

櫻の花期の延長は、彼の鉢植又は生花となせるものにては容易に行ふを得。是れ一旦開花したるものを冷處に移すのみにて足ればなり。又南方の暖地に於て早く開花せるものを速に北方の寒地に齎すときの如きも同樣の結果となる。何れにもせよ、大なる冷室の設備によりて、常態よりも頗る永く櫻花の美觀を賞し得べきのみならず、又該法によれば花の觀察・檢定・描寫等を施すに最も便利なるべし。

文　獻

1) **Pfeffer, W.**, Physiologische Untersuchungen: Untersuchungen über Oeffnen und Schliessen der Blüthen. 1873.
2) **Kubart, B.**, Die organische Ablösung der Korolla nebst Bemerkungen über die Mohl'sche Trennungsschichte. Sitzungsb. d. K. K. Akad. d. Wiss. Wien. Math.-Naturw. Kl. CXV. 1, 1906. p. 1491.
3) **三好學** 增訂改版最新植物學講義中卷（大正九年）五七頁。
曉鐘成 芳山花栞、嘉永二年。
4) 源平盛衰記。
5) **三好學** 增訂改版最新植物學講義中卷（大正九年）三六九頁。

（大正十一年二月十九日稿）
（晃教授在職二十五年紀念文集別刷）

櫻の樹齡

櫻は短命であるやうに言はれるがそれは間違で、日本在來の山櫻・彼岸櫻・枝垂櫻の如きは何れも長命である。山櫻の大木として知れて居る靜岡縣狩宿の下馬櫻は賴朝の卷狩時代の遺木として傳へられて居る。固より正確な樹齡は判らないが、其の巨大なる樹容から見ても、古き時代の遺木であることは疑ひない。又日本最大の櫻樹として知られて居る山梨縣山高の神代櫻は幹の目通りの周圍が三丈五尺あつて、其の樹齡も非常に古いものと思はれる、又福島縣三春の瀧櫻は三春城主が正保二年（本年より二百八十七年前）に三春の城に移つた當時に於て、既に大樹であつたやうに傳へられてゐる。此櫻は地上五尺の幹の周圍約三丈で、枝垂櫻としての最大樹である。此の櫻の樹齡も恐らく前に擧げた彼岸櫻や山櫻に匹敵するものであらう。

櫻の中で早く枯れると云ふのは現時普通の染井吉野である。此櫻は明治維新後から次第に植ゑられて來て、今日では全國的に普通になつた。木の成長が早く又容易に繁殖するから、苗木として供給するには最も適して居る。併し此櫻は市街地では四五十年もたてば木が傷み多くは枯れる。其外の櫻でも保護が行屆いて居ないと、何の種類に限らず、損害を蒙り、病的になる。これは一は木を傷害するにより、又木の病害の治療を怠るからである。

櫻の中で比較的抵抗力の强いものは割合に永く生存するが、抵抗力の弱いものは早く木が傷む、染井吉野の如きは卽ち後者に屬する櫻である。何れにしても櫻の愛護が充分に行屆かない限り櫻を健全に發育せしむることは出來ない。先年我國の櫻を見に來た英國のイングラム氏の言はれたやうに、日本の櫻は殆んど皆病的であるか、又は不具になつて居るやうに見えるのは畢竟吾々が櫻に對する愛護が缺けて居るからである、國華として貴い櫻に對しては十分の理解を以て健全なる發生を遂げさせるやうに努めなければならぬ。彼の櫻の發生に不適當な場所へ無理に櫻を植ゑ付けては到底十分の生長は望み得られない、其上に濫りに枝を折り、木を傷けては如何なる櫻でも滿足に發生することは出來ない。

櫻の壽命が短いと云ふのは、一は種類的特徵にも依るが、その主なる原因は全く櫻を虐待するか

らである。櫻は決して壽命の短いものばかりではない。（櫻第一二號昭和五年）

櫻の健樹と病樹

一昨年の春英國のコリングウット、イングラム氏が日本の櫻を視察の爲に來遊して、關西地方から關東處々の櫻の名所を巡覽した。同氏の感想を聞くと日本の櫻は健全なる發達を遂げたものが殆どなく、殊に櫻の名所として著しい吉野其他では櫻の幹や枝が甚だ損傷して一見病的であると話されたが、實際その通りで、イングラム氏の觀察に間違がない。

イングラム氏は櫻の科學的研究家ではないが、櫻に對して大なる趣味を以て栽培に努められてゐるから、その觀察は當を得て居る。同氏の培養された里櫻の寫眞を見ると、樹形が如何にも立派で、枝が完全に發達して、その先が地に垂れてゐる。これを我邦の櫻が濫りに枝を伐られたり、折られたり、又は蟲害・菌害・烟害等によつて損傷を蒙むつた病的不具の樹形に比べると雲泥の差がある。

日本の櫻が何故かやうに損傷を蒙り病的になるかと云ふと、我邦では獨櫻のみならず一般樹木に對する愛護の觀念に乏しいことによる。之に關する例は極めて多いが茲には述べる必要はない。

今日の日本の櫻は外圍の影響によつて病的のものが多いが、自分の見たものでは、今から二十餘年前の東京小石川植物園の染井吉野の列樹又明治三十餘年の荒川（江北）の櫻の如きは木振りが實に立派で、枝が四方に擴がり、枝先が地に垂れたものさへあつた。

然るに是等の櫻がその成長を遂げるに隨つて概ね人爲の影響によつて甚しく損傷を蒙むり、今日では全く病的不具の形態となつた。是れ獨前記の櫻のみに限らない、日本の櫻は一般にかやうな有樣である。

今日では櫻の完全に發達した樹形は少くとも都會附近の公園庭園又は雜閙する櫻の名所などでは到底見ることが出來ない。唯山中人爲の影響の殆ど及ばない處では山櫻其他の櫻の大樹の健全なる發育を遂げて天來の樹形を呈するのが見える。

吾人の希望する所は若し適當なる地域に完全なる櫻園を作ることが出來るならば、啻に櫻の名種を蒐集するのみならず、櫻の一々の種類や品種をして完全に發達せしめ、その本來の樹形を現はすやうにしたいものである。（櫻第一〇號昭和三年）

冬咲の櫻

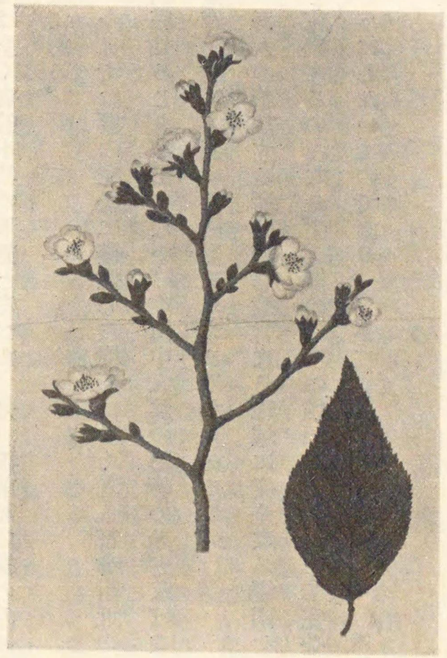
櫻は春の花として知られてゐるが、多くの櫻の中には秋咲くものもあり、冬咲くものもあり、又

四季折々に咲くものもある。

此中、秋に見る返り咲を除いて他は皆それ〴〵の種類又は變種である。

冬咲の櫻の外に晩秋花の咲く櫻には**十月櫻**〔*Prunus subhirtella* Hook. f. *autumnalis* (Max.) Miyos.「櫻花圖譜」一の六並に Miyoshi in Botan. Magaz. Tokyo. XXXIV. 1920. p. 167.〕がある。舊暦の十月頃に開花するから此名が附いた。

此櫻は曙彼岸（小彼岸）の變形で、一重の花の咲くものと八重の花の咲くものとがある。花の色も淡紅・濃紅又は殆ど白いものなどがある。



（生寫氏馬久猪野西）櫻冬の驛飛
Prunus parvifolia (Koehne) Matsum.

冬咲の櫻には冬櫻・十六日櫻・薄紅寒櫻・薄寒櫻・緋寒櫻・白子不斷櫻・四季櫻などがある。

冬櫻〔*Prunus parvifolia* (Matsum.) Koehne in Sargent, Plantae Wilsonianae II. 1912. p. 251; Miyoshi, in Botan. Magaz. XLII. 1928. p. 551.〕

小喬木、葉は小さく、表面に微毛があり、葉緣に不分明重鋸齒がある。葉柄にも柔き微毛がある。花序は二花又は三花が着き、花は白仙米又は淡紅色、花徑二仙米、花梗無毛、十月落葉後に開花して十二月雪の降るまで順次蕾が開く。四月にも多少咲くものがある。

冬櫻は舊時飛驒萩原の櫻洞にあつたが、今日では同所にはなく、唯附近に栽培されてゐる。花戸にも往々此櫻が見られる。

醒ケ井の不斷櫻も冬櫻である。

十六日櫻（いざよひ）〔*Prunus mutabilis* Miyos. f. *hiemalis*. Miyos. in Botan. Magaz. XXXVI. 1922. p. 10.〕

小喬木、茶芽、花時には葉が出ない。花序は二花又は三花を着く。花は白色、花徑約三仙米。伊豫山越の龍隱寺にある古來有名の櫻である。舊暦正月十六日には開花するから右の名が附いた。普通二月下旬に咲く。

薄紅寒櫻〔*Prunus mutabilis* Miyos. f. *hiemalis*. Miyos. subf. *rosea* Miyos. in Botan. Magaz. XXXVI. 1922. p. 11.〕

花時には葉が出ない。花は淡紅色、花徑約二・五仙米。

伊豫松山その外に栽培されてゐる。二月下旬に開花する。

薄寒櫻〔*Prunus mutabilis* Miyos. f. *praecox* (Max.) Miyos. in Botan. Magaz. XXXVI. 1022. p. 11.〕

綠茶芽、花時には葉少し出る。花序は二又は三花、花は淡紅色、花徑約二・五仙米。可なり喬木になり、花序が密着して著しい。東京では二月中旬頃開花する。

白子不斷櫻（花の期冬）（西野猪久馬氏寫生）
Prunus serrulala Lindl. f. *semperflorens* Miyos.

緋寒櫻〔*Prunus campanulata* Maxim. in Bull. d. l' Acad. Imp. d. Sci. d. St. Petersb. t. 29. p. 103.「櫻花圖譜」一の七〕。

綠芽、花時には殆ど葉が出ない。花は深紅色、鐘狀、花徑約一五仙米、果實は圓錐形。

臺灣阿里山其他に產する。昔時琉球及奄美大島・鹿兒島等に移植された。舊正月元日頃開花するから元日櫻と呼ばれ、又薩摩の緋櫻とも云はれた。東京では普通三月下旬頃に花が咲く。

白子不斷櫻〔*Prunus serrulata* Lindl. f. *semperviren*s Miyos. in Botan. Magaz. XXXVI. 1922. p. 12.〕

伊勢白子の子安觀音の靈樹として昔から名高かつたもので、現時も生存する。盛夏の候を除き年中絕えず花が咲くから不斷櫻の名が附いた。葉も亦順次新らしいのが出て、雪中にも綠葉がある。

花序は冬の花では極めて短く、晩春の花では頗る長い。花は白く、花徑は約三乃至三・五仙米。

四季櫻〔*Prunus subhirtella* Hook. f. *semperflorens* Miyos. in Botan Magaz. XLII. 1928. p. 550〕

小喬木、淡綠芽、葉は小さく、粗重鋸齒、花序は二花又は三花、花は白又は淡紅色、花徑約二・五仙米、雌蕋無毛。

四季開花するとして名を得たが、盛夏には咲かない。春は花が多く着き、秋にも咲き、寒中にも咲く。

三春の四季櫻（鹽見競氏寫生）
Prunus subhirtella J.D. Hook. f. *semperflorens* Miyos.

此外に八重の四季櫻もある。何れも栽培種である。（櫻第一四號昭和七年）

美しい枝垂櫻

三春瀧櫻のやうな紅枝垂の大木が花の滿開の時に絶大なる美觀を呈することは言ふまでもないが、茲に美しい枝垂櫻として擧げるのは遠藤櫻と菊枝垂とである。

（生寫氏馬久猪野西）（垂枝紅重八）櫻藤遠の臺仙

Prunus aequinoctialis Miyos. var. *pendula* (Max.) Miyos. f. *plena rosea* Miyos.

遠藤櫻〔*Prunus aequinoctialis* Miyos. var. *pendula* (Max.) Miyos. f. *plena rosea*. Miyos. Unters. ü. japan. Kirschen in Botan. Magaz. Tokyo. XXXIV. 1920. p. 165.〕は八重枝垂で、仙臺に普通である。

明治年間仙臺市長であつた遠藤庸治氏が植ゑられた爲遠藤櫻の名が附いたと言はれてゐる。小喬木で、花は眞紅の八重である。滿開の時は遠望恰も造花のやうで極めて美麗である。仙臺市中には此櫻が多く植ゑられた所がある。他の地方には稀であるが、京都では大極殿の前に此櫻の移植されたのを先年見た。

（生寫氏馬久猪野西）垂枝菊

Prunus serrulata Lindl. f. *plena pendula* Miyos.

菊枝垂（*Prunus serrulata* Lindl. var. *plena pendula* Miyos. Unters. ü. japan. Kirschen. Botan. Magaz. Tokyo. XXXVI. p. 8. 1922）は小喬木で、若葉は綠色、花は菊咲、咲初は可なり濃紅であるが、後には一樣淡紅になる。總長約五仙米、花徑約三仙米、花瓣の數約五〇、外部の花瓣は長約一五密米、幅約八密米、雄蕋少數、雌蕋一。此櫻は東北地方の庭園には往々見られる。里咲の枝垂としては唯一の珍しい品種である。（櫻第一六號昭和九年）

匂櫻に就て

櫻の會で毎年話をしてをりますが、今日は匂櫻に就いてお話したいと思ふ。

昔から櫻には匂ひがないと云ふが、其實櫻には匂ひがある。昔の和歌をしらべて見ると、多くの歌に櫻の匂が詠まれて居る。櫻の匂ひは歌人の理想から來てをり又花の色を匂ひとして詠んでゐるものがある。卽ち朝日に匂ふ山櫻花といふのがそれである。併し櫻それ自體が發散する眞の香ひをよんだ歌は少いやうである。これに就いて私は御歌所寄人の中村秋香翁にたゞした所、實際櫻の眞の香ひをよんだと思はれる古歌を書いて送られた。

櫻に匂ひのあることは櫻の會の雜誌に英文で記載したものがある。又山櫻と里櫻に匂ひのあることは、私の著述にも載せ、又東京市公園課で發行された「小金井の櫻」にも述べた。

山櫻の名所は小金井・吉野・櫻川であるが、こゝで匂櫻に出會したことが少くない。この匂は風がないとわからない。昔の人の書いたものに風前香遠とあるのは卽ちこれを言つたものである。實際その通りで曩に小金井に行つた時も、可なり遠方から櫻の匂ひが感じられた。そこでこの匂櫻を搜したところ下北一四〇の山櫻、下南四一黃芽の櫻などが匂櫻であつた。猶小金井の櫻では口紅匂・

東天匂（吹寄變種）・多摩川匂（茶芽）・曙匂・武藏野匂等などがあつた。

吉野山には吉野匂、櫻川には櫻川匂・磯邊匂などがある。荒川堤にも山櫻で匂櫻がある。卽ち江北匂・荒川匂等がそれである。

培養された匂櫻の著しいもの丶一つは、細川匂（大島櫻の品種）で、花は純白で若葉が青い。大島櫻は熱海では所々に植ゑられてゐる。其外里櫻の中には駿河臺匂（昔駿河臺にあり）・瀧匂（黃芽、枝は横にひろがり、無數の花をつける）などがある。

瀧匂は本鄕帝國大學法文科の前にあつたが、大正十二年の震災で枯れてしまつた。荒川堤の匂櫻としては上匂・御座の間匂・千里香・萬里香等がそれで、何れも匂櫻の名花である。其の外滿月・天の川（枝が上方に立つ）なども花が匂ふ。

もう一つ里櫻に屬する匂櫻には佐渡の御所櫻がある。これは　順德天皇御手植の傳說のある櫻で、小木の海潮寺の本堂の前に立つてゐる。京都では御苑の櫻の中にも匂櫻が色々あつたのを拜觀した。其の他匂櫻の中には千島にある千島櫻で、これは灌木である。染井吉野は匂ひがないが、どうかすると、花の咲き立てに多少香氣を發するものがある。

紅山櫻は東北地方にあつて、この櫻の中にも香氣のあるものがあつたと阿部儀作氏からの報告に接した。卽ち越後大峯山上にあるものはそれである。

櫻の匂は櫻餅の香りと同じく、クマリンである。このクリンの外にフリージャに似た香ひがあるといふ。この香によつて蟲を誘ひ花粉の媒介をする。このクマリンの發散は若木の花に多い。晴れた日の朝花の咲立てに、花の下を散歩すると、良い匂がして蟲が來て居る。先年見た所では荒川の里櫻の匂ふものには揚羽蝶が來て集つてゐた。私は嘗て櫻の花に蝶の來てゐる繪をかゝせたところ、或る人からこの繪は不審であるといはれたが、これはまだ實際を見たことがないからである。

櫻の匂は先天的であるが、又培養によつて匂を出すことが出來る。これは實生に限られてゐて、先年匂のない小鹽山の實生に突然良い匂のあるものを發見した。すべて櫻は培養によつて香が出てくるもので、畢竟品質が向上するからである。それゆゑ山櫻でも里櫻でも、全然香のない花の自花受粉によつて、出來た第二世から良い香ひのある子櫻が生れることがある。卽ち人間が敎育されゝば品性が發達すると同じことで、櫻も香のないものから、匂櫻が出來るのは恠しむに足らない。

昔からの古木は接木によつて培養して行かなければならぬ。その結果、花が一層立派になり、又匂ひが生じる。此の如く品質が優良になれば、從來の國華としての價値は一段と增して來る。斯樣にして國華の向上を圖るのは櫻の會として努むべきことゝ思ふ。（櫻第一六號昭和九年）

櫻に現はれたる畸態

一般植物に畸態が現はれる如く、櫻にも亦種々の畸態が現れる。是等の畸態は學理上の證明資料として興味があるは勿論、又園藝觀賞の點から變り物として珍重される。

（一）莖・枝に現れるもの

枝垂　彼岸櫻の枝が細長くなり垂れて所謂枝垂櫻になる。又里櫻にも稀に枝が斜に下向するものがある。菊枝垂は卽ち其著例で、往々庭園に栽培される。

枝垂櫻は大木になり、細長い枝が高い梢から一齊に垂れて、風のまに〳〵動く有樣は誠に優美である。東北地方殊に福島縣下には紅枝垂の極めて美しい大木がある。同縣田村郡中郷村の三春瀧櫻（大正十一年十月天然紀念物として指定された）は其代表的で、目通幹圍九・四米、枝垂櫻の最大樹である。又京都府北桑田郡山國村常照寺の九重櫻も美しい紅枝垂である。

枝垂櫻で花の色の一層濃紅なのは仙臺に多い遠藤櫻で、樹は餘り大きくはならぬが、花の咲き揃つたときは如何にも立派である。

直立　主幹は勿論枝がすべて直立的姿勢を取るもので、里櫻の中の**天の川**は其實例である。此櫻

は枝が悉く直立するのみならず、花梗も上方に向ひ、又雄蕋・雌蕋も上に向つてゐる。箒櫻・泰山府君などの箒櫻性の櫻も亦細い枝が多少上方に向つて、箒を倒にしたやうに見える。

芽變り　白山櫻の大木の中には枝によつて若葉の色の變異の現れたものがある。例へば小金井の櫻並木の中で赤芽の山櫻に往々茶芽の枝の出たものを見る。斯様な芽色の變異は山中の白山櫻にも現れることがある。

（二）花に現れるもの

二段咲　岐阜縣揖斐郡川合村の揖斐二度櫻（大正十二年三月指定）に見るやうに、八重の花の中心から更に一の花が出て二段咲になつたものがある。二段咲は他の植物にも時々見る所で必ずしも珍奇でないが、右の二度櫻では此二段咲の花の外に、一重の花と普通の八重咲の花とが同じ樹に生ずることで珍らしい。

菊咲　菊咲の櫻はすべて花瓣が非常に多くなり、外觀が恰も菊の花のやうに見える。菊櫻・小菊櫻・白菊櫻・鵯櫻・名島櫻などの外兼六園菊櫻（金澤市、昭和三年十一月指定）・梅護寺珠數掛櫻（新潟縣北蒲原郡京ヶ瀬村、昭和二年四月指定）の類も是れである。普通の里櫻よりも花期が遲い。

一重八重　一重と八重の花とが混じて咲く櫻で、里櫻の中では車返が著例である。此櫻は昔から京都に多く、五瓣の花と七八瓣の花とが混り、又旗瓣もある。淡紅、抱咲大輪の上品な櫻である。

綠化　花瓣に綠色の部分が現れたもので、里櫻の一なる御衣黃（ごいくわう）に見られる。綠化と共に花瓣の組織も多少硬化してゐることが判る。

雌蕋葉化　普賢象・一葉などの里櫻に見る如く、雌蕋が葉化したものである。（櫻第一五號昭和八年）

櫻の向上性の實例

山櫻や里櫻に著しい向上性のあることに關しては、曩に培養試驗を施した結果によつて證明されたが、又是等の櫻の古來生成した夥しい品種に徵しても疑ない。

玆に又他種の櫻例へば彼岸櫻・富士櫻・丁子櫻などの野生地に於て調べて見ると、同樣に向上性が認められる。殊に富士櫻の如きは花部の變異が著しく、一重・小輪のものゝ外に中輪・大輪のものがあり、又花瓣の數も六七枚以上になり、八重となつたものさへある。

富士櫻の野生種の花色は白又は瓣端の微紅のものが普通であるが、花性の向上したものには紅色の稍〻强いもの又は純白のものがある。

若葉の色も褐色を帶びたものから又褐色の著しくなつたものもあり、又他に純綠色もある。

斯樣な變異は此櫻の多く生えてゐる樹林や群落に於て現はれ、其中明に花性の向上を認めること

が出來る。上記の富士櫻其他の野生の櫻に現はれる變異は著しいもので、其特徴の固定してゐるものは、一々之を變種又は品種として區別することが出來るが、それよりも更に重要なことは是等の櫻に變異による先天的向上性の存在を認識することである。

此向上性は前述の如く培養試驗によつて證明せられ、又實地の觀察によつても認められるが、學術上興味のあるのは多數野生してゐる櫻の個體に就て調べることである。

四季櫻・冬櫻などの培養された櫻の中にも其多數の個體中には樣々の變異が現れ、其中、明に向上性の認められるものがある。

尤も數百の櫻の種類が一樣に向上性を有するとは限らない。往々該性の不分明なものもあるが、併し是れは獨り櫻のみでなく、他の花木の場合でも同樣である。唯櫻では特は該性が著しいことは疑ない。

櫻の向上性の發現を巧に誘導することによつて、美しい變種又は品種を多く生ぜしめることが出來る。此點は園藝上大切で、之に關しては十分の研究が必要である。

櫻の向上性に就ては自著「最新植物學」下卷第四八八頁（昭和六年）、並に自著論文「培養せる櫻に於ける花性の向上の著例」（「植物學雜誌」第四一卷、第一二三頁、昭和二年）を參照されたい。

（櫻第一七號昭和十一年）

櫻の讃美

花の下ふし

太田垣蓮月の

やとかさぬ人のつらさをなさけにて
おぼろ月夜の花の下ふし

は櫻に對する情緒をよく表はしてゐるが

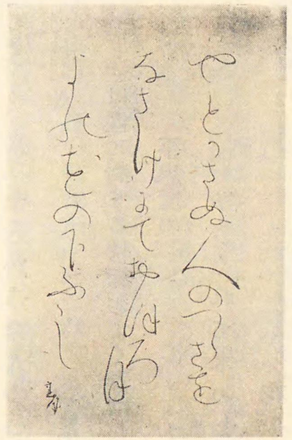
平忠度の

ゆきくれて木のしたかけを宿とせは
花やこよひのあるしならまし

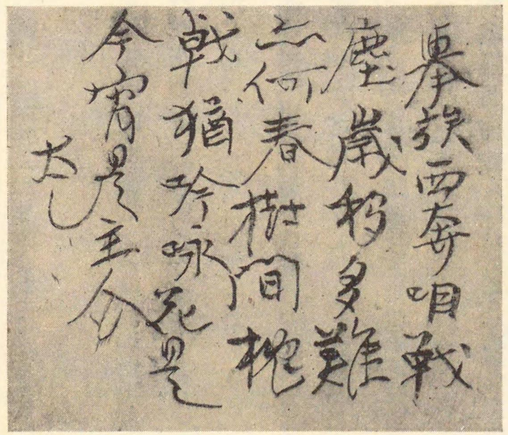
は一入ゆかしく思はれる。この武將歌人を村瀨太乙が

擧族西奔咽戰塵　歲移多難是何春
樹間枕戈猶吟詠　花是今霄是主人

と詠じたのは興が深い。



蓮月筆櫻の和歌

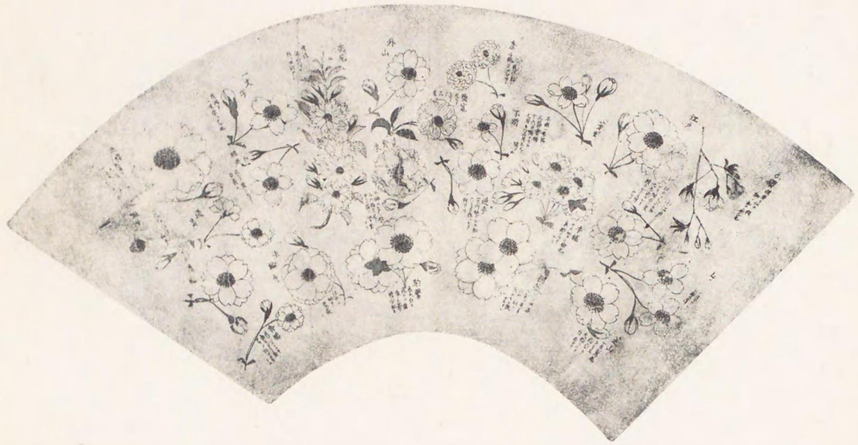


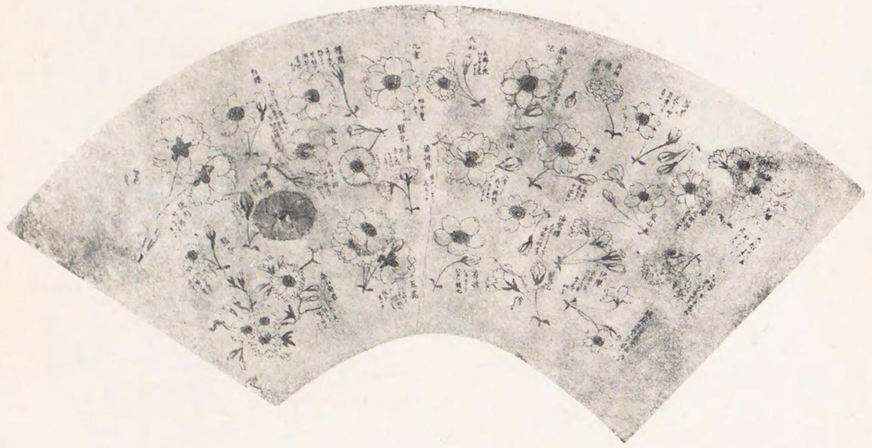
村瀬太乙筆詠平忠度詩

又河野鐵兜の

山禽叫斷夜寥々　無限春風恨未消
露臥延元陵下月　滿身花影夢南朝

は花の下ふしに無限の感慨を表現したものである。（櫻第一〇號昭和三年）





櫻品圖扇

松岡恕庵の櫻品の圖を二枚の扇面に淡彩にて表はせるもの

櫻品圖扇

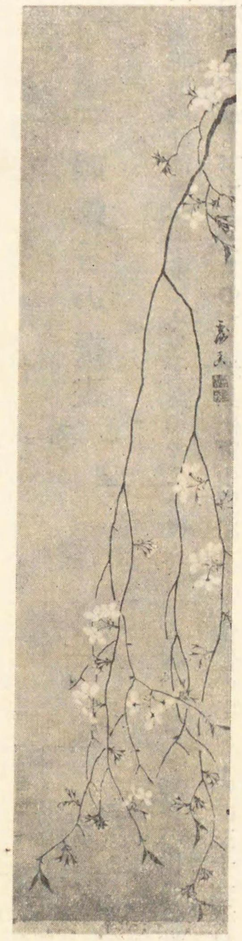
松岡恕庵の原著「櫻品」を俳人鈍永が通俗的に作つて寶暦年間に出版してから、櫻の品種殊に名櫻を知るに最も便利なる良書として世に歡迎された。

さればこの書は唯本草園藝の方面ばかりでなく、歌人・狂歌師・俳人によつても讀まれ、又浮世畫師（玉蘭齋貞秀の如き）もこれを利用した。それが爲め櫻の品種の名が自ら世に廣まることになつた。こゝに表はした「櫻品圖扇」（淡彩圖、「櫻品」から轉載したもの）の如きも櫻品の通俗化した一例である。（「增補櫻に關する圖書解題略」追加第二の三三三）（櫻第一〇號昭和三年）

三熊露香の櫻畫

三熊花顛の妹露香が櫻畫に巧みであつたことは人の知る所である。露香の作品は世に傳はつて居るが、その最も努力したもので、櫻品研究の資料として價値のあるものは三十六櫻品の寫生である。これは兄の花顛が各地の櫻を調べて作つたもので、花顛の櫻花帖の三十六櫻品とは種類が全く同じ

とは云へないが、大體はこれに倣つて寫生したものである。

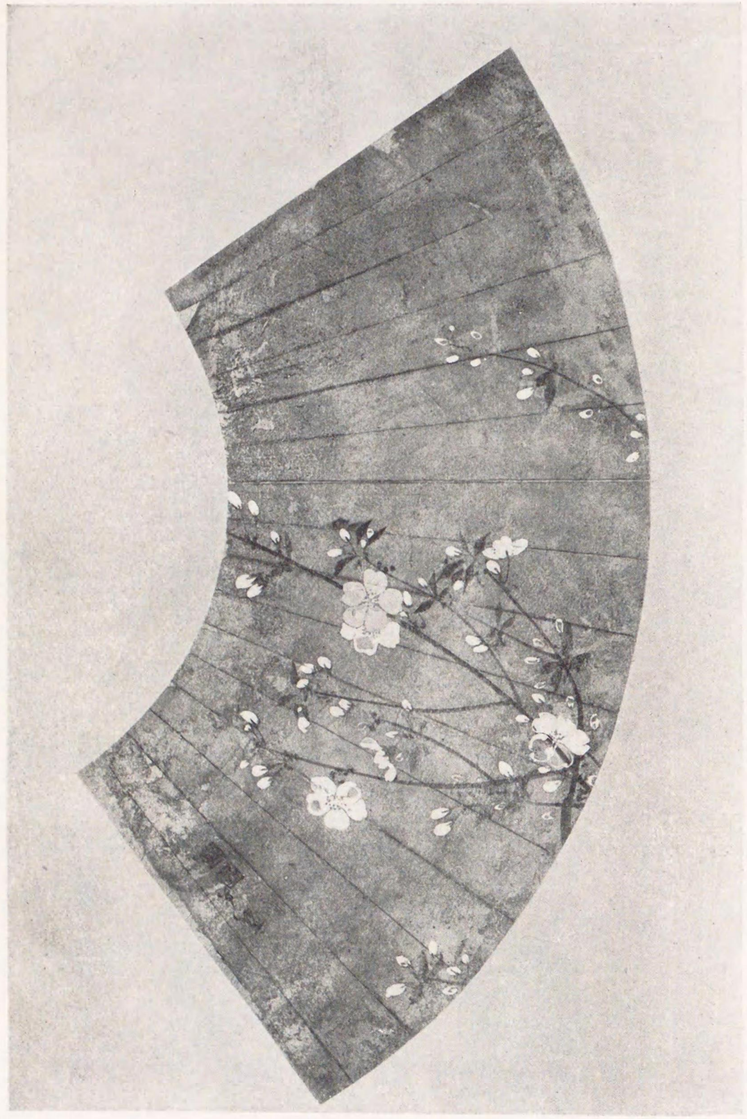


三熊露香筆枝垂櫻の圖

露香の三十六櫻品とし自分の見たものゝ中には醍醐寺に倭花名品がある。これは一々の櫻の花の特徴を天然に表はすやうに描いたものである。

三熊露香筆櫻の圖と伴蒿蹊の和歌讃

尙これに似た花譜は吉野山の喜藏院にある。この三十六櫻品は寛政八年の作で、文化元年の伴



扇畫の櫻　垂枝　筆香露熊三

三熊花顚筆山櫻の圖

蒿蹊の序がある。此兩種の櫻譜に就ては「櫻」第八號（大正十五年）の三熊花顛の櫻花帖に就ての文中に述べて置いた。

花顛の畫風は熊斐の法に依つて南蘋の寫生法を傳へたものであらう。露香の描方も亦花顛の法に從つて優雅な趣がある。花顛の門人廣瀨花隱も多く櫻を描寫し、又露香の門人織田瑟々も亦櫻畫を作つたが、この人々の畫は花顛露香の筆意とは遠くなつた。（櫻第一二號昭和五年）

三熊花顛の櫻畫

三熊花顛は畫家として櫻畫に巧であつたのみでなく、又熱心な櫻の愛護家で、櫻の名所や櫻の名木の保護に努めたことで知られてゐる。

殊に名櫻に就ては京都をはじめ近畿地方は勿論、遠方までも旅行して、櫻の名木の所在を探り、一々之を寫生して其特徴を表した。

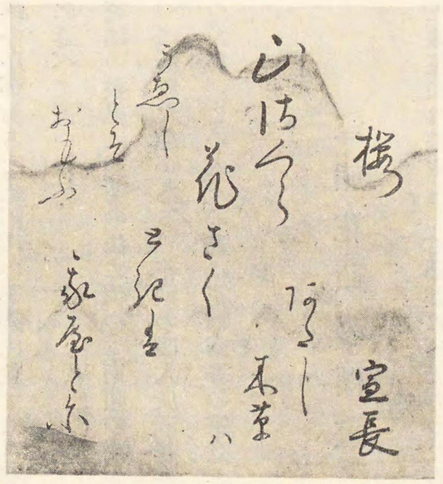
それで花顛の櫻畫には能く櫻の種類や品種の特性が現れてゐて、直に其甄別が出來る。併し花顛の描法は決して單純の寫生ではない。同時に畫面を美術化して、それ〴〵の櫻の美性が想像されるやうになつてゐる。

花顛は山櫻も里櫻も多く描いたが、山櫻では能く其木振枝振並に若葉の出方其色、又花の着方に注意して、此櫻の淡白で優美な氣韻の表現に努めた。

里櫻の描法は前者に反して艶麗な花性の描寫を主としたが、併し色彩の濃艶に過ぎて畫面の俗化するやうなことはない。

花顛の櫻畫は「櫻花帖」（「櫻」第八號參照）に載せたものを首め、幅物其他となつて今日に傳はつてゐる。是等の作品に就て見るに花顛の櫻の描法は櫻品の異なる毎に自ら變化してゐる。此點に於ても亦尋常の櫻畫の遠く及ばない所である。

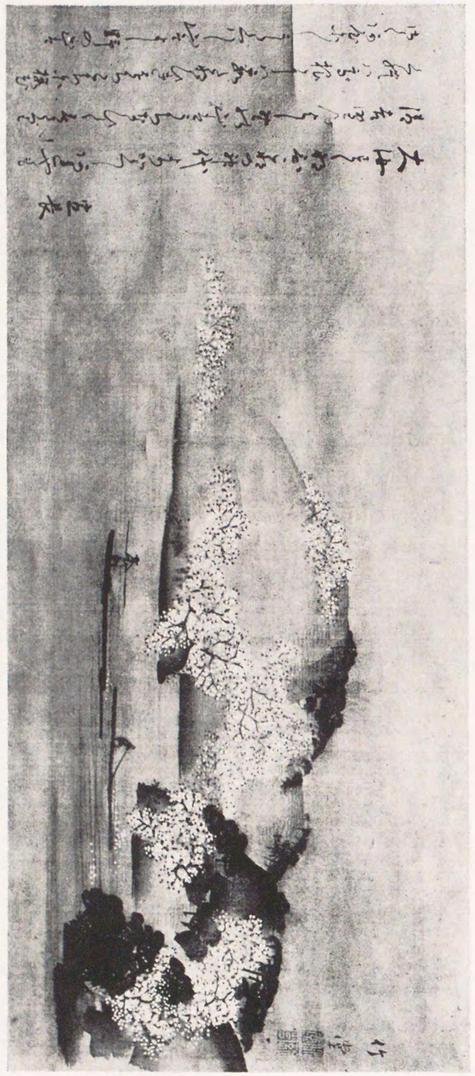
（櫻第一三號昭和六年）



本居宣長筆櫻の和歌

本居宣長翁と櫻の讃美

本居翁が櫻の美性を讃美されたことは翁の詠まれた數多の櫻の和歌で分る。殊に「まくらの山」（櫻三百首）には櫻に對する限りなき感想が表はれてゐる。此櫻の歌集は翁が寛政十二年に詠まれた



讃歌和長宣居本と櫻の山野吉筆堂竹岸

ものを載せたのであるが、彼の有名な

しきしまのやまとこころをひととはは
あさひにほふやまさくらはな

の和歌は此中には見えない。

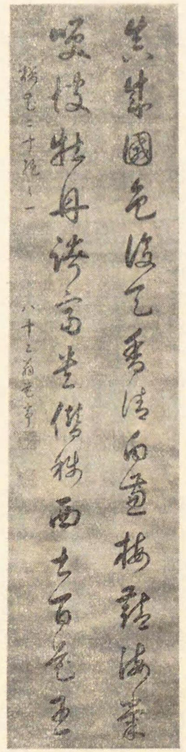
本居翁の和歌は何れも山櫻の高潔優美な點を詠まれたもので、國華の精粹は翁によつて遺憾なく表現されてゐる。（櫻第一三號昭和六年）

岡本花亭とその櫻詩

岡本花亭は忠次郎と稱し、花亭はその號、又醒翁・詩癡等とも號した。徳川幕府の能吏として聞え、勘定奉行となり、近江守に任じた。嘉永三年八十三歳で歿した。

花亭は詩を好み櫻を愛する所から櫻詩二十首を作つた（「增補櫻に關する圖書解題略」追加一の二九六並に追加一二の七〇〇參照）。此二十首の櫻詩は理想的に櫻の美性を稱揚するのでなく、櫻が國華として大切な花であること、櫻の百花に勝れてゐること、櫻の花期を待ちわびること、櫻の開花の風情、朝日の櫻の美觀、終日花見の娯樂、綺羅の花見と幽人の花見、山中閑處の賞花、麓から峰へと櫻の咲上る

こと、吉野山中に庵を結で櫻を賞せんとする希望、櫻花の散り易きを憾むこと、長命して花見を冀ふことなど、櫻の美性と之に對する愛着を眞摯に發露したものである。



岡本花亭筆
櫻詩二十首の一

櫻詩二十首は次の如くである。

天生名種貴無加　說向殊邦最可誇
爲是東方春色在　不題櫻字直稱花
眞成國色復天香　清白兼梅艶海棠
笑彼牡丹誇富貴　僭稱西土百花王
一歲何時最可人　可人最是此芳辰
日彌九十月三月　除看櫻花難算春
吹面纔柔二月風　偷傳芳意點紫紅
盛開計日清明近　先着催花冉々中
東風如絮入衣輕　香白淡紅初放櫻
先得一番如花信　南樓昨夜歸雁聲

花枝韶風一夜催　鶯呼春風片時回
香芭始柝東方白　先自枝頭送色來
紅暾朗々映梢時　露浥濃香見麗姿
認取一春花好處　今朝正是半開枝
忙趁芳期賞滿開　遊娛日夜被花催
西邊看送斜陽去　又自東頭掛月來
晴日綺羅紛管絃　園花綵幕坐花氈
幽人杖屐微々雨　訪遍山祠野寺邊
錦障逶迤被彩霞　石家春色壓王家
何如山靜水清處　住着茅莽間看花

遠看素淡近看濃　帶靄拖雲又間松
一見先從山麓綻　番々開上幾層峰
桃源不復慕神仙　櫻有千株屋數椽
最是宜花清曠地　山如太古日如年
願買芳山結小扉　乞留春色鎮無歸
無風無雨和恬日　不遣斯花一片飛
愛着櫻花奈爾何　才逢芳候忽還過
三春可恨開時少　一賞難酬待日多
點々紛々落下英　依々脈々對看情
縱無風雨多相妬　可奈天敎花性輕

道說櫻花々性輕　却於輕處見爲櫻
佳朋有約明朝至　懊惱春月一夜情
草木花萎粘着枝　誇研顏色變爲媛
唯櫻快意全飛盡　一段春香一段姿
詠櫻風趣竟如何　枉作三十一字歌
有此花來春幾世　等閑認雪認雲多
自謂老齡難恃身　又加一歲値玆辰
人生可保是年命　多看好花贏得春
一場春夢散行雲　癡想猶疑枕席薰
相約明年二三月　老郎不死又逢君

（櫻第一六號昭和九年）

櫻の思ひ出

櫻に關して戸川殘花翁を想ふ

櫻の會の創設以來盡力されたる戸川殘花翁が昨年十二月八日大阪にて歿せられたるは悼惜に堪へず。予が戸川翁を識りたるは明治四十四年一月二十九日南葵文庫に於て講演を爲せる時なり。爾後予は天然紀念物の保存其他に就て屢〻翁に接せるが、茲には唯櫻に關して想ひ起せる事を記すべし。

櫻川の觀花　第一回　明治四十四年四月十日

此行が予にとりて最も愉快なりしは今も忘れず。予は翁の誘引によつて始めて我邦古來の名所たる櫻川の櫻が今日に遺れるを見たるのみならず、多數の珍しき品種の存在するを知れり。現に同所の馬場に殆ど朽株となつて殘れる櫻川匂の如き、此日予の檢出せるものにして、優れたる匂櫻なりしが、其後枯損せるは惜むべし。

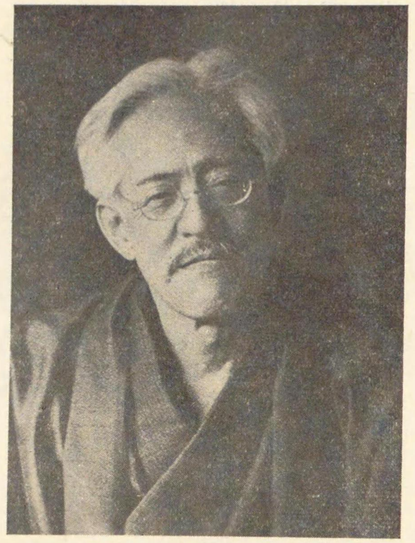
當日石倉重繼（翠葉）氏は特に案内の勞を執られたり。櫻川の櫻が近年再び世に知らるゝに至れるは石倉氏の同地の名勝顯揚の爲に盡されたる結果に外ならず。

予等は櫻川に於て飽まで花を賞したる後程遠からぬ雨引山に立寄り更に觀花を爲して歸京せり。

櫻川の觀花　第二回　明治四十四年四月十八日

徳川賴倫侯・戸川翁其他の人々と同行せり。此日徳川侯の撮られたる觀花の寫眞あり。

櫻川の觀花　第三回　大正二年四月十五日



戸川殘花翁

徳川達孝伯・戸川翁・國府犀東・石倉翠葉其他の諸氏と同行せり。歸途雨引山へ上り滿開の山櫻を賞せり。此處の櫻も櫻川の山櫻の如く美しき品種多し。

右の外予は櫻川の櫻花研究の爲その頃屢〻同地へ赴けるが、戸川翁に關せざれば茲に略す。

吉野山の觀花　大正五年四月九日、十日

吉野の櫻花に關する講演會並に櫻花保存に就て視察の爲徳川賴倫侯は同地へ赴かれ、戸川翁・白井光太郎・國府犀東・足立栗園・平福百穗・渥塚麗水諸氏同行し、予も亦此行に加はれり。一目千本其他の櫻未だ開花せざりし。

小金井櫻樹の保護

玉川上水路沿岸小金井櫻樹が近年枯損せるもの多きにより、之が保護の必要を感じたれば、予は戸川翁と協議して數回に亙り東京市長へ願書、意見書等を提出せり。東京市長も予等の申請を容れ直に櫻樹の保護に着手して、上水道兩岸一里半に及べる櫻の全部に就て一々手當を施し補植を行へり。故に同所の櫻は頓に樹勢を回復し、花容舊時に勝るに至り、遂に大正十三年十二月九日史蹟名勝天然紀念物保存法によつて指定せられたり。

櫻の展覽講演會

明治四十五年四月五日

徳川賴倫侯が南葵文庫に於て催されたる最初の櫻の會にして、櫻に關する貴重なる參考品、里櫻其他の櫻の珍種の展覽、文學上・科學上より見たる櫻に就ての講演をなせり。此會の開催に關しては戸川翁の盡力甚大なり。

其他戸川翁は大正六年四月二十三日本會の設立されたる以來會務に盡力せられ、又予が櫻品研究に關して種々の方面に援助を與へられたるは感謝する所なり。

戸川翁は圓滿洒落汎く人に交れり。風流韻事に長じ、詩歌を嗜み、俳句を克くせり。嘗て田島の原へ櫻草の保存に關して予と共に赴けるとき、深井貞亮氏の需に應じて直ちに

これもまた大和心かさくら草

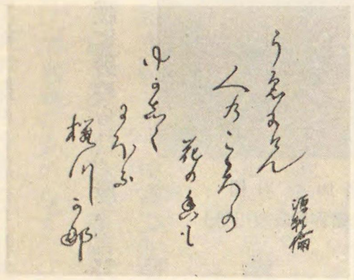
と詠めり。屬意輕妙といふべし。（櫻第七號大正十四年）

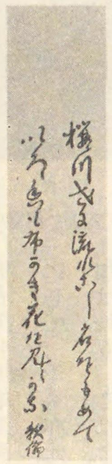
櫻に關して徳川賴倫侯を想ふ

昨年發行せる「櫻」第七號に於て櫻に關して戸川殘花翁を想へるが、本年亦茲に同樣に徳川賴倫侯

徳川賴倫侯

櫻に關して徳川賴倫侯を想ふ





徳川賴倫侯筆櫻花觀櫻草詠

を想ふことゝなれり。斯く本會の事業に對して直接間接に援助を與へられたる先覺者の續いて世を去れるは哀悼の至りなり。

故徳川侯爵は天然紀念物又は名勝としての櫻の愛護に努められ、屢〻吉野・櫻川、其他の櫻の名所を視察されたるが、殊に櫻川と雨引の櫻は委細觀賞せられたり。

川　櫻
（徳川頼倫侯寄贈の寫眞によるる）

櫻川の山の櫻の古樹
（徳川頼倫侯寄贈の寫眞によるる）

第一回の櫻川の櫻花は明治四十四年四月十八日にして、予も亦此一行に加はれり。これより前同年四月十日には予は石倉翠葉・戸川殘花兩氏と櫻川と雨引へ趣き、一通り花を調べたれば、侯爵視察の時には自ら案内説明役をなせり。

予の記憶する所にては其後大正元年十月八日故徳川侯爵は徳川達孝伯其他と櫻川へ趣かれ、又大正五年四月十日吉野山の櫻を視察されたり。兩回とも予は同行せり。

故侯爵は櫻の保存に就ては先づ櫻に關する講演會と展覽會を催す必要を認められ、戸川殘花翁並に予等に謀られたる上、明治四十五年四月五日南葵文庫に於て右の會を開かれたり。

當日は講演の外美麗なる荒川の名櫻を多數陳列し、又櫻に關する古今の參考品をも多く展覽に供したれば、國華愛護の思想普及上に少からざる效果を收めたることゝ信ず。

徳川頼倫侯より著者へ送られたる
和歌（櫻の圖は村田丹陵筆）

第二回の櫻花に關する講演會と展覽會は大正九年四月二十八日再び南葵文庫に開かれ、予は「昔の櫻と今の櫻」に就て講演をなし且家藏の櫻に關する圖書を陳列せり。

故侯爵の大磯の別邸には多數の里櫻を植ゑたり。是れ皆荒川堤の品種にして古來の名櫻に屬す。

予が頼倫侯に始めて謁せるは明治四十四年一月十九日にして、侯爵より南葵文庫に於て植物に關する講演を請はれたる時なり、其後天然紀念物保存に關し屢〻侯爵の談話を聽き、又は地方へ同行する機會を得たるが、其間櫻に就ても侯爵より話されたるもの少からず。

予は尚櫻の研究上侯爵の厚意により侯爵家に藏せらるゝ種々の圖書を閲覽するの便宜を得たるは

感謝する所なり。

予が十數年間故侯爵より受けたる手簡、寄贈されたる侯爵撮影の櫻其他の寫眞等の外に特に紀念とするものは、去る大正十三年四月十二日に送られたる侯爵自筆の繪端書にして、左の和歌を書せり。（前圖參照）

ひとは品花は櫻と時しりて
しりそくそよきちるそめてたき

大正癸亥　櫻月　　源　頼　倫

頼倫侯の人格の高きこと、學問を奬勵されたることに關しては世の洽く知る所なり。予は唯茲に櫻の研究と愛護とに就て故侯爵の功勞を思ひ、永遠に紀念せんことを望む。（櫻第八號大正十五年）

櫻に關して名和靖氏を想ふ

予が名和靖氏を知れるは今より四十餘年前大學學生時代にして、當時同氏は折々理科大學動物學教室を訪はれ、箕作佳吉教授の下に動物解剖の實驗を行なはれたるを記憶す。

名和氏が畢生を昆蟲の研究に委ね、殊に害蟲の驅除、益蟲の利用に關して努力されたること、並に名和昆蟲研究所を創設して公益の爲に盡されたることは世間悉知の事實なれば、茲に述ぶるを要せず。

名和氏は先年突然病に罹られたるまでは矍鑠壯者を凌ぎ、全國を旅行し害蟲の調査に從事し、寢食の暇なき程なりしが、同氏が櫻に關して特に趣味を生じ、その珍種の所在を探索し、これが保存を講ぜるは其の晩年に屬せり。

名和氏は大正十年頃屢〻予を東京に訪はれ、岐阜縣下其他の櫻の名種に關して語られ、且其保存を熱望されたり。揖斐二度櫻の如きは其一にして、此櫻は大正十年四月十八日並翌十一年十月二十八日の兩回に亙り、予は同氏の懇切なる案内によりて調査せり。二度櫻は山櫻性にして、一重咲・八重咲・二段咲と三樣の花を着くるによりて極めて珍奇なるものなり。次で十二年三月に至り右の櫻は天然紀念物として指定されたるが、是れ一に名和氏が夙に其珍種なるを認めて報知されたるによる。

名和氏は本會の事業を翼賛して、岐阜名櫻會を組織し、櫻の名種の保存を奬勵し、又屢〻櫻の會を開催して、櫻樹愛護の宣傳に努められたり。

名和氏の主唱又は奬勵によつて岐阜其他にて催されたる櫻の會にて予の知るものを擧ぐれば、大正十一年四月二十二日岐阜市主催の櫻の會、翌十二年四月十五日岐阜名櫻會主催の櫻の會、同年同

月十六日愛知縣犬山町に於て大野松吉氏主催の櫻の會なり。是等の會が櫻の名種を廣く公衆に紹介し、櫻の愛護すべき所以を知らしめ、又櫻に關する科學的・文學的趣味を惹起さしむるに力ありたるは言を俟たず。（「櫻」第六號、大正十二年參照）。

名和氏は熱心誠意の人にして、櫻の保存に關し將來同氏の盡力に待つもの少からざるに當り、不幸にして昨夏世を去られたるはいと惜むべし。（櫻第九號昭和二年）

武田信賢翁と櫻の文獻

予が武田信賢翁を知つたのは大正六年五月二十二日で、翁は屢〻拙宅又は小石川植物園に予を訪問され、毎時翁が趣味の深い珍籍の蒐集、墳墓の探索、又櫻に關する古書に就て話された。

翁は藏書家であるが、徒らに珍書を秘藏するのでなく、その内容を熟讀し又研究者にはこれを貸して參考に供せられた。予も亦翁から櫻に關する圖書を借りて讀んだことがある。

翁は櫻の會の趣意に賛成され、「櫻」にも寄稿された。晩年藏書の一部本草に關するもの百五十四部三百八冊を東京帝國大學に寄贈され、現に小石川植物園内の植物學教室圖書室に藏せられてゐる。この中には櫻の圖書も色々ある。又本草以外のものも大學へ寄贈されたが、これは圖書館の本館に納めてある。

翁はその蒐集された圖書の散逸をいたく憂慮されて、前記の如く生前その一部を大學その他へ寄贈されたから、これ等は最早安全に保存されてゐる。翁の圖書は頗る廣汎であつたが、本草物産をはじめ、名所圖會・隨筆・考證物・文學書又軟派の圖書にも亙つてゐた。

翁は醉霞と號し、名古屋の人で、明治の初年犬山の村瀨太乙先生に教を受けたことを話された。小石川植物園裏の白山御殿町に住居され、歿前に市外杉並町に移轉された。大正十二年九月一日の大震の翌日予は翁を白山御殿町の住居に訪問した時、翁は青年時代安政の大地震に遭遇されたことを話された。昭和二年一月二十五日杉並町に歿せられた。

翁は「好古類纂」の園藝部類の中の「花信風」を編纂され、殊に櫻の部には汎く古書を引用された。又「見ぬ世の友」其他の雜誌に寄稿され、古蹟の顯揚に努められた。（櫻第一〇號昭和三年）

匂櫻と中村秋香翁

匂櫻は山野に自生してゐる山櫻の中にも往々認められ、殊に吉野や小金井の如く多數の山櫻のある處には容易に見出される。匂櫻の多いので著しい處は櫻川で、こゝには自分が櫻川匂と名付けた

優れた匂櫻があり、その外にも種々の匂櫻があつた。

里櫻の中には花の匂の一層強い品種が昔から知られてゐた。今日に傳はつてゐるこの類の櫻では、瀧匂・上匂・御座の間匂・千里香・萬里香・白華山・細川匂・駿ヶ臺匂などがある。

天の川も匂櫻であることは自分が先年荒川で認めたが、その外にも同所の堤防には從來知れてゐない匂櫻があつた。

古歌にも櫻の花の匂ふことが多く出てゐるが、概ね歌人の理想であるやうに思はれたから、嘗て（明治三十五六年頃）中村秋香翁に質したところ、翁は實際櫻の花の匂を詠んだと思はれる古歌を記して送られた。その時自分が翁に贈つた庭前の駿ヶ臺匂の一枝に對し翁は

やまさくらひとへにかせをいとひしは
かをしらぬまのこゝろなりけれ

と詠んで示された。これも今では二十五六年前の一昔となつた。

秋香翁は駿河の人、國文學の造詣が深く和歌を克くした。自分が東京帝國大學在學中には秋香翁は理科大學事務官を勤められたが、自分が歐洲在留中翁は職を辭し、後に宮內省御歌所寄人となられ、明治四十二年歿せられた。

翁は書を能くし、書簡文其他の著述があり、又歌集には「秋香集」がある。（櫻第一〇號昭和三年）

櫻の名木と碓井小三郎氏

碓井小三郎氏が「京都坊目志」の著者として、又古實考證家として知られたことは言ふまでもないが、自分は是迄京都の櫻の名木を調べた時に度々碓井氏にその所在を質し、又同氏の懇切なる案內を蒙むつたことがある。碓井氏の地理に關する博識は自分の常に敬服してゐた所である。

然るに本日突然碓井氏の訃音を聞いて驚き、哀悼の情に堪へない。氏は壯健で實地踏査を行ひ、近世の京都の著るしい變遷を目のあたり見られて、益〻舊時の地理的考證の必要を感じられたことと思つてゐた。今や碓井氏の長逝によつて京都の地理古實に精通した老大家を失なつたことは惜む可きの至りである。

自分が始めて碓井氏に逢つたのは、大正十年四月二十日で、同氏に導かれて實地に調らべた名櫻では、千本閻魔堂の普賢象・東山東漸寺跡の泰山府君・鞍馬口閑臥庵の曙櫻である。これらの櫻の名木が今日如何になつてゐるかに就いては、別稿「櫻の名木の保存に就て」に記したから玆では省く。

碓井氏は大正十二年四月十七日京都で開いた大阪毎日新聞社京都支局主催の櫻の會で講演され、

洛中洛外の古來の櫻の名木に就て詳細述べられた。同氏は繪が上手で、晩年には櫻の寫生畫を作つて樂まれた由を聞いた。自分は尙同氏と圖つて京都の古來の名櫻の絕えたものを復舊したいと思つてゐたが、遂にその機會を得なかつたことは遺憾である。碓井小三郎氏の名は其著書と共に永遠に傳はるが、京都の名櫻に關しても亦同氏の紀念を永く留めたい。

碓井小三郎氏は昭和三年三月十二日歿せられた、享年六十四といふ。（櫻第一〇號昭和三年）

荒川の櫻と船津靜作翁

一

荒川の櫻の恩人たる船津靜作翁は昭和四年一月二十三日長逝せられた。誠に哀悼の至りである。

荒川の櫻に關してはこれまで度々記述したが、此處では特に名勝並に天然紀念物保存の見地から荒川堤の櫻に就ての來歷を述べ、併せて船津翁が此處の櫻の顯彰に盡された功績を述べたい。

荒川堤の櫻は明治十九年同堤の修理の出來上つた時に植ゑられたものである。此の櫻の來歷は明治二十四年に印刷した「昭代樂事」に詳である。之に依ると今日荒川堤と稱する處は武州熊谷から千住に至る十數里の間の堤防で、俗に熊谷堤というてゐる。其內江北村から西新井村に至る堤防の道路が惡くなつた爲め、その修理を出願したがまだ許されなかつた。然るに明治十八年九月東京府知事渡邊洪基氏が管內巡視の節當時の江北村長淸水謙吾氏の宅に憩はれた時、淸水氏は堤防の修理を懇請したところ遂に許可されることになつた。そこで翌年の春工事が終つた時に堤上に櫻を植ゑることになつたので、村內の人々は何れも相當の醵金をして費用に當てた。

船津靜作翁肖象と其筆蹟

櫻の植付は同年の三月に行はれた。此の櫻の苗木に就ては、當時櫻の種類として染井吉野がまだ珍らしかつたから、此の櫻を植ゑたい希望者もあつたが、淸水氏は其の議を排して古來の里櫻の名種を植ゑることを力說した。恰も當時巢鴨傳中の植木屋高木孫右衞門方に多數の名櫻が保存されて居た。聞く所によると、同家では其時の當主孫右衞門の三代

前から櫻の名種を熱心に集めてゐたもので、祖父孫右衞門・父治郎右衞門並に當主孫右衞門に至るまで絶えず優れた櫻花を諸方から集めた。是等の櫻花は或は京都地方から來たもの、又江戸時代の愛櫻家の栽培したもの、其他舊大名の邸宅にあつたものと言はれてゐる。

清水氏は斯る名櫻が高木方にあることに着目して、之を荒川堤に移植して、我が國華の粹を世人に示し、又外國人にまで知らしめようとしたのである。

當時植ゑられた櫻の品種の名は臺帳によると次の如くである。

長州緋櫻　普賢象　淺黄櫻　有明櫻　關山
一葉　金輪寺白妙　大膳　天の川　常香
瀧香　金剛山　鶯の尾　泰山府君　嵐類
水上　緋櫻　麟　彼岸枝垂　御車返
芳野　白普賢　駿河臺匂　奈良苔　清水
福祿壽　增山　鞍馬山　紅鵡　薄墨
上勾　楊貴妃　渦櫻　大南殿　蓬萊山
秋色　曉櫻　白墨　祇女寒櫻
千里香　旗櫻　大芳野　白普賢象　江戸櫻
八重曙　都櫻　人丸　初花　孫普賢象
雨宿　糸括　白八重大輪　法輪寺　桐谷
簾櫻　薩摩寒櫻　菊枝垂　大芝山　名月
御衣黄　手毬　日暮　白八重　細川匂
辨殿　朱雀　水無月　王昭君　小汐山
紫櫻　九重猩々　紅彼岸

後に自分の調べた所では臺帳面の櫻名には多少の誤があり、又植付られた櫻の中には臺帳に載つてゐないものもあつた。此の事は後に述べよう。

荒川堤に植ゑられた櫻は古來の名花として知られたもので、大抵正しい名が附いてゐた。これは全く高木孫右衞門の此道に熱心であつた爲であるが、又之を清水氏が荒川堤に植ゑたのは非常な卓見と云はねばならぬ。其時の植樹の總數は三千二百二十五本で、江北村の地内に千二百二十六間、西新井村の地内に一千間の距離に亙つて並木として植ゑられた。

植ゑた當時から五年の後に前に述べた「昭代樂事」が印刷された。此書には清水氏の栽櫻の記事があり又同氏の左の詩がある。

栽櫻江水北　歲々媚春風
驚殺西人眼　新名見日東

船津靜作氏も亦同書に此處の櫻の特徴を左の如く詠じて居る。

江北之村荒川干　堤櫻樹々映晴瀾
名花百種天葩粲　勿做墨陀一樣觀

尙同書中綿織瓢氏の「熊谷堤に櫻を植し事につきて」の文に次の如く此處の櫻の優れたことを述べてゐる。「先つ年此熊谷堤に櫻を植うる事を企てし人ありて其を宜しとする者さへおほく出來てつひに數多の若木をは植ぬるさるに此櫻はしも世に有ふれたる物にはあらて雅なる種のみを撰りに撰りて植しに今年は幹もいたく伸て花も色々に咲出て香の高きは更に云はす色の麗しきは紅きは燃るばかり白きは雪のことく或はかき流す淡墨色もありて春の錦を經緯に織りなすかと怪しまるまで見れとも飽ぬ心地そする」云々

君昭王
Prunus serrulata Lindl. f. *conspicua* Miyos.
（生寫氏馬久猪野西）（一の櫻里の堤川荒）

斯樣に荒川の櫻は、荒川堤の續きの千住方面に染井吉野のみ植ゑられたのと全く違つて、他の櫻の名所に見られない一大特色を呈した。

二

清水謙吾翁は淡如と號し海保漁村の門人で儒學に通じ、其他和歌國文にも堪能であつた。明治四十年に歿した。船津靜作翁は清水翁の門人で、櫻樹栽植の事業には當初から盡力されたが、併し船津翁の荒川堤の櫻に對する功績は一に守成の仕事であつて、能く清水翁の此事業を繼で櫻樹の愛護に努め、之を成木させ、立派な花を咲かせて日本無比の珍らしい櫻の名所として世に知らしめたことである。

船津翁は安政五年四月十一日に生れ、本年病歿せらるゝまで七十二歳の壽を保たれた。翁は北足立郡里村の人で、明治七年沼田村の船津家を繼がれた。人となり溫厚篤實で、明治三十六年自分が翁を初めて識つた以來殆ど二十七年間絕えず櫻の標本其他に就て自分に多大の便利を與へられたことは感謝に堪へない。玆に當時を回顧して自分が船津翁を識るに至つたこと並に荒川の櫻の研究上翁を煩したことを述べよう。

荒川へ櫻の苗木を供給した高木孫右衞門は此時は已に歿して其後繼者の代になつたと記憶する。同家の先代の弟に萩原猪之吉と云ふ植木屋があつた。此人も櫻を好んでゐたから度々荒川へ來て清水翁や船津翁と懇意になつた。自分が船津翁に逢つたのも萩原の紹介である。

これより先き、自分は荒川の櫻が立派に成木して、名高くなつたことを當時小石川植物園園丁取締上席内山富次郎氏から聞いた。それで明治三十六年四月二十四日始めて荒川堤へ往つてこゝの立派な櫻を見た。

鶯の尾
Prunus serrulata Lindl. f. *arguta* Miyos.
（荒川堤の里櫻の一）（西野猪久馬氏寫生）

次で同月二十七日萩原の案内で再び荒川へ往つて船津翁に面會した。此時翁は懇に堤上の櫻に就て案内された。植付當時の櫻の臺帳には一々品種の名が記しあるから、船津翁は夙に種名と其品種の所在とを知つて居られたのである。

當時自分の見た所では堤上の櫻はまだ若く、樹が健全で、枝が十分に伸び、花が多く着き、其色が、白・紅・赤・紫・黄・緑など種々で、花の大きさ、着方、枝振などもそれぞれ違つてゐたのみならず、中には花に芳香のあるものさへ見出された。斯かる多數の里櫻を一緒に調べることの出來た當時の喜びは譬へようがなかつた。

櫻里の川荒　景光の期中治明

自分が荒川の櫻を調べ始めてからは、毎年の花期には頻繁に同地へ出掛け、何時も大抵拂曉に出發して、堤上がまだ雜閙しない間に櫻の調査を了り、標本を採集して歸宅した。それで明治三十六年以後十數年間は絶えず櫻に關して船津翁と往來して居た。

三

荒川の櫻が何故に貴重であるかを玆で述べよう。荒川の櫻は吉野・櫻川・小金井などの櫻と違つて里櫻である。里櫻は野生にはない。何れも培養によつて生じたもので、其起原は遠く奈良朝に遡つてゐる。

里櫻が千餘年の昔から今日まで種樹家特に愛櫻家の丹精によつて無數生成したとは言へ、唯其中の優れた品種（花の大きいもの、美しいもの、重ねの厚いもの、匂ひの高いものなど）のみが昔から一定の名を得て、接木その他の方法によつて繁殖され、或は社寺への獻木となり、又は庭園の愛樹となつて保護されて來たのである。

かゝる名櫻は古來所々に見られたが、これを多數蒐集して一緒に栽植することは容易ではない。舊幕府時代では唯大名又は他の有力な人々の熱心によつて始めて出來たのである。

昔の櫻園で有名なのは文化文政頃の白河樂翁公の浴恩園、又天保頃の久保櫻顚の長者ヶ丸櫻園な

どである。是等の櫻園に植ゑられた品種の數は浴恩園では百二十、長者ヶ丸櫻園では百三十六で、一々櫻の名が知れて居り、その圖譜も今日に傳はつて居る。昔の櫻園は櫻の品種の保存上に大なる效果のあつたことは勿論であるが、併し一般には公開されてゐなかつた。殊に大名の別業などで庶民は容易に入ることが出來なかつたから、美しい櫻の咲き揃つた有樣は到底見られなかつた。

此點から考へると荒川堤の櫻は昔の櫻園の內容を今日に實現せしめて、而かも公開したものである。一般公衆には此處の櫻が國華の粹を集めたことを知らしめ、專門家には貴重な研究資料を給することになる。

多數の櫻の品種を一緒に蒐集する利益は互にその品種の樹容花姿を比較する便宜が得られることにある。畢竟荒川堤の櫻の價値は固より珍らしい櫻其物にあるにもせよ、其價値の最も大なる點は各地の名櫻を一緒に集植したことと、又一般民衆的になつてゐることである。

四

前にも述べた如く、荒川堤の櫻は植付た當時の臺帳に櫻の名が載つてゐるが、實際船津翁が調べられた所、又自分の調べた所によると、これに漏れたものが往々發見された。是等は一々篤と調査した上で新に名を附けて船津翁に報知した。

今一つの例を擧げると明治四十一年四月船津翁と共に堤上を櫻を調べてゐる中に、新渡しへ行く道の下口で偶然一つの新しい櫻を見出した。尙翌四十二年にもこれと同じ櫻が鹿濱の方の堤上にも點々見出された。依つて自分は此櫻の名を附け、其特徵を記して左の如く船津翁へ送つた。

江北櫻樹

新名　白雪櫻

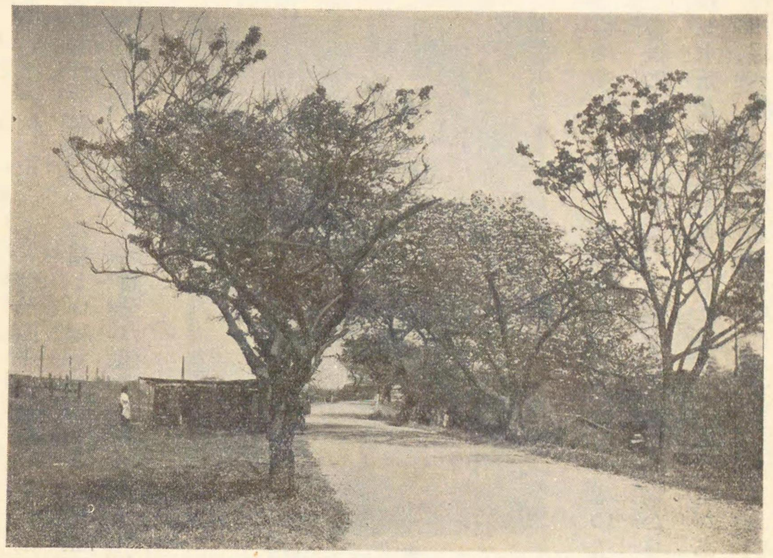
樹枝叢出、斜上、嫩葉淡褐色、單輪白花密着、花梗有毛。

明治四十二年四月十六日

其外同堤の匂櫻の中で「滿月」「荒川匂」「江北匂」も新しい櫻で、自分の命名したものである。又「高砂」と名附けたものも新花であるが、匂櫻ではない。

臺帳に載つてゐない不明の櫻として船津翁から標本を送られたものがあつた。此櫻では花梗が概ね五本殆ど一つ處から繖形に着き且花梗に毛がある。これは已に「櫻品」に出てゐる「五所櫻」で、荒川堤へ植付當時の品種の中に存在してゐたものである。

雪白
Prunus serrulata Lindl. f. *nivea* Miyos.
（荒川堤の里の一櫻）（西久猪野馬氏寫生）



昭和年間の荒川堤の櫻

斯様に荒川堤上の多數の里櫻の中にはまだ名稱の不明のものがあつたが、是等は次第に調べて名を附けた。それ故後には品種の數は臺帳面の數よりも增加した。

五

荒川の堤は明治三十六年頃から四十五年位までが最も花の立派な時代で、年々其の名が高まり、無數の人が花見に往くやうになつた。併し當時はまだ此處の櫻の手當が出來てゐなかつたから、自分は船津翁と協議の上其時の東京府知事阿部浩氏に面會して此の名櫻の保護を請うた。阿部氏は直ちに自分の申出を容れて、それ以來年々若干の費用を支出して、櫻樹の肥料その他の手

當を行はせることになつた。

然るに其後荒川の河川改修工事が起り、大正四年遂に櫻堤の主要なる部分が取拂はれ、又花時に夥しい人出の爲櫻の根が踏荒され、枝が折られ、その上附近の工場から出る毒煙の爲に樹が枯れ、又害菌害蟲の侵襲を受け、年々櫻樹の衰弱損傷枯死が甚しくなつて來た。船津翁もこれには心痛して居られたが、如何ともすることが出來なかつた。

大正八年史蹟名勝天然紀念物保存法が發布されてから、全國屈指の櫻の名勝指定の議が起り、遂に同十三年荒川堤も吉野・櫻川・御室・小金井の如き古來著名の櫻の勝地と共に指定された。

此指定當時では明治十九年櫻が植付けられた時よりも品種の數が減つて居た。大正十二年船津翁の實地調査に依ると堤上の櫻品の數は左記の四十一になつてゐる。

關山	七四	一葉	七四	普賢象	五五	御衣黃	二三
櫻金	一六	松月	一五	江北匂	一〇	麒麟	九
日暮	九	有明	八	福祿壽	八	鶯の尾	八
上匂	七	白雪	七	白妙	六	便殿	五
金剛山	四	薄墨	四	祇女	四	駿ケ臺匂	三
車返	二	雨宿	二	名月	二	小鹽山	二
九重	二	瀧匂	二	法輪寺	一	千里香	一
八重曙	一	類嵐	一	南殿	一	滿月	一
江戸	一六	薄色寒櫻	九	長州緋櫻	八	天の川	四
苔清水	三	細川匂	二	嵐山	一	御座間匂	一

旭　一　總計　四一品種
外に　染井吉野　九三

現在では同堤の櫻の品種の數が更に減つてゐることは必然で、その上樹の損傷が一層甚しくなつてゐる。これは櫻樹の保護が行屆かず、又補植が行はれてゐないからで、誠に遺憾である。

六

○船津翁は夙に荒川堤の一々の品種に就て、その苗木の育成に努められ、これが爲に適當の地所に苗圃を設け、年々接木を行ひ繁殖を圖られた。荒川の櫻が著名になつて以來、諸方から頻繁に此處の櫻の接穂や苗木を希望して來た。船津翁は其度毎に快く需に應じて貴重なる材料を分配された。

船津翁の厚意に依つて諸方へ分配された荒川の櫻は實に多數である。今主なる行先を擧げると、明治四十五年米國へ送つた荒川の櫻は現に同國ワシントンのポトマック公園に立派に成木して日本の名花を誇つてゐる。此の櫻の品種並に種の數は十一で、當時之に就て船津翁は大に盡力された。

東京帝國大學の小石川植物園内にも亦荒川の櫻の品種が保存されてある。これは前述の自分の研究の材料として船津翁に乞うて植物園内の實驗園に植ゑたもので、實生試驗その他の目的に供した。

興津園藝試驗場にも荒川の櫻の品種が集められた。これも十分の保護の下に今日立派に保存されてゐると思ふ。又大磯の徳川侯爵の別墅高麗園に荒川の櫻の品種が多數栽培された。これは大正三年九月船津翁の斡旋によつて江北村から故徳川頼倫侯へ寄贈したもので、自分も當時調べたことがある。今日も存在してゐることゝ思ふ。

新宿御苑の中にも荒川の櫻の品種が植ゑられてゐる。これも大正八年自分が御苑の櫻を調べた時見た所である。

大谷光瑞師の上海の別邸内にも曩に荒川の櫻が多數植ゑられた。大谷師は櫻に對して大なる趣味を持たれ、特に船津翁に依頼して大きな苗木を需められ、上海の地味の櫻に不適當なるにも拘はらず苦心して栽培せられたことを聞いた。然るに昨年五月大谷師に邂逅した節師の談によると、上海の不安の爲めに遺憾ながら此櫻の保護を講ずることが出來なくなつたとのことである。

七

船津翁が自分の櫻の研究上多年に亙つて絶えず便宜を與へられたことは前に述べたが、翁はすべて櫻の研究者は勿論櫻に趣味を有するものには懇切に實地を案内され、標本を提供して便宜を與へられたことは言ふまでもない。

船津翁は約四十年間も荒川の櫻に就てその特徴を調べられたから、一々の品種の甄別には甚だ堪

能で、只花のある時許りでなく、冬葉のない時でも枝振り、樹膚などに依り其品種を識別された。勿論翁は正確なる植物學的知識を持つて居られたのではないが、園藝上種類を區別するだけの經驗的知識は十分であつた。

自庭内の船津靜作翁

船津翁の櫻に對する盡力は全くの趣味と愛護心からで、毫末も名利名聞に亙らなかつた。これは翁が全く人格者であつたからで、何人も翁に接すると春風の如く悠然として奥ゆかしいところがあつた。

船津翁の仕事としては尙「江北櫻譜」がある。これは翁の監督の下に數年間に亙つて角田厚吉氏に荒川堤の櫻品五十七を寫生させたもので、現に同家に遺つて居ると思ふ。

荒川の櫻の花期は四月十日過から月末までゞあるが、年々此頃には毎日多數の人が翁を訪ねて櫻の話を聞き、櫻の名を質し、又標本を乞ひ或は實地の說明を求めた。此季節は翁の最も多忙な時であつたが、翁は少しも厭はず喜んで來客に接し、櫻に就ての便宜を圖られた。これは他人では到底煩に堪へないことで、船津翁にして初めて能くしたものである。翁のかゝる熱心と忠實とが荒川の櫻を世に知らしめた一つの原因ともなつたと思ふ。

船津翁が荒川の櫻に盡された功績の概要は前に述べたが、翁の歿せられた後の荒川の櫻の保存に就ては充分の考慮を要する。現に同櫻堤は名勝として指定されてゐるが、若し其儘に放置すれば遠からずして此處の櫻は絕滅してしまふであらう。里櫻は山櫻や彼岸櫻に比すれば樹齡が甚だ短いもので、大抵五十年位で木が傷む。最も保存の方法が完全であれば、更に年齡を重ねることが出來るが、荒川堤の如く道路の並木となつてゐて、花見に夥しい人出のある處では、櫻の損傷するのは當然で、充分の保護と補植とに努めなければ到底此名勝の存續は出來ない。そこで自分の當局に望む所は、此名勝として指定された荒川の保存に就て速に實地の調査を行ひ、適當なる方法を講ぜられんことである。又荒川堤の所在地たる江北村に於ても清水翁並に船津翁の遺志を繼いで、此櫻の保護に充分努められるやう希望する。（史蹟名勝天然紀念物第四集第三號昭和四年）

櫻井勉翁と櫻

錦鷄間祇侯櫻井勉氏は昭和六年十月十二日八十九歳の高齢を以て郷里但馬の出石町に歿せられた。

櫻井氏の名を自分の青年時代に知つたのは同氏が内務省地理局長の時であつた。其後久しく消息を聞かなかつたが、去る昭和五年三月仙臺で木村匡氏から不圖櫻井翁が郷里に健在せられ、且櫻に對して趣味の深いことを聞いた。

依つて直に翁に「櫻」並に「櫻に關する圖書解題略」を贈つたところ、翁は甚だ喜ばれて返書を認められ、且櫻井の姓に因んで櫻に關する事物の蒐集に着手したことを申越された。

爾來櫻井翁とは文通したが、翁は折々郷里地方の名櫻に就て報告され、又昨年發刊の「櫻第十三號」には「櫻五題」を寄稿された。

翁は古來の長壽者に就て調べられ、「日本上壽錄」・「昭和大典人瑞錄」を著された。是等の著書によるも翁が長壽を期せられたことがわかる。（櫻第一四號昭和七年）

西野猪久馬氏と其櫻畫

西野猪久馬氏は高知縣の人、明治三年高知に生れ昭和八年東京に歿せり、享年六十三。予が西野氏を知れるは明治三十年頃同氏が小石川植物園内植物學教室に畫家として在勤されたる時なり。其後同氏は教室を去られたるが、晩年榮養研究所に聘せられ、專ら植物の寫生に從事されたり。西野氏は線畫に長じ、描法精細なり。同氏が予の爲に櫻を寫生されたるは明治の末より歿年まで二十餘年の間にして、彩色圖と墨圖とを併せて百餘枚に達せり。是等の櫻圖の中巨樹・名木又は名勝として法律によりて指定されたる櫻の寫生も少からず（「增補櫻に關する圖書解題略」追加第七參照）。

西野氏の櫻花寫生は標本圖として正確なる外に一面美麗なる櫻花の姿態を實寫したるものなれば、美術畫としても亦價値あり。西野氏の植物描寫に努力されたる功績は少からざれども、予は特に前記の櫻花寫生圖に於て同氏を永く紀念せんと欲す。（櫻第一六號昭和九年）

櫻の文獻

市橋長昭撰花譜の解題並に其文獻的價値

櫻の品種の生成に關する研究を行ふに際して必要なるは、先づ昔時より傳はれる品種並に其來歴を詳にするにあり。品種を考究するには實物に據るべきは言を俟たず。又來歴を知るには記錄並に圖面に據らざるべからず。特に貴重なるは往昔に於ける櫻花の寫生圖にして、之により一々品種の來歴を探索するの便あり。予の櫻の品種に就ての攻究も亦此方法により考證を得たること少からず。

茲には昔時の櫻の寫生圖中最も重要なるものにして、予の檢せるものを記さんと欲す。櫻の寫生畫は遠く元祿以前にもありたれども、汎く世に知られたるものは松岡玄達（恕庵）の櫻品（寶曆九年版）を始めとす。此書の畫は極めて簡單なれども、而かも尙一々の櫻の品種の名を記し且多少花の特徴を顯はせるを以て參考に供すべし。後世に至りて此書の圖を轉寫したる櫻の狂句集、俳句集の類あるを見ても、此書の汎く讀まれたるを知るべし。

櫻品の圖は無彩色なるが、明治年間に至りて花の部分を著色せるものゝ出づるに至れり。是れ同

時代の櫻の寫生家宮崎（櫻戸）玉緒の彩色を加へたるものなることを、予は書肆芸艸堂主人より聞けり。

櫻品の圖は簡單に失し、主に歴史的價値あるに過ぎざるが、其後始めて精巧なる櫻の寫生圖を作れるは京都の三熊花顚（介堂）なり。花顚は寛政十二年四十三歳にて歿せり。伴蒿蹊の近世畸人傳の續編を撰めるによりて世に知られたる人にして、性來櫻を愛し京都附近は言ふに及ばず、遠方まで也花を尋ね一々之を寫生し、品種の特徴と名稱とを明にし、之を後世に傳へたるの功は歿すべからざるものあり。又屢〻吉野山に往き花を賞し且史蹟名勝を探れることは、其著吉野の栞（寛政十三年版）を見て知るべし。花顚の妹露香亦櫻の畫を善くし、其作品世に傳はれり。花顚の逸事は近世畸人傳に載せられ、又梅辻希聲の花顚居士瘞筆碑銘並序（事實文編第三、第一五〇頁）にあり。右の碑銘並序には花顚の歿後、廣瀨自勝（花隱）亦好んで櫻花を畫くとあり。

花顚の櫻花帖に關しては、蜀山人の增訂一話一言（新百家說林五、第二一九頁）に詳に載せたり。卽ち植木三郎（鑾峯）京都在番より携へ歸りし一帖として櫻花帖の目錄を擧げ、外題は岩倉三位、畫題は花山院大納言、かな序は廣幡大納言、かな跋は芝山權中納言、眞字跋は林泉院六如上人、かな序は伴蒿蹊、眞文跋は皆川淇園、櫻花銘は畠中胴脉、眞字跋は唐人錢宇文撰、同陳國振書にして、畫く所の櫻花三十六品、畫工三熊海堂妹露香女とあり。是れ花顚の畫けるものを露香の完成したるも

のなるべし。又同書に紀州侯へ奉りし一帖と、此帖との二品より外に我國にはなしとあり。兎に角該畫帖の稀品なるを知るべし。

斯く櫻花帖の一本は紀州侯に奉れることを記せるが、予の聞く所にては、舊紀州家たる德川侯爵家には之なき由なり。さりとて該畫帖は如何になりしや。然るに予は頃日宮內省圖書寮に藏せらる花譜と題する櫻畫帖を閲覽するを得たるが、其第一帖は三熊花顚の櫻花の摹寫に屬し、描法精巧にして參考の價値大なるを知れり。依て今茲に此畫譜並に其續譜の內容を記すべし。

花譜は長一尺二寸七分、幅一尺二分の帖本四冊より成り、外に花譜追加一冊、さくらの詩歌附序一冊、總計六冊ありて箱に藏せられ、箱蓋に花譜……大阪木村孔恭輯平安三熊花顚畫江戶櫻井絢摹右全一帖　續花譜……淡海藤原長昭輯江戶櫻井絢畫右全一帖　又續花譜……淡海藤原長昭輯江戶櫻井絢畫右全一帖　通計四帖　追加花譜五枚とあり。第一冊の表紙には花譜　花顚居士原輯　單と題し、卷頭二頁に涉りて柑色の絹地に紀正毅（堀田豐前守、江州宮川城主）の擅弄九春の題字あり。櫻の畫は凡べて薄鼠色の絹地（長一尺二寸、幅九寸一分）に寫され、何れも實物大の寫生にして、每頁約二三圖を收め、又一頁に一圖なるもあり。

圖の第一頁の上部に曾經台覽の印あり。圖の描方は附け立てにして彩色鮮明なり。枝は單に墨にて描き、皮目等なし。花瓣は順に重ねて描き、重ね目は色を濃くせり。重なれる境界を白く拔きたるものなし。若葉、花の鱗片、苞などは一々精密には顯はさず。又葉柄の蜜線も二圖の外には無し。凡べて是等の諸點は昔の櫻の寫生畫を覽る上に注意すべき所にして、昔にても此の如き部分まで表せるもの他に無きに非ず。

第一冊に收めたる櫻の品種は左の如し。

小櫻　同重　同紅　絲櫻　同重　山櫻　同青葉　芳野　小山櫻　八重山櫻　玉王　伊勢　桐谷
江戶單　江戶櫻　鹽竈　虎尾　同單　匂櫻　大膳　地主　淺黃　同重　普賢堂　法轉寺　廊間
時雨　金龍寺　奈良　曙　樺　常盤　三芳野　有明　（總計三十四圖）

末頁に享和癸亥南至前二日倣華顚居士圖雪鮮櫻井絢寫とあり。又別に櫻品摠三十四種棕堂主人書とあり。棕堂主人とは前記の櫻の寫生圖に一々見事なる細楷にて櫻の名を記せる人なり。右の櫻の名稱中法轉寺とあるは明に法輪寺の誤なり。

第一冊には左の三跋文あり。本畫譜の來歷を知るに便なるにより、茲に其全文を載す。三跋文は共に卵色の紙に書せられ、第一と第三とは細楷、第二は行書あり。

予性愛花而於櫻最甚城東第五橋庄年植數十株而品類之異殆及百余猶尙搜求不已夫櫻之爲花富麗豐艶三春之光特屬乎是矣故中古以來單稱花則如知爲櫻猶蜀之海棠洛之牡丹也蓋海外諸國無有是花乃天獨與吾邦以此尤物其可不貴重哉今古愛之亦不爲少至若定品分類圖而譜之者則那波活所松

岡成章蘆田又恕等種々數家而鑒識疎漏繪圖猥陋至比之眞花不能無疑予久有意修譜事殷不果頃者獲觀浪華木世肅藏屬華顚寫生而益知諸譜之陋殆可廢矣夫世肅固精草木之學而華顚畢生惟好畫是花然則集二人之長技以傳此花之神則豈佗求耶因使井孟素仿一本以寘坐側但恨其所收三十餘品未謂詳備予不得不撰續譜究其全此其嚆失云

享和癸亥嘉平初吉市橋長昭撰于擅春書屋東窓

○

去歲秋日適與客賞菊時黃雪園書來竝櫻花譜一帙云是浪華蓋葭堂所藏繙之則著色寫生一々逼眞因與坐客反覆傳觀東籬之英爲之無韻今復觀此帖神采不讓原本而精緻則過之如繙之百花場中必知夫紅紫之眞亦將不如櫻之假也甲子孟陬端五陶白堂主常跋

○

我櫻之非彼櫻也昭々矣南橋北枳土宜則然々說者不勝紛々曰有曰無竟難一定要之燕書郢說也自非葦而杭之安能判然無疑雖然我固弗往觀矣而彼寧弗未見邪必使彼斷之是不辨之辨也則吾先擧茝亭之詩曰東來初見此花奇又擧沙子雨之語曰此海外異種繼而證之有卽非之永獨湛之圖而益明以著然後其爲彼之所無々復可疑而說者喙可思矣說者喙思而吾論始定抑夫櫻之郁々惟我有之固宜誇詡而咏之圖畫而傳之獸物產之家不然一艸一木必欲援彼名以充之未詳二字其所恥也故其於櫻也或充以白櫻桃以垂絲海棠又以玉蕋花則誣亦甚矣噫吁櫻乎一何寃也浪華木世肅邃於赭鞭之學其說公平大曩世所謂物產家嘗作櫻花圖譜載三十餘品未成完備吾星峯公將輯其遺乃取其本先倣臨之因使坦述世肅之意雖然坦此言實爲櫻花雪寃矣不獨爲世肅又不獨爲星峯公也文化新元春仲下浣屬稿於第五橋莊池閣一齋野逸佐藤坦

以上花譜の第一帖の內容なり。此原本は前にも記したる如く花顚の筆に成り、蓋葭堂の所藏にして、前文に引用せる蜀山人の記せる二帖の外なるは明なり　且花品の數も三十六ならずして三十四なるの差異あり。然れども花顚の原本の摹寫なれば、重要なる參考圖たるは論なし。摹寫せる畫家櫻井絢（號は雪鮮字は孟素）に就ては古賀穀（精里）の墓碑銘あり（事實文編第三、第三〇四頁）。之に據れば、雪鮮は通稱政藏、幕府の大番同心を勤め、後學問所下番となれる人なり。性恬靜にして畫を好くし、櫻花を愛して其寫生せるもの百種に及べり。畫く所何れも眞に逼れりと云ふ。文化八年四十三歲にして歿し、深川靈巖寺に葬れりと。又此花譜の撰者は跋文に記名せる如く、市橋長昭（壹岐守）通稱韶之助、星峯と號し、江州蒲生郡仁正寺の城主なり（寬政年間大成武鑑）。

花譜の第一帖は摹寫とは言へ、雪鮮の妙筆になれるものなれば、前記の第二跋文中にもある如く、殆ど花顚の原畫に勝るほど巧に描かれたり。されば此摹寫帖によりて最初の精密なる櫻花圖譜の描法と當時の櫻の品種とを知り得るの便あり。然れども此花譜の貴重なるは唯此點に在るに非ずして、

第二帖以下の續帖に於て、花顛の櫻花帖に漏れたる多數の櫻を描寫せることゝ、又花譜の圖が後世の櫻譜に用ひられ、其淵源となりし點にあり。此後の櫻譜に就ては後文に述ぶべし。

是れより花譜の第二帖以下の內容に移らん。第二帖の表題は續花譜 擅春主人新編 上とあり。卷頭二頁に涉りて白絹地に內藤信敦の風前香遠日下色明の隸書の題字あり。信敦は村上侯にして、京都所司代となり、賢明を以て聞えたり（大日本人名辭書）。此第二帖の花の圖の首頁にも曾經台覽の印あり。第三第四の各帖も亦然り。以下第二帖に畫ける櫻の名を記す。

寒緋櫻　異種彼岸　八重彼岸　單彼岸　婆彼岸　節會櫻
三度櫻　不斷櫻　熊谷　千本櫻　異種熊谷　異種千本櫻
百枝櫻　八重兒櫻　單兒櫻　春日野　牡丹　變種牡丹
楊貴妃　異種楊貴妃　同　上　同　上　單楊貴妃　墨染
變種墨染　異種大膳櫻　小菊櫻　變種大膳　變種墨染　變種山櫻
同　上　同　上　同　上　同　上　同　上
同　上　同　上　變種逆手　變種山櫻　外山櫻　名島櫻
帆掛櫻　變種帆掛櫻　異種帆掛櫻　同　上　同　上　帆立櫻
白玉　絲括　小手毬　變種小手毬　大手毬　芝山櫻
逆手櫻　變種逆手　變種便殿　八重便殿　單便殿　變種便殿
變種提燈　小提燈　大提燈　鳳來寺　櫻　異種旗櫻
江戶法輪寺　薄櫻　婆櫻　異種婆櫻　鵜櫻　鵜枝垂
松川　山川櫻　變種山川櫻　遠川　九重櫻　八重櫻
異種鹽竈

（總計　七十九種）

第三帖は續花譜 擅春主人新編 下と題し左記の櫻の圖を載せたり。

變種八重櫻　變種嵐山　薄墨櫻　嵐山　單鷲尾　八重鷲尾
海棠櫻　變種鷲尾　樺櫻　變種樺櫻　欝金櫻　駒留櫻
異種淺黃　夜の雪　照月　八重西行　單西行　菊南天
薄樺櫻　奧州南天　一葉　變種一葉　小枝垂　右衞門櫻
須磨　大枝垂　金王櫻　變種須磨　澁谷金王櫻　雪山
雪の山　白妙　隅田川堤上櫻　同　上　同　上　御殿山櫻
同　上　同　上　飛鳥山櫻　淺黃鹽釜　拾櫻　紅普賢象
穴八幡櫻　備後三郎題詩櫻　變種虎尾　同　上　變種伊勢　醍醐櫻

人丸櫻　八景臺　異種普賢象　九品櫻　有明櫻　延命
長崎變種長崎　遲櫻　泰山府君　變種泰山府君　同　上
最後に雪鮮櫻井絢寫とあり。

（總計六十二圖）

次に左の跋文あり。

予之創續譜也每見異品輙使孟素寫生焉家園所蒔同志所栽固亡論已若聞某處有名品亦必乞一枝前後所得凡一百六十有六種每幀或描一種或二三種共爲六十有三幀譜中間收原譜所載此皆係子種變化故有未有名稱者又有名同者種異者也夫振古名品之最著單瓣無如芳野重瓣無如寧樂其餘奇種靈品隨在不少蓋以風氣之餘土壤之異花亦隨而變今取彼之所產視此之所移則往々不同矣故雖譜中所載者亦使就其所產索之陰乾眞花千里附郵竟得七種乃白描附載於後以其狀可辨而色不可辨也文化紀元甲子暮春下浣擅春主人撰

此跋文によりて、花譜の撰者が花顚の櫻花帖に載せざる多數の櫻の品種を蒐集して、一々之を寫生せしめたる來歷を知るを得。是等の品種は固より一ヶ所にて集められたるに非ずして、諸所を探索して得たるものなれば、蒐集の苦心は容易ならざりしならん。殊に撰者の意を用ひたるは是等の品種に就て其名稱を質し、誤なきを期せることにして、是れ櫻花圖譜を撰むに際しての大切なる點なり。且又撰者の培養上の經驗によりて、是等の品種の實生が變化せるを述べたるも當然の理にして、斯かる觀察は已に古き時代より行はれたるものあるべし。撰者の櫻品蒐集に熱心なるは、右の跋文の末に記せる如く、遠國の櫻にして容易に其新鮮なる標品を得がたきものは、腊葉として取り寄せ、其形のみを寫生せしめたることにて明なり。交通の不便なりし當時に於ては、固より他に方法なかりしならん。此遠地の櫻七種は、本帖の終に墨畫にて雪鮮の畫けるものにして、其名稱は左の如し。

嚴島姥櫻　臼井峠櫻　箱根櫻　南殿御庭櫻　象潟西行櫻　芳野櫻
寧樂八重櫻　最後に櫻井絢寫とあり

（總計七圖）

此墨畫を見るに描法巧妙にして、八重櫻の瓣の重なれるところ、墨色の濃淡にて鮮明に顯はせり。櫻の彩色畫の精巧なるものは少からざれども、墨畫にして此の如く精密に描けるものは余嘗て之を見ざりき。

此墨畫の後に更に撰者の左の跋あり。

續譜已成花褪葉密鶯聲漸老時偶覽坊刻花信風花委々書陋俗可厭然廣搜偏索不爲無稗因知予譜尙有遺漏後復開某處有奇品亦數十種予既有意作之續云甲子初夏上澣擅春又識

此第二の跋によりて、撰者が更に續々花譜を作るの必要を感じたるを見るべし。是れ卽ち花譜の第四帖となりて現はれたるものにして、表題は又續花譜と題せり。載する所の花の圖左の如し。

無名同上同上同上玉盤櫻玉堂櫻
來復寺車返羅櫻鶴岡櫻奈天櫻弓藥櫻醉胭脂
平頭櫻緋櫻美人櫻殘雪櫻深山櫻深山隱
八幡太郎旗櫻映日櫻駒繁櫻美人紅粉瓣櫻壽春櫻
霞櫻鳳尾櫻芭蕉堂櫻秋色櫻殿櫻同上
上野白櫻同上上野櫻白山櫻金絲櫻神田明神櫻
深川八幡櫻同上雀櫻田町八幡櫻同上同上
姥櫻同上玉兎櫻大奈天伊勢櫻爪工奈天
紅葉南天南殿觀音櫻色奈天千鳥櫻水紅球
碧玉櫻平安左近櫻江戸櫻蝴蝶櫻　最後に雪鮮櫻井絢作とあり
（總計五十八圖）

前記の如く畫家の署名せる後の數頁に於て更に左の三圖を載せたり。

日野吳氏園　中野小林氏園　八重絲櫻之變

此三圖中第一・第二の二圖は描法殊に精密にして、托葉並に葉柄の蜜腺をも顯はせり。斯く細密に描けるものは花譜中の他圖になし。日野吳氏園の櫻の圖は其大なると花形の豐艶なるとによりて最も美なり。

花譜追加五帳と題して一冊の美濃紙本あり。鼠色紙に描けり。彩色圖なれども、前の四帖の圖に比すれば粗なり。筆者の名なしと雖も、是亦雪鮮の作なるべし。載する所の櫻の圖名は左の如し。

品川大井村名主貫藏（大野氏今稱五藏）園台命櫻　事詳四神地名錄（古河平次兵衞著）及台命櫻記（大野五藏撰著）
品川來福寺內兒櫻　與隨在稱兒櫻異
品川西興寺內淺黃櫻（與近世所稱淺黃異顧恰顏齋品所載淺黃是也）
品川興福寺內櫻　似單瓣非單瓣似重瓣非重瓣一花六七瓣乃至八瓣無十瓣者
本莊龜井戶本多屋舖百姓本多伊兵衞宅香櫻　本年亦移于我園
前所前人宅別種香櫻　本年亦移于我園
庄內侯柳原邸園中重瓣櫻　案是泰山府君之別種枝幹藥蕚全同唯瓣多心中兩鬚長短亦出爲異也
初重　我園中七八年前所移白花單瓣至于本年初爲重瓣仍命曰波都加佐禰凡櫻種單重相交開者經年愈久則盡爲重瓣是亦因木老爲重瓣者不足怪焉
品川來福寺安富櫻

（總計九圖）

以上の四帖並に追加を合はせて總計二百五十二圖中第一帖の三十四圖を除き、第二・第三・第四の三帖に載せたる二百九圖は雪鮮の寫生にかゝり、又追加の九圖も同樣なるべければ總計二百十八圖は雪鮮の新に作れるものにして、之を花顚の原圖三十四に比すれば大なる增加と云ふべし。故に寛政より文化にかけて少くとも二百五十二の櫻の品種又は種類が此畫帖によりて世に知られたるなり。固より當時に存在せる異なれる品種の數は決して之に止まらざりしならん。然れども其顯著なるものは概ね網羅せられたるべく、隨つて此畫帖に寫されたるものは此時代の櫻の主なる代表として見るべし。此の如く花譜が多數の櫻を收めたるは、一に撰者市橋長昭の熱心と、又畫家櫻井雪鮮の努力の結果に外ならず。

前に記せる如く花譜に附屬せる詩歌並に序あり。是れ此櫻花帖が當時の逸品たりしことを證すべきが故に、茲に之を載すべし。

さくらの詩歌附序

この一帖はさりぬる卯月の中のさゝみ小倉宰相なにがし卿れい幣使にてしもつけにくだり給ひ歸京のおりに千住驛に立寄らせ給ひしをかねて　侯の好みにしてさくらの繪ひとまきありと風のたよりにきゝおよばせ給ひしまゝに一覽ありたきよしさた侍るにつけて家士の正峯におほせて驛館に提さへ參らせて披露ありけるに　卿一覽の後感嘆なのめならずふかく賞詞ありつるよしになむよりて　侯より　公卿の詩歌こはれたきよしを正峯申はからひぬ　卿いとやすしとうけかひ給ひて歸京ありけらしとある程に月日のふりゆくは夢のやうにてはや神無月中のころにそかの卿よりさくらの詩歌ともめい〳〵に染筆ありてやひらのたむ尺給はりぬしかはあれども不幸なるは　侯葉月のころよりおもくなやみ給ひていさゝかさはやくよしもなくつゐに九月の末身まかり給ひぬさればこの詩歌給はりしはなきあとのことにしていとくやしかるべきことにこそ侍るめれこゝにて正峯つら〳〵おもひみればさらにかひなき事にも侍るながら　侯の好み給ひしもあさからぬ筋なればたゝにやみなむも本意なしとていそぎこれをなむとゝのへて先かの靈前に備へかつは　君藏になかくおさめ侍るといふことしかなり

文化十一年十一月のこと也もとめに應して　　平壽有記之

詩歌を書せる短冊は樺皮にて製せるものにて、一頁に四枚づゝ帖り付け總計八枚あり。上側に一一金箔紙に筆者の名を記せり。

園前大納言基理卿

春ことに時もたかはすさく花のいろ香を千世もわか宿にみむ　　基理

芝山三位國豐卿

たくひなくいつさきそめし春よりか花はさくらの名とはなりけむ　國豐

櫻井三位供秀卿

庭櫻はなもふりせぬ春見せてやとのなかへのかさしにや咲　供秀

四條侍從隆生卿

花さかり峯もふもとも同色にしら雲かくる遠かたの山　隆生

小倉宰相中將豐秀卿

寄華顚主人

蝶使遠來客舍中芳心許借數帖紅何忘得此青春樂萬種花邊旅況空　豐季

武者小路少將公隆朝臣

櫻　雲と見て雪とまがひて遠山のたかねの櫻あくときそなき　公隆

勘解由小路左京大夫資善卿

林園春暖物光饒最愛淡紅一樹嬌雨霽枝々霞色映風葉片々雪花飄　資善

清岡勘解油長官長親卿

朝映初陽如絲紗夕迎新月似明霞玄都觀裡當年樹孰與仁和今日花　長親

前にも述べたる如く櫻譜としての花譜の內容の豐富なるは獨り其編成せられたる寬政文化の當時に於て類なきのみならず後世に至りても亦比儔少きものと云ふべし。其後文政頃に成れる白河樂翁公の浴恩園櫻譜には櫻品百二十三を載せ、又同じ年代頃の屋代弘賢の櫻花圖（拙稿櫻花圖考、櫻第二號に載す）には九十六を收めたるに比して遙に多し。天保頃に坂本浩然の畫ける櫻の如き、其品種の數頗る多きも尙花譜の櫻の數に及ばざるが如し。斯く花譜には多數の櫻を收めたるも、而かも彼の松月・關山・箒櫻・天の川・猩々・長州緋櫻の如き著しき品種にして、其の後の櫻譜に載せられたるものの此に漏れたるあり。是等の品種は已に前記の屋代弘賢の櫻花圖にも出たるものあれば、寬政文化の頃にも無論有りしなるべし。之によりて見るも、尙他に遺漏あるや明なり。

花譜が最初の詳なる櫻花圖譜として文獻上重要なるは言を俟たざれども、此他に尙大切なる理由あり。是れ花譜の圖が後世の櫻譜に轉載せられ、自ら一の淵源となりたるに依る。予は往年來昔の櫻の品種を知らんが爲めに、諸處に藏せらるゝ櫻譜の類を閲覽せるに、其中古今要覽稿に載せたる櫻の圖と堀良山の叉譜（じゃく）の櫻の圖とが大半相同じきを知り、此兩書の畫が同一根源より出たるものか、將一方の書が他方の書より取りたるかに就き姑らく疑を存じたり。是れ去る大正五年に出版せる拙著山櫻の野生變形並に培養變種（東京帝國大學紀要理科第三十九册第一編）中に記せる所なるが、此度花譜を閲覽したるに、偶然此畫譜中の圖が前兩書に引用せられたるを知れり。蓋し前二書は昔より複寫せ

られて人の觀るに難からざるが、獨り花譜のみは言はゞ祕書となりて藏せられたるを以て、全く世に知られざりしなり。

古今要覽稿には編輯圖畫其他の擔當者の署名が編中の處々に記されたれども、櫻の部には之なし。但しそれよりも後卷の草木の部には編輯兼圖畫の擔任者として志村愛助平知孝の名を記せるにより、予は始めは櫻の畫が此人の描寫にかゝるものならんと思へり。又𡚁譜には文久元年堀良山（內藏頭直虎信州須坂城主）の撰める序を揭げ「𡚁譜之撰不知作何人之手」とありて、其櫻の畫の來歷に關しては全く不明なりしが、今や一朝にして此兩書の圖が共に花譜より出たるを知り、從來の疑問を解くを得たるは快事と云ふべし。尤も古今要覽稿の櫻の圖が悉く同譜より出たるには非ず。同書の櫻の圖は總計二百五十ありて、其の內櫻品より轉載せる墨畫の櫻五十七、彩色畫百九十三あり、此彩色畫中、同書の內閣文庫藏本中不忍文庫印ある原本にては、大多數の鼠色紙に畫けるものと少數の白色紙に畫けるものとあり。前書は一二圖の外はすべて花譜より採れるもの、後者は一圖の外は同畫譜になきものなり。予の檢せる所にては、百六十六圖は花譜より轉載し、又二十七圖は別に描けるものにかゝる。

次に𡚁譜の圖は總計二百五十二圖にして、花譜の四帖並に追加に載せたる圖數と全く一致し、圖形も亦全く相同じ。故に此書は花譜と內容同一なるが、唯原本の跋文一切を省きたれば、表面上何人の撰なるや知るべからざること、良山の序文にあるが如し。𡚁譜は斯く花譜を摹寫したるものなれども、圖の排列は原本とは多少前後せる所あり。先づ花譜の第一帖たる花顚の原圖の模寫より始め、次は第二帖なる續花譜上に移り、それより第四帖なる又續花譜、第五帖の續花譜下、次で追加を載せ、最後に續花譜下の終に收めたる墨畫の櫻七種を彩色畫として載せたり。

以上古今要覽稿と𡚁譜との櫻の圖に就て記せるが、是れより更らに花譜の描法を敍し、之と右兩書に轉載せる圖の描法とを比較すべし。花譜の描法は一面精巧なる寫生的なるも、一面には亦頗る美術的なり。先櫻の枝は單に濃墨にて描き、特に皮目などを顯はさず。（泰山府君の圖は太枝なるにより皮目を顯はす）。葉は暗綠、帶藍綠又は暗茶赤色等にして、鋸齒なきもの多く、或は唯其意を表はせるに過ぎず。綠葉の葉脈は濃暗綠色の細線にて分明に表はし、側脈七八本づゝあり。花梗は細く描き、濃暗綠色なり。鱗片・苞なども一定の色にて染め別け、形は精密ならざれども、而かも巧に描けり。花瓣の重ね合へる所は胡粉を濃く盛り上げて區別せり。胡粉の用法巧にして、毫も剝げたる所なし、葉の蜜腺は前にも述べたる如く、二つの圖の外は畫けるものなし。全體より見れば、此畫帖は標本畫として價値多き外に美術畫として亦價値大なるものなり。

古今要覽稿に轉載したる前記の圖も、原圖の如く附け立描法なるも、原圖に比すれば色彩。形狀の表はし方遙に劣れり。同書の原本に於てすら已に然り、況や複寫本に於ておや。𡚁譜はすべて綠

書にして、此書の轉寫を重ぬるに從ひ、益〻原圖と遠ざかり、葉柄・花梗の如き甚だ太くなり、又第二頁の小櫻紅の如きは上部の枝（花一輪を着く）を略するに至れり。其他、形の正しからざるもの少なからず。殊に色彩に至りては甚だ强烈となり、葉は一體に藍色に過ぎ、花色も白を紅となし、又は一樣の淡紅色を斑紅色に變じ、其他、濫に赤などの色を加へ、原本の彩色と大に違へるものあり。是れ皆描寫畫家の不注意に由る所にして、轉寫の數を增す每に、愈〻粗雜となれるは惜むべし。凡べて何れの寫圖に限らず、摹寫宜しきを得ざれば、色・形等原圖と異なるを免かれざるが故に、此の如き複寫本は參考の價値至つて少し。必原本に就て一々質すを要す。

花譜の圖が獨り前記の兩者に轉採せられたるのみならず、尙他書にも採られたるものあり。例へば浮世繪師玉蘭齋貞秀の作れる萬象寫眞圖譜（阿部櫟齋序）には百九の櫻の圖を載せたり。是れ皆花譜の圖なれども、其形の誤まれる外に彩色雜駁且俗惡にして論ずるに足らず。近世になりては武田醉霞氏編園藝部類（好古類纂の一部）の櫻の圖十七の內の十五は花譜の原圖なり。然れども是等の書は固より直ちに花譜より採れるものには非ずして、概ね爲譜の圖を用ひたるなり。

予は花譜と古今要覽稿及び爲譜の圖とを比較するに當り興味を感ぜしは前に述べたる如く花譜に法輪寺を法轉寺と誤寫したるを兩書共共儘に寫せるにあり。之によりても右兩書が直ちに花譜に據りたるを知るべし。其他兩書の櫻の圖の傍に一々其名を記せる文字の如き、細かき楷書にて認め、其書體は花譜にあるものと全く同じ。唯奇異なるは兩書とも何故に花譜より模寫せることを明記せざるや、爲譜の選者堀良山の言にては、全く原本を知らざるが如くなれども、古今要覽稿の著者屋代弘賢の博識と、同書編述の時代が花譜の成れる時代を去ること遠からざるとは該原本の全く知られざりし理なし。然るに古今要覽稿に花譜の櫻の圖の多數を載せながら、其圖の出處を擧げざりしは故らに省けるには非ざるか。花譜が毫も汚損の痕なく、完全に保存せられたるを以て見れば、同書が個人の手に祕藏せられたるは疑ひなし。唯其圖畫の摹寫本又は稿本のみ世に出でゝ、爲譜の如き其全部を收めたれども、原本にある跋文を缺けるにより、遂に何人の手に成れるかを知る能はざるに至りしならん。

上記の疑問は姑く措き、要するに花譜は我邦の櫻譜として最も大切なる文獻にして、科學上より見るも、歷史上より見るも、亦美術上より見るも、國寶的價値あるものと云ふべし。斯かる貴重なる圖書が聊も汚損せられずして完全に遺り、而かも帝室圖書として永久に保存せらるゝは幸福の至りなり。

本稿を了するに際し、圖書閲覽上種々の便宜を與へられたる圖書頭森林太郎氏・文學士小西兵太郎氏・帝國圖書館長田中稻城氏・渡部克太郎氏・東京帝國大學附屬圖書館長和田萬吉氏・小澤隆八氏・武田信賢氏に其厚意を鳴謝す。（大正八年三月六日稿）

參考書目

花譜　市橋長昭撰　櫻井絢畫（圖書寮藏）
古今要覽稿（內閣文庫藏不忍文庫本）
櫻花圖　屋代弘賢撰　三好汝圭畫（家藏）
ゑゑ譜　堀良山序（家藏複寫本）
萬象寫眞圖譜　玉蘭齋貞秀畫
好古類纂園藝部類　武田醉霞編
櫻品　松岡玄達著
櫻花圖考（櫻第二號大正八年）　三好學
（東洋學藝雜誌第三六卷第四五一—四五二號大正八年）
Die japanischen Bergkirschen. Ihre Wildformen und Kulturrassen. Ein Beitrag zur Formenlehre.
（東京帝國大學紀要理科第三十九册第一編）　三好學著
一話一言（新百家說林五）　大田南畝著
櫻井孟素墓碑銘（事實文編第三）古賀樸撰
大日本人名辭書　第五版
大成武鑑

櫻花圖考

家藏の櫻花圖譜中に二册の稿本あり。上編は「櫻花圖六十四品」と題し、下編は「さくら三十」と題せり。書中に作者の名なきも、其の解說の書體より見るも、亦主として文學上の記事なることより見るも、屋代弘賢翁の自筆稿本なるや明なり。上編須磨の櫻の說の中に「弘賢」曰くとある字體の如きは翁の落款と寸分違はず。一々の櫻の名を記せる字體は解說の字體と一見異なるに似たれども、至細に檢すれば、是亦翁の筆たることは世に傳はれる翁の筆蹟と較べて疑なし。唯櫻の名を記せる文字は解說を記せる文字とは書寫の時を異にし、前者は後者よりも若書なるべく、後者は後年にて附け加へたるものなるべし。上下兩編の表紙の題字も無論翁の筆なり。又稿本中粗書に屬するものの中にも、尙翁の筆に成れるものあり。是れ隨時に書き加へたるが故に、文字の精粗不揃となれるものならん。其他他人の筆蹟の混ぜるものあり。

稿本中の畫は一々記名なけれども、「汝圭生寫」とあるもの三つあり。御嶽大門道の櫻・慧林寺の櫻・金櫻是れなり。汝圭とは文化より天保頃の江戸の畫家にして、世に横田汝圭と稱する人なるべし。汝圭字大復と云ひ、文化十二年出版の「諸家人名錄」の横田汝圭の條下には、他國遊歷中の由を記し、天保七年出版の「廣益諸家人名錄」には、西鳥越明神前住居の事を記せり。然るに武田信賢氏は予に松崎慊堂著「慊堂遺文」にある汝圭の碑文を示されたるが、同碑文には三好如圭とあり。又其中に四十歲に及び祝髮して横田外史と稱すとあり。本姓は三好氏なるが、世に横田汝圭として通ぜるならん。又碑文には如圭とあれども、墓碑には汝圭と刻めるにより（下文を見よ）、如は汝の誤寫なるが如きも、關根只誠編「名人忌辰錄」上卷二十八枚裏に「横田如圭復庵」とあり。且「號盤礴居士字大復如圭又汝圭に作る畫家なり天保十三寅年六月十八日歿す歲七十八」とあるを以て見れば、如圭とも云ひたるが如し。武田氏は予に谷中長久院にある同墓碑の文章の寫しを寄贈せられたれば、玆に其全文を載す。墓碑の文は「慊堂遺文」にあるものとは少しく異なる所あり。又墓碑の

文字の風化したるものは「慊堂遺文」より補へり。

三好老人汝圭墓銘

益城　松崎復撰

新潟　舘機書併隷題

君諱汝圭字偕藏三好修理太夫長慶之弟十河民部小輔一存八世之孫也一存生孫四郎長存仕關白秀次公公敗失祿子曰孫左衞門長英生義兵衞貞英與柳澤保山矦有舊及矦大用召之祿生虎之助常勝至職用人此爲君之曾祖生市郎衞恒託爲郡山城劍槍師祿二百三十石生二子長十郎太夫恒中嗣守祿次考之助諱恒虎自郡山來求他邦不得志爲修驗師號大行院曉古娶加藤氏生君君妙解六法發乎天機然自痛名族子孫而以小技名以其家世所傳又善擊刺與時名士平山行藏結交切劘韜鈐之學相豪也行藏家有隊卒之糧而君獨困無資以自立不免以繪畫謀活然牲廉介所作不稱意不苟出與人又見其人庸凡可部雖再三懇求不肯下一筆久之規行藏所帶劍長大非制而下之更則竟告之絕時四十亦知其志之不成祝髮郤刀自稱横田外史西游上國入郡山城掃先墓訪族人嘆其宗亦不奮經京攝紀勢數州反入甲州樂其山水住花輪郭十餘年年六十歸入都門舊時交遊彫零半盡君益侘傺終歲閉戶如有深念所畫精而世益不易也年七十八天保壬寅歲六月十八日乙末終本庄小女木川上僦舍君娶皆無所出以甲人飯島氏次子安兵衞主喪葬君於城北谷中里長久院先者大行君之墓側顧予年十七納交于君今五十六年舊矣客歲暑月君手其家系一卷來屬余去今因叙其家世續以予所知平生之概菊田秋宜中邨多祚識君最深因參之二君二君以爲實錄也乃係以銘曰

英雄之先。劍其筆也。殺代以張。求傳於必也。英雄之後。筆其劍也。斬釘斬鐵。留其光焰也。

畜君渝糜者。有於斯視其品也。

天保十四年歲在癸卯六月
癸酉朔十八日巳丑建

武田氏は尙汝圭の筆に成れる葡萄の畫が大森快庵の「甲斐叢記」前輯に載せられ、又十二支の畫が齋藤鶴磯の「支干考」（寛政五年版）に載せられたることを予に語られたれば、予は一々是等の書に就て見たるに、其畫の精密にして且巧なるを知れり。すべて汝圭の傳記並に其畫に關して知るを得たるは、武田氏の好意に由る所にして、予の深く同氏に謝する所ななり。

屋代弘賢撰「櫻花圖」に載せたる三好汝圭筆
甲州大門の櫻の圖（文字は弘賢自筆）

予は篤と稿本中の櫻の畫を檢せるに、仕上げたるものと、未成のものとあり。又花瓣の輪廓を線にて表はせるもの（線がき法）あれども、多くは無線にして、色にて表はせり（附け立て法）。畫によりて描き方は多少異れども、此稿本の畫は一に汝圭の筆たるは、其描法の同一なるに依りて知らる。是等の畫の中、御車還（みくるまがへし）・魁・元日櫻・松月など現存の品種にして稿本中に描かれたるものは、何れも色彩眞に迫り、能く特徴を表し、一見して其名を知るを得。又西行櫻其外の櫻も寫生風に畫かれ、葉柄の蜜腺、鱗片、花瓣の脈など細かに畫き出されたり。是れ古來の櫻花圖譜に多く見ざる所にして、汝圭の寫生的畫風の然らしむる所なり。予は從來櫻譜又は櫻の圖畫を見たるもの尠からず、寛政時代の櫻の寫生家として著名なる三熊花顛並に文化時代の櫻井雪鮮は姑く措き、天保頃の名手として、坂本浩然の如き、筆力雄健にして、其畫ける櫻の圖は美術畫として珍重すべきものなれども、唯其筆勢に任せて畫けるに依り、葉脈・花瓣の形狀など眞に遠ざかり、一々の櫻の特徴を描き分くるに至らず。之を寫生上より見たる浩然畫の缺點とす。明治時代に至りては、宮崎玉緒亦櫻の寫生に努めたれども、是亦美術畫たること多くして、櫻の特徴を十分に現出するに至らざりしを遺憾とす。此點に於ては浩然畫と同一轍なり。予は古今の櫻の圖譜、櫻の畫を見たる後偶然此稿本に現れたる汝圭の畫を見て、特に寫生畫として優れたるを認めたり。此描方を以てすれば必ずしも洋畫を俟たずして、櫻の品種を一々描き出すを得べし。

此稿本中、須磨・常盤・秋色等の櫻の解說は「古今要覽稿」の櫻の部にあるものと文章の全く同じきもの又は大半同じきものあり。然るに畫は同書にあるものとは全く別にして、一つも同じきもの又相似たるものなし。「古今要覽稿」の印行本は明治年代に至りて、我自刊我本と國書刊行本會とあれども、共に肝腎の彩色畫一切を省きたれば參考するに由なし。內閣文庫には「古今要覽稿」二部ありて、其中不忍文庫の藏書印あるものは、同書の幕府への獻上本にして、舊紅葉山文庫に藏せられたるものなるべし。然れども此本に溫古堂文庫の藏書印あれば、元は塙家の所有たりしものならん、又別に明治十三年購入の印ある所より見れば、此本が舊幕府より直に明治政府に傳はれるものに非ざるを知るべし。兎に角此本は「古今要覽稿」の原本卽ち正本にして、最も貴重なるものなり。內閣文庫には別に淺草文庫印ある一本あり。是れ複寫本にて畫の彩色など原本と頗る遠ざかり、櫻の葉の色の藍又は紅に過ぎたるもの多し。帝國圖書館本も亦複寫本なれども、淺草文庫本よりは古きが如し。前者の櫻の畫も亦色彩强烈にして原本の趣を失せり。又岩崎男爵家の靜

櫻の圖（葉の蜜腺を表はしたるもの）
屋代弘賢撰「櫻花圖」に載せたる曙

嘉堂文庫の藏本は同書の原稿本にして、屋代翁の自筆なるが、完備せずして、櫻の部は甚少し。又圖畫を添へず。

予は仔細に內閣文庫の原本を檢せるに、櫻の部其他の部に於ての解說は屋代翁の自筆に成れるもの少からず。各卷の首には一々源弘賢著又は源詮丈著と記し、他人の書寫にかゝる所にても、署名の弘賢の二字は自筆に成れるが如し。櫻の圖畫は鼠色の紙に描けるもの最も多く、此外に白色の紙に描けるものありて、此兩者は描き方を異にし、後者は前者よりも精巧にして、往々汝圭の畫風に似たるものあり。例へば匂櫻の內の一種掛川侯千駄木別莊の泰山府君の如き、又鹽竈の如き何れも一々葉柄の蜜腺までも表はし、頗る精密に描かれたるが、而かも花葉の鱗片などの形は正しく寫されたるものなし。汝圭の畫にては是等の部分の形狀をも明に表はせり。

宮崎玉緒筆「山櫻と里櫻の圖」
（斜に左方へ出てたるものは里櫻なり）

此の如く「櫻花圖」の櫻の畫は「古今要覽稿」の櫻の畫とは全く別なる所を見れば、屋代翁の別に描かしめたるものたるや明なり。「古今要覽稿」の櫻の畫二百五十一の中に「櫻花圖」の畫の一として用ひられたるものなきは不審なるが如きも、是蓋し前書の編輯に際して櫻の畫の一部を別の畫家に描かしめたるが故ならん。「櫻花圖」の畫が「古今要覽稿」の畫と全く異なるは偶〻此圖譜の價値を大ならしむる所にして、兩書相俟つて共に參考の資料となるなり。

「古今要覽稿」には編輯・圖畫・淨寫其他の擔當の人名を載せられたるもの處々にあり。櫻梅等の部の畫家は志村愛助平知孝とあり。岩崎常正の名は右の部にはなし。志村氏とは如何なる人なりしや審ならざれども、草木の部に處々に編輯兼圖畫として同氏の名出でたれば、屋代翁の下にて「古今要覽稿」の編輯・圖畫を擔當したる一人なるべし。同書の櫻の畫の大部分は市橋長昭撰「花譜」（櫻井雪鮮畫）より採れるものにして（此事は他處にて解說せり）何故に汝圭の畫を用ひざりしや疑ひなき能はず。然れども汝圭は「慊堂遺文」に據れば天保十三年七十八歳にて歿すとあれば、其生年は明和二年にして、寛政五年前記の「支干考」の畫を描けるは二十九歳の時に當たる。慊堂の碑文には、汝圭四十歳に達せる後遊歷に出て、甲州に留ること十餘年、六十歳に及んで江戸に歸り、繪畫に從事すとあり。汝圭の六十歳の時は文政七年に當れば、此稿本の畫も亦文政七年以後天保の

始までの時に成れるものならんか。尤も櫻花圖中の御嶽山の櫻・慧林寺の櫻・金櫻の如きは汝圭の甲州遊歴中の寫生にかゝるものにして、文化より文政の初に描けるものならん。又嵐山・芳野・初瀬・須磨等の櫻の畫も恐らくは遊歴中に成れる所なるべし。すべて此圖譜の畫の精巧にして筆力の優れたることより見るも、汝圭の極めて晩年の作には非ずと思はる。「古今要覽稿」の櫻の部の獻本は天保年間（國書刊行會本の卷一の首文に據る）なるが、櫻花圖の畫は前書の櫻の畫の選擇に先ちて成れるものなるべし。尤も編中の解說は後年「古今要覽稿」の櫻の部の成れる後に書き加へたるものあるや明なり。

此稿本の舊藏書印中に知孝と記せるものあり。朱印の色最も古るし。知孝とは予の考へにては、前記の志村氏にして、此書を後に屋代翁より獲て藏せるものならん。

屋代翁は塙門の博識にして、藏書最も多く、國書の保存を圖り、又古今の文獻を涉獵して汎く事物の考證に盡瘁し、加ふるに書法の妙を以て世に知られたるが、翁が亦櫻の考證に努め、當時の名花を蒐集して一々寫生せしめ、以て其形狀を表はし、其來歴を明にして、之を成書として後世に傳へたるの功は沒すべからず。予は從來「古今要覽稿」に依りて、翁の櫻品解說の勞を思へるが、今や此「櫻花圖」によりて益〻翁の志を感ぜずんばあらず。汝圭は畫に巧なりしに拘らず、其畫く所多く世に傳はらずして、其名顯はれず。畫家年表の類にも之を逸せるものあるは惜むに勝へたり。

然るに圖らずも此稿本の畫が汝圭の眞蹟にして、之によりて其筆意を十分に知るを得たるは喜ぶべし。

櫻花圖上下兩編の畫の題目は左の如し。圖中花名なきものは其形狀と色觀とを擧げ、括弧內に入れたり。其他の括弧內の文字も予の加へたるものなり。

上編に載せたるもの

枝垂柳の花
・（青芽白花一重）
（茶芽白花一重）
御嶽山櫻　汝圭生寫
（青芽白花一重）
初瀨
千里香
嵐山
春日局鉢植櫻（紅枝垂）
芳野櫻
匂櫻
水あゐ淺黃櫻
源氏嫩木櫻
彼岸櫻（紅彼岸）
深川新寺の櫻（青葉山櫻）
（青芽淡紅八九瓣）
慧林寺櫻　汝圭生寫
（青芽淡紅六七瓣）
旗櫻
（黃芽白花一重）
紅枝垂
須磨寺若木櫻
（青芽淡紅五六瓣）
赤目櫻
一文字
兒さくら
西行櫻
桐ヶ谷
一重樓間
熊谷櫻
王昭君
常盤櫻
同
同
普賢象
武庫櫻
御車還
雷電
姥櫻　ト云虎尾
殿さくら
（赤芽淡紅大輪五六瓣）
長州緋櫻
元日櫻（緋寒櫻）
魁
淺黃櫻
十月櫻
同
同　六葉
醍醐櫻
江戸櫻
南殿
鳳來寺

伊勢櫻　白妙
伊勢櫻　泰山府君
東緋櫻　小督櫻
曙櫻　さゞ波

下編に載せたるもの

左近櫻　夕山櫻
山櫻　又
（葉櫻と實）　將門手植の櫻
菊櫻　尾州　念珠掛櫻
（黃芽白花一重）　松月
千代枝垂　千瓣緋櫻
鵜枝垂　匂櫻
（靑芽淡紅大輪一重）　名月
さゞ波　淺黃しぼり

鞍馬うづ櫻　同
柏木村右衞門櫻　地主
金櫻　汝圭生寫

以上六十五、內櫻六十四

小汐田　秋色櫻
紅延命　（無葉白花彼岸性）
いとくゝり　眞のしほがま
照花女　（關山）
奈良の櫻（八重）　毛毬櫻
（御衣黃）木母寺御用木　奥都
犬櫻　卽實

以上三十二

（櫻第二號大正八年）

草木寫生圖中の櫻の圖に就て

今夏「草木寫生圖」と題せる一冊の畫稿を獲たり。美濃紙二つ折にして、花卉一種づゝ寫生し、一々名を記し、總計八十三枚百六十六圖を收む。用紙は生紙（きがみ）にて、年代を經たる爲めにや淡茶色となれり。唯卷末に菊を畫ける十枚だけは稍〻白色を保てり。此分は裏打なきも、前の分は悉く裏打をなさせり。處々に少しづゝ蟲喰あり。

圖は全く寫生風にして、標本畫・考證畫として作れるものなるが故に、彼の美術畫に於ける如く筆勢の潑剌たるを見ず。固より今日の植物寫生畫の如く凡百の細點までも現せるものに非ざるも、各自の種類を甄別するに必要なる特徵は概ね畫面に出でたり。主として附立描法に依れるが、往々線書きを混ぜるものあり。彩色美麗にして心地良し。葉脈は金泥を用ひたるもの多し。雌雄蕋の數など概ね正しく表はせり。

各圖の植物名は第一頁（二ッ折となせる紙の第一枚の表）にては圖の左（多くは上方）、第二頁（裏）にては右（多くは上方）に記され、順次同樣に認められたり。卷中、圖に名なきもの十三あり。

此圖冊には全く畫家の記せざるも、予は其畫風によりて圖は三好汝圭の作、又圖傍の文字は其書體によりて屋代弘賢の筆なるを知れり。汝圭の畫ける植物又は動物の圖はすべて細緻なる寫生風、卽ち標本畫風なることは、彼の齋藤鶴磯の著はせる「支干考」の十二支の圖又は屋代弘賢撰の「櫻花圖」（彩色せる稿本にして、多數の櫻花を描寫せるものなり）。にある櫻畫の描法によりて明なり。特に記すべきものは此「草木寫生圖」中の櫻花の圖（彼岸櫻以下總計十三）は右の「櫻花圖」を載

せたる櫻圖の描法と一致することにして、兩者が同一人の筆に成れるや毫も疑を容れず。次に一々の圖の傍に記せる文字の書體が前述の如く屋代翁の筆なることは翁の筆跡例へば「古今要覽稿」の内閣文庫藏不忍文庫本と比較すれば直に分明となるべし。予の藏せる屋代翁の自筆稿本の中「都の手ぶり」を寫せるものは筆意十分に表はれたれば、何時も翁の手鑑となせるが、今之と「草木寫生圖」の文字とを較べ見るに、全く一體なるを知れり。

屋代翁が事物の考證に畢生の力を竭し、殊に草木の種類と其來歴とを明にせんが爲め、畫家をして頻に寫生を爲さしめたるや一々證すべし。而して其成書となりて今日に傳はれるは「古今要覽稿」なるが、同書の資料又は參考として當時多數の寫生畫を作らしめたる中に、櫻の如き著しき花木又は庭園普通の花卉の如きは特に多く描寫せしめたるを見る。斯くして成れる植物畫の稿本は幾何あるや詳ならざれども、從來予の知り得たる所を以てすれば、其數決して少からざるが如し。前記の「櫻花圖」は其一なるが、今此「草木寫生圖」を見るに又斯かる目的によりて作れるものならむ。

屋代翁の爲めに最も描寫に努めたるは三好汝圭なるべし。「古今要覽稿」の櫻圖の中「花譜」と「櫻品」より採れるもの丶外には汝圭の筆と思はる丶ものあり。

廣瀨花隱も亦同時代にして其屢〻生寫せる「三十六櫻圖」又は「六々櫻圖」は當時世に持て囃されたるが、而も「古今要覽稿」の櫻圖中には、同人の筆蹟と思はる丶もの（眞普賢象の圖）に過ぎず。（内閣文庫藏不忍文庫本に據る）

要するに「草木寫生圖」一卷は屋代翁の考證資料として作れるもの丶一にして、其成れるは恐らくは文政の頃ならんか。爾來殆ど百年間幸に保存せられ、之によりて古來花卉培養の來歴を參考するの一助となれるは喜ぶべし。加之前記の「櫻花圖」に於ける如く此書に於ても亦隱れたる畫家三好汝圭の作品を見るを得たるは快事と云ふべし。予は尙同人の繪畫に於ける事蹟が次第に世に知られ、花卉寫生家としての功勞の認められんことを望むものなり。

「草木寫生圖」中前記の如く卷末の菊の圖十數枚は其紙質の稍〻異なる外、圖式並に圖傍の文字も同じからず。此分は或は後に附加せるものに非ざるか。

書中の櫻の圖は左の如し。櫻名の下の文字は予の加へたるものなり。

彼岸さくら　薄紅
ふげんざう　白八重
白かわ　白八重
しほがま　紅八重　重ね厚し
くまがへ　紅八重　重薄し
ひざくら　薄紅八重
楊貴妃　薄紅八重　重ね薄し
きりがや　白八重　口紅大輪
大てまり　口紅八重　大輪
太山府君　口紅八重
白糸　口薄紅
金七　薄紅八重

（櫻第五號大正十一年）

三熊花顛櫻花帖考並に其解題

三熊花顛が櫻の愛護者として、櫻の寫生家として、又「續近世畸人傳」の著者として世に知らるるは言を俟たず。花顛は寛政六年六十五歳にして歿せるが、其生涯中に櫻の名所を尋ね、櫻の名種名木を探索し、其名稱を正し、これを寫生して後世に傳へたる功は沒すべからず。

花顛名は思考　通稱主計、字は海棠又は介堂といひ、京都鳴瀧に住し、伴蒿蹊と友として善し。文學に通じ、殊に繪事を克くせるが、櫻の生寫は其最も長ずる所、又最も好む所たり。其櫻を畫がくに當つてや、一々の種類又は品種の特徴を區別して誤らざることを期せり。彼の想像を以て畫くものの類に非ず。

花顛は畫を月湖に學び、描法古雅にして而かも艶麗、品位最も高し。故に一面美術畫たると共に、花序・花瓣の形狀と若葉の色など一々の櫻に就て生寫したるを以て、他面には品類識別の爲にする標本畫ともなる。花顛の妹露香も亦繪事に親み櫻の生寫を克くせり。

花顛の門人に廣瀨花隱あり。露香の門人に織田瑟々女あり、共に櫻畫に長ぜり。天保中坂本浩然多く櫻を畫き、近世に至つて間西崕（はざま）・櫻戸玉緒も亦櫻畫に名あり。是等の畫家殊に浩然の如きは筆

桐ヶ谷

三熊花顛の櫻花帖に載せたるもの

勢の潑剌たるものあるも、色彩濃厚に過ぎ、覇氣多きの憾あり。此點より見れば花顚の古雅優美なる描法は後人の企て及ばざる所なり。

花顚の櫻畫の世に傳ふるもの頗る少く、特に其精巧なるものは甚だ稀なり。去る明治四十五年以來東京・京都・奈良・岐阜等に櫻花展覽會の開かれたるとき參考品として陳列されたるものゝ中には花顚の櫻の畫幅の優美なるものを見たり。

花顚の櫻の畫幅は稀なるにもせよ、時として見るを得れども、其櫻花寫生畫帖に至つては殆ど絶無と言はざるべからず。

花顚の三十六品の「櫻花帖」あることは蜀山人の「增訂一話一言」に記せり。蜀山人は植木三郎が京都より持來れる露香摹寫の「櫻花帖」に就て、帖中の序跋を一々詳細に述べ、「露香存生三十六品を畫かきて世に全ふするものは紀州侯へ一帖奉り並に此帖と二品より外に我國になし」と述べたり。此帖には「櫻畫三十六品者兄三熊思孝圖也　丁巳春　露香女臨寫」とあり。丁巳は寛政九年にて花顚歿後三年に當る。（「櫻花帖」並に下文の「花譜」に關する記事は拙稿「市橋長昭撰花譜の解題並に其文獻的價値」より引用せり）。**後記**　此露香筆櫻花帖に就ては別稿「櫻花藪」參照せられたし

予は花顚の「櫻花帖」に關して舊紀州家たる德川侯爵家に問合せ、又故德川賴倫侯にも質せるが、斯かる畫帖は同侯爵家にこれなき由なり。然るに大正八年の春、宮内省圖書寮に藏せらるゝ市橋星

峰公の撰める「花譜」を閲するに及んで、其第一帖は三熊花顛の「櫻花帖」を櫻井雪鮮が摹寫せることを知れり。雪鮮は星峰公の「花譜」の櫻の圖を作れる人なり。

右の「花譜」第一帖の箱蓋にも「大坂木村孔恭輯平安三熊花顛畫江戸櫻井絢摹」とあり。又其表紙には「花譜花顛居士原輯」と題せり。

寫生の品種は左の如し。

小櫻	小櫻重	糸櫻	糸櫻重	山櫻	櫻
山櫻青葉	芳野	小山櫻	八重山櫻	玉王	
伊勢桐谷	江戸單	江戸櫻	鹽竈		
虎尾單	匂櫻	大膳	地主	淺黄	
淺黄重	普賢堂	法轉寺	廊間	時雨	
金龍寺	奈良曙		樺	常盤	
三芳野	有明				

（總計三十四圖）

末頁に「享和癸亥南至前二日傚華顛居士圖櫻井絢寫」とあり。圖は附立てに描き、美麗なる彩色を施せり。花瓣は胡粉にて白く畫き、花瓣の重れる處は其儘重ね胡粉を厚く加へたり。描方概して簡單なるも、特色はよく現れたり。

雪鮮の摹寫せる花顛の「櫻花帖」は大阪の蓊葭堂藏本にして、所載の櫻品は上述の如くなるが、蜀山人記載の露香臨寫の「櫻花帖」の内容は知るに由なし。花顛は三十六櫻品の圖を人の求によつて往々作れるが如きも、是等の櫻花帖並に蜀山人記載の二帖も、今日何れにあるや更に其所在を知る能はざるは或は人の祕藏にかゝり世に現はれざるに由るか、何れにもせよ櫻花の寫生家として古今第一人の稱ある花顛の力作の徒に埋沒するは、櫻品研究の上よりも、亦櫻畫鑑賞の上よりも惜むべきことゝ云ふべし。

然るに予は昨年偶然花顛の山櫻の畫幅を得たるが、今回亦某氏の斡旋によつて同人筆「櫻花帖」二冊を手にすることゝなれり。帖の大きさは竪一尺七分、幅八寸七分、圖の大きさ竪一尺、幅八寸なり。紙本にして圖は一枚一圖、傍に細字にて櫻の名を記せり。描法は附立にて、櫻の枝は一筆にて淡墨にて畫き、花の白色は胡粉にて厚く出し、花瓣の重なる所には胡粉を厚く盛れり。雄蕊は細く短く畫き、葯は淡黄色に圓るく現せり。花序・花梗・苞・小苞・蕚筒・蕚齒等の部分も一々の櫻によつて、それ〴〵畫き分けたり。若葉は實際の色を現し、殊に發生の程度に應じ色の變化を示せるは苦心の跡を見るべし。

葉脈は細く畫き、彼の浩然や瑟々の畫に見るが如く脈を太くし且脈端を長く突出せしむる異樣の畫方とは全く異なり。圖は何れも自然に生ぜる櫻樹の一の枝を天然の位置に畫がけるものにして、

上方より斜に下れるもの、下方より斜に上れるもの、横に出でたるものなど種々に位置を變へ、又枝と共に幹の一部を現せるものあり。花隱の圖の如く一本の折枝を畫き、折口を長く曲げたるが如きものは絶えてなし。

櫻畫全體を通じて櫻の優しく、しほらしき趣は十分に現れたり。多く技巧を用ひざるやうに見え、而かも鍛錬老熟の筆意を窺ふべし。花顚の櫻畫の妙は一に茲にあり。

第一帖の首には森川竹窓が隷書にて錄せる六如上人の「題櫻花帖」を載せたり。竹窓名は世黃、字離吉、別號良翁、浪華の人、書に巧なり。多年に亙り古人の筆蹟を摹寫し「集古浪華帖」五帖（文政二年）を編輯せり。天保元年十一月二日六十八歳にて歿す。（竹窓三十二歳の時は寛政六年にして、花顚の歿年なり）。竹窓の書が遙に後に成れるは其紙色の新しきによりて知るべし。恐らくば花顚歿後「櫻花帖」所藏者の請によりて書せるものならんか。

櫻花帖に載する所の櫻品の圖左の如し。（櫻品の名は一々の圖の傍に花顚の記せるもの、櫻品の特徴は予の加へたるものなり）。

第一帖

えどざくら　茶芽・白大輪・八重
有明　黃茶芽・白中輪・一重・太き幹を現せり
匂櫻　茶芽・白小輪・一重
江戸櫻　黃茶芽・白中輪・一重
三芳野　黃芽・白中輪・一重
小櫻　無葉・白小輪・八重・細枝
不斷櫻　茶芽・白小輪・一重・細枝
曙櫻　茶芽・中輪・八重・白色淡・紅・ぼかし・蕾紅色・幹を現はせり
伊勢櫻　黃芽・白大輪・八重・花群り着く・幹を現せり
をもの櫻　黃芽・白大輪・八重・長花梗
八重櫻　黃茶芽・白中輪・八重
あさぎざくら　黃茶芽・白色・淡藍ぼかし・中輪
普賢堂　黃芽・白大輪・八重・花中一二の小葉あり
山櫻　赤芽・白中輪・一重
淺黃櫻　黃芽・白色淡藍・ぼかし・大輪・一重
にほひ櫻　赤芽・白中輪・一重
鹽竈櫻　黃芽・白中輪・八重
有明櫻　黃茶芽・白大輪・八重

最後の有明櫻の圖に次の如く記せり。

右十有八帖　應人索製

花顚思孝

第二帖

小櫻　無葉・白小輪・一重・短花梗・細枝
山櫻　青芽・白小輪・一重
廊間櫻　黃芽・白大輪・八重
いと櫻　黃芽・白大輪・八重
法轉寺　黃芽・白中輪・八重
樺櫻　青芽・白小輪・一重・綠蕚・幹を現はせり
楊貴妃　青茶芽・白大輪・八重
小櫻　無葉・白中輪・八重

いと櫻　無葉・白中輪・一重
婆櫻　無葉・白中輪・一重・花群り着く・花梗綠色
時雨櫻　青茶芽・白小輪・一重・細枝
虎の尾　黃芽・白大輪・八重・花群り着く・枝直立
芳野山櫻　黃茶芽・白小輪・一重
若木櫻　黃茶芽・白中輪・一重・細枝
伊勢櫻　赤茶芽・白大輪・一重
山櫻　青茶芽・白小輪・一重
金龍寺　青芽・白中輪・八重
桐ヶ谷　黃茶芽・白大輪・八重

最後の桐谷の圖には左の如く記せり。

右十有八幀　應人索製

花顚思孝

右二帖の櫻品は殆ど皆昔時の櫻譜に見ゑたり。廊間は「櫻品」には樓間とあれども、他の櫻譜には廊間とあり。

若木櫻は「櫻品」には不斷櫻の一名とあるも、本帖及び他の櫻譜にては別の櫻となせり。普賢堂は普賢象の別名にて古來兩名とも行はれたるも、今日にては專ら普賢象と呼ぶ。

法轉寺は明に法輪寺の誤なるべければ、予は「花譜」の第一帖たる雪鮮摹寫の花顚の「櫻花帖」を閲せるとき、法轉寺とあるを見て前記の文中に其由を述べたるが、今や此「櫻花帖」を觀るに及んで、上記の如く法轉寺とあるに驚けり。法輪寺は「櫻品」其他昔時の圖書に現れたる櫻なるが、未法轉寺と稱する櫻あるを聞かず。是れ花顚が誤つてかく記せることは後に述ぶる露香の「三十六櫻花帖」によりて明なり。然れ共「花譜」の據れる蒹葭堂藏本の「櫻花帖」の外、本帖にも同樣に法轉寺と記せる所を以て見れば、花顚は屢〻かく認めたるものと考へらる。(此「櫻花帖」が蒹葭堂藏本に非ざるは內容の多少異なるによりて知らる)。蜀山人は前述の記事中に「此櫻花帖はたゞ人のもてあそび物ならずみな正花を以てうつし得たれば春每に櫻を愛する人の鏡とも見るべし」と大に「櫻花帖」を稱揚したるも、徒に名家の序跋等を詳錄せるのみにて帖中の櫻品圖名を擧げざれば、同帖に法轉寺と記せるや否やを知るに由なし。

金龍寺は「櫻品」には載せず、又「花譜」にも見えざれども、「古今要覽稿」にはこれあり。

蒹葭堂藏本の「櫻花帖」の圖が如何に畫かれたるかは「花譜」第一帖に收めたる雪鮮の摹寫によりて見る外なし。雪鮮の摹寫は長一尺二寸、幅九寸一分の絹地に每頁約二三圖を收め、每圖僅に一つの小枝片を畫がけり。若し右の原本が此の如くなりとせば、今回得たる「櫻花帖」とは圖の大きさに於て甚だ異なり。後者にては長一尺、幅八寸の紙面に一種づゝ枝又は枝と幹の一部を天然の姿勢のまゝ畫きたり。蒹葭堂の原本の圖が果して雪鮮の摹寫せる大きさなりしか疑を存ぜざるべからず。

然れども雪鮮の摹寫と今回の原本とを比較するに、圖の大きさは別なるも、兩本に畫がかれたる

櫻品の描法は互に一致し、同一手に成れるを見るべし。例へば原本に於ける時雨櫻の特徴が摹寫本に於ても同樣に現れたるが如し。

「櫻花帖」は櫻花寫生の最初の立派なる畫譜にして、科學的見地よりするも亦美術的見地よりするも櫻花に關する重要なる文獻に屬す。該畫帖の圖が美術的寫生なることは、例へば金龍寺の畫には朝日に映ぜる赤き空をほんのり現し、靜に散れる二三の花瓣を添へ、有明の一の圖には殘月の景、同じ櫻の他の圖にはまだ明けきらぬ薄暗き空を現し、曙櫻の畫にも曉の空を現せるが如し。然れども是れ故意に背景を畫けるには非ずして、櫻の一々の品種に應じて自然の趣の現はるゝやうに意を用ひたるを知るべし。

此「櫻花帖」の圖は花顛が何れの時代に作れるものなるや不明なり。蜀山人の記せる「櫻花帖」には亞三臺源前秀（芝山權中納言）の跋（寛政十一年）を掲げ、「さいつ頃三熊思孝といふものあり花を愛して四十の春を送りぬ。ことに丹青をこまやかにして我邦に始めて櫻の三十六品をわけ寫す云々」と述べたり。花顛の「四十の春」は明和六年に當れば、此頃より櫻品の寫生に努めたるものならんか。「續近世畸人傳」に載せる六如上人（玆周、京都の詩僧、文化年中寂す）の「題櫻花帖」は寛政五年（花顛の歿年より一年前）に作れる所を以て見れば、花顛の三十六櫻品圖は明和・安永・天明・寛政に亙れる二十餘年の間に時として畫かれたるものならんか。

前にも述べたる如く此「櫻花帖」は予の閲せる唯一の原本にして、予が始めてこれを手にしたる時は恰も發掘されたる寶典に接せるの感ありて悅を禁ずる能はざりし。然れども予は徒にこれを最初の優れたる櫻品寫生畫として珍重するには非ずして、これによつて當時の櫻品の正確なる名稱を知り、以て後世に於ける櫻品名の誤謬を正さんと欲するなり。此「櫻花帖」の外に同樣の原本（蓁葭堂藏本其他）の世に遺れるものあるべしと雖も、今日にてはこれに關して何等知る所なし。他日幸に是等の埋もれたる寶の一二が發見せらるゝに至らば、吾人の櫻品研究上得る所更に大なるべし。

爰に露香の「三十六櫻花帖」に就て述べんとす。露香も亦兄に亞いで櫻畫に巧なりしは今日に遺れる作品によりて知らる。前記の露香臨寫の「櫻花帖」は知るに由なきも、予の觀たる同女の「三十六櫻花帖」は二あり。其一は醍醐寺の「倭花名品」と稱する一卷にして、竪八寸四分、幅六寸六分の絹本なり。載する所の櫻圖は左の如し。

小櫻　紅の小櫻　きさらぎ櫻　かさねの小櫻
糸さくら　單の伊勢　重ねの伊勢　青葉の山櫻
みよしの　重の糸櫻　赤葉の山櫻　うば櫻
鹽がま　入相櫻　ひとへの江戸　地主
芳野　きりが谷　かさねの江戸　とらのを

明ぼの　匂　櫻　をもの櫻　普賢象
時雨櫻　楊貴妃　奈良の八重櫻　法輪寺
白の匂　樺ざくら　ひとへの淺黄櫻　廊間櫻
常盤櫻　重の淺黄櫻　有明　重ねの有明

終りに平安三熊氏露香女とあり。

此繪卷を見るに、櫻品三十六種は前記の「櫻花帖」と大同小異なり。唯本圖卷には普賢象と記し、又明に法輪寺と書せるを以て見れば「櫻花帖」の法轉寺の誤書なるを知るに足れり。

「櫻花帖」の圖は前に述べたる如く一面美術的寫生なるが、露香の櫻畫に於ても亦同樣の筆意を知るべし。例へば時雨櫻に風雨の趣を見せ、曉櫻には曙の空を現はせるが如し。

右の醍醐寺藏本の外に予の觀たる露香の寫生圖は吉野山の喜藏院の藏本たる三十六櫻品の畫帖あり。文化元年伴嵩蹊の序あり。載する所の櫻圖は左の如し。

小櫻　八重小さくら　小山櫻　小櫻
糸櫻　いせ櫻　八重伊勢櫻　青葉山櫻
よしの山櫻　八重いと櫻　山櫻　うば櫻
鹽竈　入相櫻　江戸玉　王

みよしの　きりが谷　江戸八重　虎尾
あけぼの　にほひ　をものさくら　普賢堂
時雨櫻　楊貴妃　八重櫻　法輪寺
にほひさくら　樺さくら　淺黄櫻　廊間櫻
常盤櫻　八重淺黄　有明　あり明櫻

丙辰秋日　とあり（丙辰は寛政八年なり）

本畫帖は竪八寸八分、幅五寸六分の大ささにして、櫻品は前繪卷のものと殆ど同一なり。圖は前者の方遙に美術的なり。

斯く露香の「三十六櫻花圖」は花顚の「櫻花帖」と其描方も所載の櫻品も殆ど相同じ。後年廣瀨花隱も師花顚に倣つて、「三十六櫻譜」又は「六々櫻譜」と題して三十六の櫻を描寫せるが、其櫻品は頗る花顚又は露香が畫けるものと異なりて、左記の種類又は品種より成れり。

元日　小垂枝手枕山
香八重單路頭虎尾芝山
夕榮三吉野艶玉緒衣笠
曉八重地主瓜紅法輪寺